



Informatica® Data Integration Hub
10.5

インストール & 環境設定ガイド

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica ロゴ、PowerCenter、および PowerExchange は、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web (<https://www.informatica.com/trademarks.html>) にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

特許については、<https://www.informatica.com/legal/patents.html> を参照してください。

免責: 本文書は、一切の保証を伴わない「現状渡し」で提供されるものとし、Informatica LLC は他社の権利の非侵害、市場性および特定の目的への適合性の黙示の保証などを含めて、一切の明示的および黙示的保証の責任を負いません。Informatica LLC では、本ソフトウェアまたはドキュメントに誤りのないことを保証していません。本ソフトウェアまたはドキュメントに記載されている情報には、技術的に不正確な記述や誤植が含まれる場合があります。本ソフトウェアまたはドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。

NOTICES

この Informatica 製品（以下「ソフトウェア」）には、Progress Software Corporation（以下「DataDirect」）の事業子会社である DataDirect Technologies からの特定のドライバ（以下「DataDirect ドライバ」）が含まれています。DataDirect ドライバには、次の用語および条件が適用されます。

1. DataDirect ドライバは、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。
2. DataDirect または第三者は、予見の有無を問わず発生した ODBC ドライバの使用に関するいかなる直接的、間接的、偶発的、特別、あるいは結果的損害に対して責任を負わないものとします。本制限事項は、すべての訴訟原因に適用されます。訴訟原因には、契約違反、保証違反、過失、厳格責任、詐称、その他の不法行為を含みますが、これらに限るものではありません。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2021-06-28

目次

序文	7
Informatica のリソース.....	7
Informatica Network.....	7
Informatica ナレッジベース.....	7
Informatica マニュアル.....	7
Informatica 製品可用性マトリックス.....	8
Informatica Velocity.....	8
Informatica Marketplace.....	8
Informatica グローバルカスタマサポート.....	8
 第 1 章 : インストールの概要	9
Data Integration Hub のインストール.....	9
追加のインストールコンポーネント.....	10
 第 2 章 : はじめる前に	11
ユーザーアカウント.....	12
ポート番号.....	14
 第 3 章 : インストール前のタスク	15
インストール前のタスクの概要.....	15
最小システム要件の確認.....	16
データベース要件の確認.....	17
前提となるソフトウェアのインストール.....	18
PowerCenter pmrep コマンドラインユーティリティのインストールと設定.....	19
環境変数の設定.....	19
Microsoft Azure SQL データベースのデータソース名の作成.....	20
Windows オペレーティングシステムでのデータソース名の作成.....	20
Unix オペレーティングシステムでのデータソース名の作成.....	21
ドキュメントストアのディレクトリのセットアップ.....	22
Microsoft SQL Server データベースの設定.....	22
 第 4 章 : Data Integration Hub のインストール	23
Data Integration Hub のインストール (Windows).....	23
手順 1. インストーラの実行.....	23
手順 2. インストール設定の定義.....	25
手順 3. Data Integration Hub リポジトリの設定.....	28
手順 4. オペレーショナルデータストアのセットアップ.....	32
手順 5. ユーザー認証の設定.....	34
手順 6. ドキュメントストアと Web サーバーの構成.....	39
手順 7. PowerCenter 設定の構成.....	42

手順 8. Informatica Data Quality 設定の構成.	46
手順 9. インストールの完了.	47
UNIX オペレーティングシステムでの Data Integration Hub のコンソールモードでのインストール	48
手順 1. インストーラの実行.	48
手順 2. インストール設定の定義.	48
手順 3. Data Integration Hub リポジトリの設定.	50
手順 4. オペレーショナルデータストアのセットアップ.	52
手順 5. ユーザー認証の設定.	53
手順 6. ドキュメントストアと Web サーバーの構成.	55
手順 7. PowerCenter 設定の構成.	56
手順 8. 処理エンジン設定の構成.	58
手順 9. インストールの完了.	59
サイレントモードでの Data Integration Hub のインストール.	59
インストールプロパティの設定.	60
インストーラプロパティの設定例.	67
サイレントインストーラの実行.	69

第 5 章 : インストール後の作業. 71

インストール後の作業の概要.	71
PowerCenter の Data Integration Hub サーバープラグインの登録.	72
Run Publication Subscription Web サービスの設定.	73
Web サービスの PowerCenter へのインポート.	73
サーバー設定の確認.	74
Windows 認証の資格情報の設定.	74
パブリケーションリポジトリへのデータベースパーティションのセットアップ.	74
Hadoop パブリケーションリポジトリに対応するための環境の設定.	75
操作コンソールへのログイン.	78
Data Integration Hub リポジトリへの接続の設定.	78
Microsoft Azure SQL データベースへの接続の設定.	80
Data Integration Hub ユーザーの同期.	81
「ダッシュボードとレポート」コンポーネントの有効化.	81
「ダッシュボードとレポート」ライセンスの登録.	82
PowerCenter へのオペレーショナルデータストアイベントローダーワークフローのインポ ート.	82
Data Integration Hub ユーザーの同期.	83

第 6 章 : Data Integration Hub のアップグレード. 84

Data Integration Hub のアップグレード概要.	84
アップグレードする前に.	85
Data Integration Hub のアップグレード (Windows)	86
手順 1. インストーラの実行.	86
手順 2. インストール設定の定義.	87
手順 3. Data Integration Hub リポジトリの設定.	89

手順 4. オペレーショナルデータストアのセットアップ.	94
手順 5. Web サーバーの設定.	96
手順 6. PowerCenter 設定の構成.	97
手順 7. Data Quality 設定の構成.	100
手順 8. インストールの完了.	101
Data Integration Hub のアップグレード (UNIX)	102
手順 1. インストーラの実行.	102
手順 2. インストール設定の定義.	102
手順 3. Data Integration Hub リポジトリの設定.	103
手順 4. オペレーショナルデータストアのセットアップ.	105
手順 5. Web サーバーの設定.	107
手順 6. PowerCenter 設定の構成.	108
手順 7. 処理エンジン設定の構成.	109
手順 8. インストールの完了.	110
アップグレードした後に.	110
設定への変更の再適用.	111
ダッシュボードとレポートのライセンス登録.	112
オペレーショナルデータストアローダーワークフローの置き換え.	112
Windows 認証の資格情報の設定.	113
セキュリティ設定ファイルの更新.	113
Run Publication Subscription Web サービス API の更新.	113
Data Integration Hub サービスのリスタート.	113
無効化されたサブスクリプションの有効化.	113
第 7 章 : Data Integration Hub の起動と停止.	115
Data Integration Hub の起動と停止の概要.	115
Windows での Data Integration Hub の起動と停止.	115
[Start (スタート)] メニューからの Data Integration Hub の起動と停止.	115
バッチスクリプトを使用した Data Integration Hub の起動と停止.	116
Linux での Data Integration Hub の起動と停止.	116
第 8 章 : 省略可能な Data Integration Hub 設定.	117
オプションの Data Integration Hub 設定概要.	117
Data Integration Hub サーバーの RMI ポート番号の変更.	118
ログ.	118
デフォルトのログファイル.	119
ログメッセージの宛先のカスタマイズ.	119
最大の Java ヒープサイズの変更.	122
データベースユーザーアカウントの資格情報の変更.	123
Data Integration Hub Hadoop サービスの資格情報の変更.	124
ダッシュボードの設定ファイルの更新.	125
PowerCenter 統合サービスの Data Integration Hub へのアクセスの設定.	126
PowerCenter バージョン 10 でのリポジトリ接続の設定.	127

第 9 章 : Data Archive 用の Data Integration Hub アクセラレータのインストールと設定	128
Data Archive 用の Data Integration Hub アクセラレータのインストールと設定の概要	128
インストール前の手順	128
Data Archive 用 Data Integration Hub アクセラレータのインストール	129
Data Archive ソース接続の設定	130
第 10 章 : Data Integration Hub のインストールに関するトラブルシューティング	131
Data Integration Hub のインストールに関するトラブルシューティングの概要	131
Data Integration Hub Hadoop サービスのトラブルシューティング	131
インストールログファイル	134
第 11 章 : アンインストール	135
アンインストールの概要	135
Windows オペレーティングシステムからの Data Integration Hub のアンインストール	135
UNIX オペレーティングシステムからの Data Integration Hub のアンインストール	136
索引	137

序文

『Data Integration Hub インストール & 環境設定ガイド』の指示に従って、Data Integration Hub のインストールと設定を行います。このガイドには、インストールを完了するために実行する必要があるインストール前およびインストール後のタスクに関する情報も含まれています。

Informatica のリソース

Informatica は、Informatica Network やその他のオンラインポータルを通じてさまざまな製品リソースを提供しています。リソースを使用して Informatica 製品とソリューションを最大限に活用し、その他の Informatica ユーザーや各分野の専門家から知見を得ることができます。

Informatica Network

Informatica Network は、Informatica ナレッジベースや Informatica グローバルカスタマサポートなど、多くのリソースへの入口です。Informatica Network を利用するには、<https://network.informatica.com> にアクセスしてください。

Informatica Network メンバーは、次のオプションを利用できます。

- ナレッジベースで製品リソースを検索できます。
- 製品の提供情報を表示できます。
- サポートケースを作成して確認できます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

Informatica ナレッジベース

Informatica ナレッジベースを使用して、ハウツー記事、ベストプラクティス、よくある質問に対する回答など、製品リソースを見つけることができます。

ナレッジベースを検索するには、<https://search.informatica.com> にアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica マニュアル

Informatica マニュアルポータルでは、最新および最近の製品リリースに関するドキュメントの膨大なライブラリを参照できます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

製品マニュアルに関する質問、コメント、ご意見については、Informatica マニュアルチーム (infa_documentation@informatica.com) までご連絡ください。

Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス (PAM) には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。Informatica PAM は、<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices> で参照できます。

Informatica Velocity

Informatica Velocity は、Informatica プロフェッショナルサービスが開発したヒントとベストプラクティスのコレクションで、多数のデータ管理プロジェクトから得た実体験に基づいています。Informatica Velocity には、世界中の組織と連携してデータ管理ソリューションを計画、開発、デプロイ、管理する Informatica コンサルタントによる集合知を表しています。

Informatica Velocity リソースには、<http://velocity.informatica.com> からアクセスしてください。Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、ips@informatica.com から Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

Informatica Marketplace

Informatica Marketplace は、お使いの Informatica 製品を拡張したり強化したりするソリューションを検索できるフォーラムです。Marketplace で、Informatica デベロッパーやパートナーからの多数のソリューションを活用すれば、生産性を向上したり、プロジェクトでの実装時間を短縮したりできます。Informatica Marketplace は、<https://marketplace.informatica.com> からアクセスしてください。

Informatica グローバルカスタマサポート

電話または Informatica Network からグローバルサポートセンターに連絡できます。

各地域の Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica Web サイト (<https://www.informatica.com/services-and-training/customer-success-services/contact-us.html>) を参照してください。

Informatica Network でオンラインサポートリソースを見つけるには、<https://network.informatica.com> にアクセスし、eSupport オプションを選択します。

第 1 章

インストールの概要

この章では、以下の項目について説明します。

- [Data Integration Hub のインストール, 9 ページ](#)
- [追加のインストールコンポーネント, 10 ページ](#)

Data Integration Hub のインストール

Data Integration Hub は、コアアプリケーションコンポーネントと必須追加オプションコンポーネントから構成されます。Data Integration Hub、PowerCenter®サービス、および PowerCenter Client を同一のマシンにインストールする場合は、インストーラですべてのコンポーネントを選択します。そうでない場合は、各コンポーネントを必要なマシンにインストールします。

Data Integration Hub インストールには、以下のコンポーネントが含まれます。

Data Integration Hub

コアアプリケーションコンポーネント。操作コンソール、Data Integration Hub サーバー、Data Integration Hub リポジトリ、およびパブリケーションリポジトリが含まれます。PowerCenter サービスは、Data Integration Hub をインストールする際に、実行中である必要があります。このコンポーネントをインストールする前に、データベースユーザーアカウント（複数）を設定する必要があります。

Data Integration Hub ダッシュボードとレポート

ダッシュボードを Data Integration Hub で使用可能にするには、2 つの方法があります。Data Integration Hub をインストールすると、オペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードを有効にすることができます。その他の場合、デフォルトで使用可能なメタデータリポジトリを使用するダッシュボードを使用できます。

これは、ビジネスアクティビティ監視コンポーネントです。ダッシュボードアプリケーションおよびオペレーショナルデータストアリポジトリを含みます。Data Integration Hub リポジトリで使用するユーザーアカウントとは異なるユーザーアカウントを設定する必要があります。

このコンポーネントをインストールするには、Data Integration Hub をインストールする必要があります。

Data Integration Hub PowerCenter サーバープラグイン

Data Integration Hub による PowerCenter 内での Data Integration Hub トランスフォーメーションを実行するために使用される PowerCenter リポジトリプラグイン。インストールには PowerCenter 統合サービスこのプラグインは、PowerCenter サービスと同じマシン上にインストールする必要があります。

このコンポーネントをインストールした後には、Data Integration Hub ワークフローを作成して実行する前に、PowerCenter リポジトリにプラグインを登録する必要があります。

Data Integration Hub PowerCenter Client **プラグイン**

PowerCenter マッピング内に Data Integration Hub トランスフォーメーションのプロパティを表示する PowerCenter Client プラグイン。このプラグインは、Data Integration Hub トランスフォーメーションのマッピングおよびワークフローを構築するために使用する予定のすべての PowerCenter Client マシンにインストールします。

Data Integration Hub Hadoop **サービス**

Data Integration Hub を Linux オペレーティングシステムにインストールすると使用可能になります。

Data Integration Hub と Hadoop クラスタ間の接続モジュール。Data Integration Hub が Hadoop パブリケーションリポジトリに対して操作を実行できるようにします。

Hadoop ベースのパブリケーションリポジトリを定義し、トピックの一部を Hadoop で管理する場合は、このコンポーネントを選択します。

注: Data Integration Hub Hadoop サービスは、Hadoop クラスタのエッジノードにインストールする必要があります。Data Integration Hub を Hadoop エッジノードにインストールしない場合は、Data Integration Hub インストール時にこのコンポーネントを選択しないでください。この場合、Data Integration Hub インストールの完了後に、エッジノードで再度インストールを実行し、エッジノードに Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントのみをインストールすることを選択します。

Data Integration Hub Data Engineering Integration

Hadoop ベースのパブリケーションリポジトリにパブリッシュおよびサブスクライブする、カスタムのパブリケーションおよびサブスクリプションに対して、Data Integration Hub で Data Engineering Integration マッピングを使用できるようにします。

Data Integration Hub を Linux オペレーティングシステムにインストールすると使用可能になります。

Data Integration Hub Informatica Data Quality

オンプレミスアプリケーションとのカスタムパブリケーションおよびカスタムサブスクリプションで Data Quality を使用できるようにするため、Data Integration Hub で Data Quality マッピングを使用できるようにします。

追加のインストールコンポーネント

Data Integration Hub を実行するには、追加コンポーネントが必要です。コンポーネントは Data Integration Hub のインストールプロセスの一部としてインストールされます。

Data Integration Hub には、次の追加のアプリケーションおよびコンポーネントが含まれます。

Data Integration Hub **サーバー**

パブリケーションおよびサブスクリプションの処理を Data Integration Hub で管理するサーバー環境。

操作コンソール

処理のカスタマイズと監視、ユーザー管理、および様々な設定のための Web インタフェース。

Apache Tomcat

操作コンソールクライアントを実行するための Web サーバー環境。

Java JDK

Data Integration Hub サーバー、Data Integration Hub 操作コンソール、および Data Integration Hub コマンドラインクライアントツールが実行される Java ランタイム環境。

第 2 章

はじめる前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [ユーザーアカウント, 12](#) ページ
- [ポート番号, 14](#) ページ

ユーザーアカウント

インストールの前に、必要なデータベースアカウントおよびドメインアカウントのユーザー名とパスワードがあることを確認します。

次の表では、必須なユーザーアカウントを示します。

ユーザーアカウント	説明
データベース	<p>Data Integration Hub リポジトリおよびパブリケーションリポジトリのデータベースサーバーにログインして、テーブルおよびビューを作成するのに使用するデータベースユーザーアカウント。ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールする場合は、オペレーショナルデータストアのユーザーアカウントも使用します。</p> <p>すべてのリポジトリを同じタイプのデータベースサーバーにインストールする必要があります。リポジトリごとに個別のユーザーアカウントを作成する必要があります。</p> <p>このユーザーアカウントには、以下のアクションを実行する特権が含まれている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none">- テーブルおよびビューからのデータの選択。- テーブルへのデータの挿入、テーブルからのデータの削除、およびテーブル内のデータの更新。- 次の要素を作成、変更、削除します。<ul style="list-style-type: none">- テーブル- ビュー- シノニム- インデックス- カスタムデータタイプ- トリガ- ストアドプロシージャおよび関数の作成、変更、削除、および実行。 <p>Microsoft SQL Server データベースを使用している場合は、リポジトリごとに個別のデータベースを設定する必要があります。このユーザーアカウントにはデータベース所有者特権を付与することをお勧めします。</p>
Informatica ドメイン認証のある Data Integration Hub を使用する場合: Informatica ドメイン管理者	Informatica ドメインの管理者アカウント。

ユーザーアカウント	説明
Informatica ドメイン認証のある Data Integration Hub を使用する場合: Informatica セキュリティドメイン	Informatica ドメイン認証のユーザーアカウント。このユーザーアカウントは、manage roles/groups/users 特権のある Informatica Administrator ツールで作成する必要があります。インストール後、Data Integration Hub の管理者がこのユーザーアカウントを同期します。
PowerCenter リポジトリサービス	<p>Data Integration Hub で PowerCenter リポジトリサービスの操作を実行する場合に使用するユーザーアカウント。このユーザーアカウントには、次のアクションを実行するための特権と権限が付与されている必要があります。</p> <p>全般</p> <ul style="list-style-type: none"> - Repository Manager へのアクセス特権 <p>フォルダ</p> <ul style="list-style-type: none"> - フォルダに対する読み取り権限 - 作成特権 - コピー特権 <p>デザインオブジェクト</p> <ul style="list-style-type: none"> - フォルダに対する読み取り権限 - 共有フォルダに対する読み取り権限 - 宛先フォルダに対する読み取りおよび書き込み権限 - 元のフォルダに対する読み取り権限、宛先フォルダに対する読み取りおよび書き込み権限、ならびにフォルダに対する読み取りおよび書き込み権限を含む、作成、編集、および削除特権 <p>ソースとターゲット</p> <ul style="list-style-type: none"> - フォルダに対する読み取り権限 - 共有フォルダに対する読み取り権限 - 宛先フォルダに対する読み取りおよび書き込み権限 - 元のフォルダに対する読み取り権限、宛先フォルダに対する読み取りおよび書き込み権限、ならびにフォルダに対する読み取りおよび書き込み権限を含む、作成、編集、および削除特権 <p>ランタイムオブジェクト</p> <ul style="list-style-type: none"> - フォルダに対する読み取り権限 - 元のフォルダに対する読み取り権限、宛先フォルダに対する読み取りおよび書き込み権限、接続オブジェクトに対する読み取り権限、ならびにフォルダに対する読み取りおよび書き込み権限を含む、作成、編集、および削除特権 - フォルダに対する読み取り権限を含むモニタ特権 - フォルダに対する読み取りおよび実行権限を含むモニタ特権 <p>グローバルオブジェクト</p> <ul style="list-style-type: none"> - 接続オブジェクトに対する読み取り権限 - 接続オブジェクトに対する読み取りおよび書き込み - 接続の作成特権 - フォルダに対する読み取りおよび実行権限を含むモニタ特権

ポート番号

インストールコンポーネントにはインストーラによりデフォルトのポート番号が設定されます。他のアプリケーションによりインストールコンポーネントの 1 つに同じポート番号が使用されている場合、ポートの競合により、そのコンポーネントが正常に実行されないか、またはエラーが発生する場合があります。

ポート番号はインストール後に変更できます。ポートの競合を回避するには、Data Integration Hub を起動する前に、ポート番号が他のアプリケーションと競合しないことを確認し、Data Integration Hub でポート番号を変更します。

以下の表に、デフォルトのポート番号を示します。

ポート番号	説明
18000	Data Integration Hub が内部通信に使用する UDP マルチキャストポート。
18005	操作コンソールのシャットダウンポート。Data Integration Hub がインストールされているマシンでのみ使用できるようにする必要があります。
18050	操作コンソールにより内部通信に使用されるポート。
18080	操作コンソールの HTTP ポート。操作コンソールに HTTP ポートを使用する場合のみ必要です。
18095 および 18096	操作コンソールおよび PowerCenter ワークフローが Data Integration Hub サーバーとの通信に使用する RMI ポート。
18100	Data Integration Hub サーバーで内部通信に使用されるポート。
18443	操作コンソールの HTTPS ポート。操作コンソールに HTTPS ポートを使用する場合のみ必要です。
18616	Data Integration Hub JNDI プロバイダ用ポート。

第 3 章

インストール前のタスク

この章では、以下の項目について説明します。

- [インストール前のタスクの概要, 15 ページ](#)
- [最小システム要件の確認, 16 ページ](#)
- [データベース要件の確認, 17 ページ](#)
- [前提となるソフトウェアのインストール, 18 ページ](#)
- [PowerCenter pmrep コマンドラインユーティリティのインストールと設定, 19 ページ](#)
- [環境変数の設定, 19 ページ](#)
- [Microsoft Azure SQL データベースのデータソース名の作成, 20 ページ](#)
- [ドキュメントストアのディレクトリのセットアップ, 22 ページ](#)
- [Microsoft SQL Server データベースの設定, 22 ページ](#)

インストール前のタスクの概要

Data Integration Hub をインストールする前に、インストール要件を満たすようにマシンをセットアップし、すべてのユーザーアカウントクレデンシャルを所有していることを確認し、Data Integration Hub のインストールと実行に向けて環境を整えます。

注: Data Integration Hub が使用する Data Integration Hub と PowerCenter 統合サービスは、同じ種類のオペレーティングシステム上にインストールされていなければなりません。両方とも Windows オペレーティングシステムを実行しているマシンまたは Windows 以外のオペレーティングシステムを実行しているマシンにインストールされている必要があります。

以下のコンポーネントは、同じロケールと同じタイムゾーンが設定されたマシンに存在する必要があります。

- Data Integration Hub サーバー
- Data Integration Hub リポジトリ
- Data Integration Hub 操作コンソールクライアント
- Data Integration Hub が使用する PowerCenter リポジトリサービス
- Data Integration Hub が使用する PowerCenter 統合サービス

最小システム要件の確認

システムが最小要件を満たしていることを確認します。

以下の表に最小システム要件を示します。

システム	要件
オペレーティングシステム	<ul style="list-style-type: none">- Microsoft Windows- IBM AIX- Red Hat Linux- SUSE Linux
プロセッサ	<ul style="list-style-type: none">- 最小: 2 CPU コア- 推奨: 4 CPU コア
RAM	8 GB
ディスク容量	<ul style="list-style-type: none">- 最小: 3 GB- 推奨: 8 GB
ブラウザ	<ul style="list-style-type: none">- Microsoft Internet Explorer- Google Chrome- Microsoft Edge

以下の表に、インストーラを実行するための最小システム要件を示します。

システム	要件
RAM	512 MB
ディスク容量	1GB

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

データベース要件の確認

Data Integration Hub を実行するための要件をデータベースが満たしていることを確認します。

以下の表に、Data Integration Hub のデータベース要件を示します。

データベースコンポーネント	説明
データベースシステム	リポジトリをインストールするデータベースのタイプ。以下のデータベースシステムのいずれかを使用できます。 <ul style="list-style-type: none">- Amazon RDS for Oracle- Oracle- Microsoft SQL Server- Microsoft Azure SQL Server 注: フィルタアクセラレータを使用するには、Oracle Enterprise Edition が必要です
データベースインスタンス	2 つのデータベースインスタンス。Data Integration Hub は、Data Integration Hub リポジトリ用に 1 つのデータベースを使用し、パブリケーションリポジトリ用に 1 つのデータベースを使用します。両方のデータベースインスタンスが同じタイプのデータベースシステム上に存在する必要があります。 Oracle データベースを使用する場合は、各データベースに一意のユーザーアカウントと一意のスキーマを設定することをお勧めします。 Microsoft Azure SQL Server を使用する場合は、データベースごとに別個のデータソース名 (DSN) を作成することが推奨されます。 ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールする場合は、オペレーショナルデータストア用にデータベースインスタンスが別途必要です。オペレーショナルデータストアは、Data Integration Hub リポジトリと同じタイプのデータベースシステム上に存在する必要があります。 注: ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールするときに、Data Integration Hub およびオペレーショナルデータストアリポジトリが Microsoft SQL Server にインストールされており、PowerCenter バージョン 10 を使用している場合は、PowerCenter Workflow Manager でリポジトリ接続を設定する必要があります。詳細については、 「PowerCenter バージョン 10 でのリポジトリ接続の設定」 (ページ 127) を参照してください。
ディスク容量	Data Integration Hub リポジトリデータベースは、コアアプリケーション用として 512MB 以上のディスク容量を必要とします。 保持する必要があるパブリケーションとパブリケーションインスタンスの数に基づいて、パブリケーションリポジトリデータベースにさらに容量が必要となります。 注: Unicode データは、シングルバイト文字セットの 2 倍のストレージが必要です。
データベース接続	リポジトリごとに常に複数のデータベース接続が使用できる必要があります。 各リポジトリの必要な接続数は、同時に実行されるパブリケーションとサブスクリプションの数によって異なります。次の計算式を使用し、必要なデータベース接続の数をリポジトリごとに計算します。 $\text{同時パブリケーションまたは同時サブスクリプションの数} \times 3 + 2$ 使用できるデータベース接続が十分ない場合は、Data Integration Hub が停止したり、データベースがデッドロックしたりする可能性があります。

データベースの Unicode サポート

Unicode サポートが必要な場合は、以下の設定で Data Integration Hub リポジトリデータベースと Data Integration Hub パブリケーションデータベースを作成します。

- Oracle データベース: AL32UTF8 Unicode 文字セットを使用します。

- Microsoft SQL Server: Unicode データ (nchar、nvarchar、ntext) に対応するデータ型を使用することをお勧めします。

Microsoft SQL Server 照合

Microsoft SQL Server または Microsoft Azure SQL Server を使用する場合は、Data Integration Hub リポジトリと Data Integration Hub パブリケーションリポジトリとの照合で大文字と小文字を区別しないでください。

前提となるソフトウェアのインストール

前提となるソフトウェアをマシンにインストールします。

- PowerCenter.PowerCenter は、Data Integration Hub をインストールする前にインストールします。PowerCenter サービスは、Data Integration Hub にアクセスできるマシンにインストールする必要があります。PowerCenter をインストールした後、PowerCenter Web サービス Hub が稼働していることを確認します。
Data Integration Hub と同じマシンに PowerCenter サービスをインストールしない場合は、Data Integration Hub をインストールするマシンに PowerCenter pmrep コマンドラインユーティリティをインストールします。Data Integration Hub と PowerCenter が同じドライブ上であって、同じファイルパスでアクセスできることを確認します。
注: PowerCenter リポジトリサービスのリポジトリエージェントキャッシュが無効になっていることを確認します。Informatica Administrator で、リポジトリサービスの詳細設定プロパティにアクセスし、**[Rapagent キャッシュを有効にする]** オプションがオフになっていることを確認します。
- Java Development Kit (JDK)。IBM AIX オペレーティングシステムで、IBM JDK バージョン 8.0.5.16 (8.0 Service Refresh 5 Fix Pack 16) をインストールし、INFA_JDK_HOME 環境変数を設定してから Data Integration Hub をインストールします。ログインシェルが INFA_JDK_HOME 環境変数にアクセスできることを確認します。Java インストールの詳細については、次の Java Web サイトを参照します。
<https://www.ibm.com/developerworks/java/jdk/fixes/8/index.html>
参照リンクでダウンロード可能なソフトウェアは、Informatica LLC ではなく、サードパーティに属しています。ダウンロード元リンクは、誤りがある可能性や、削除または変更される可能性があります。Informatica LLC は、そのようなリンクやソフトウェアに対し、明示的、黙示的にかかわらず、商品性、特定目的への適合性、権原、および非侵害についてのいかなる保証についても、その責任を一切負わないものとしします。
製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。
<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>
- Microsoft Visual C++ 2008 Redistributable Package (x86)。このパッケージは、Windows Server 2008 64 ビットオペレーティングシステムで Data Integration Hub PowerCenter Client プラグインを使用する場合にインストールします。
参照リンクでダウンロード可能なソフトウェアは、Informatica LLC ではなく、サードパーティに属しています。ダウンロード元リンクは、誤りがある可能性や、削除または変更される可能性があります。Informatica LLC は、そのようなリンクやソフトウェアに対し、明示的、黙示的にかかわらず、商品性、特定目的への適合性、権原、および非侵害についてのいかなる保証についても、その責任を一切負わないものとしします。
- Java Cryptography Extension (JCE)。このパッケージは、IBM AIX オペレーティングシステム上に Data Integration Hub をインストールする場合にインストールします。

PowerCenter pmrep コマンドラインユーティリティのインストールと設定

Data Integration Hub と同じマシンに PowerCenter サービスをインストールしない場合は、Data Integration Hub をインストールするマシンに PowerCenter pmrep コマンドラインユーティリティをインストールして設定します。

このユーティリティのダウンロード時には、Informatica の発送部署に問い合わせします。このユーティリティのバージョンは、PowerCenter のバージョンと一致する必要があります。

1. Data Integration Hub インストーラがアクセスできるローカルマシンディレクトリに、ZIP ファイルを解凍します。

デフォルトでは、インストーラは以下のディレクトリにこのユーティリティを検索します。<LocalDrive>\Informatica\version

2. オペレーティングシステムに基づいてユーティリティの設定値を設定します。

ユーティリティの設定の詳細は、『*Informatica リポジトリガイド*』を参照します。

ユーティリティの設定をテストするには、コマンドラインからユーティリティを実行し、実行結果にエラーが含まれていないことを確認します。

注: 後で pmrep コマンドラインユーティリティをアップグレードする場合は、ホームディレクトリ上の Tmp フォルダから CNX ファイルをすべてクリーンアップします。

環境変数の設定

Data Integration Hub をインストールするマシンに PowerCenter または PowerCenter pmrep コマンドラインユーティリティをインストールした後、環境変数を設定します。

1. INFA_HOME 環境変数を、Informatica インストールディレクトリを指すように設定します。
2. INFA_DOMAINS_FILE 環境変数を、domains.infa ファイルのパスとファイル名に設定します。
3. Solaris と Linux では、LD_LIBRARY_PATH 環境変数に<INFA_HOME>/server/bin を追加します。
4. AIX では、LIBPATH 環境変数に<INFA_HOME>/server/bin を追加します。
5. pmrep ユーティリティコードページが PowerCenter リポジトリサービスコードページと一致することを確認します。このコードページをユーティリティの INFA_CODEPAGE_NAME 環境変数で指定します。
6. PowerCenter への接続時に pmrep ユーティリティがエラーを報告するまでに待機する時間を短くするには、ユーティリティの INFA_CLIENT_RESILIENCE_TIMEOUT 環境変数の値を変更します。
デフォルトのタイムアウト待機時間は 180 秒です。
7. Linux で、Data Integration Hub およびパブリケーションリポジトリとして Windows にインストールされている SQL リポジトリを使用するには、ODBCINST 環境変数を<INFA_HOME>/ODBC7.1/odbcinst.ini に設定します。

注: この手順は、PowerCenter バージョン 10 以降を実行しているシステムに該当します。

Microsoft Azure SQL データベースのデータソース名の作成

Data Integration Hub リポジトリを Microsoft Azure SQL データベースにインストールする場合は、PowerCenter がインストールされているオペレーティングシステムでデータソース名を作成します。

次のセクションで説明するとおり、オペレーティングシステムでデータソース名を作成します。

- [「Windows オペレーティングシステムでのデータソース名の作成」 \(ページ 20\)](#)
- [「Unix オペレーティングシステムでのデータソース名の作成」 \(ページ 21\)](#)

Windows オペレーティングシステムでのデータソース名の作成

このセクションでは Data Integration Hub がインストールされている Windows オペレーティングシステムでデータソース名を作成する方法を説明します。

注: Data Integration Hub がインストールされているデータベースごとに別個のデータソース名 (DSN) エントリが設定されるようにします。

1. Windows 環境で **[ODBC データソース]** を開き、**[64-bit ODBC Data Source for DataDirect 7.1 New SQL Server Wire Protocol]** を選択します。
[ODBC データソース管理者] ウィンドウが表示されます。
2. **[システム DSN]** を選択して **[新規を追加]** をクリックします。
[新規データソースを作成] ウィンドウが表示されます。
3. ドライバは **[DataDirect 7.1 New SQL Server Wire Protocol]** を選択します。
[ODBC SQL Server Wire Protocol ドライバセットアップ] ウィンドウが表示されます。
4. **[全般]** タブに次の詳細情報を入力します。
 - **[データソース名]**。データソースの名前。
 - **[ホスト名]**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
 - **[ポート番号]**。データベースのポート番号。Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポート番号は 1433 です。
 - **[データベース]**。データベースインスタンスの名前。
5. **[詳細] > [拡張オプション]** を選択して **「WorkArounds2=2」** を追加します。
注: WorkArounds2=2 オプションを有効化すると、ドライバではアプリケーションで指定したカラムサイズや浮動小数点数や日時の値が無視され、代わりにデータベースデフォルトが使用されます。アプリケーションには、タイムスタンプパラメータをバインドする際に不正確なカラムサイズや浮動小数点数を指定していることがあります。
6. **[セキュリティ]** を選択して次の情報を更新します。
 - **[ユーザー名]**。Microsoft Azure SQL データベースユーザーの名前。
 - 任意の**暗号化方法**を選択します。
7. **[保存]** をクリックします。
データソース名 (DSN) 詳細情報が保存されます。
8. この手順で設定したユーザーの資格情報でドライバをテストして接続が通ることを確認します。

Unix オペレーティングシステムでのデータソース名の作成

このセクションでは、Data Integration Hub がインストールされている Unix オペレーティングシステムでデータソース名を作成する方法を説明します。

注: Data Integration Hub がインストールされているデータベースごとに別個のデータソース名 (DSN) エントリが設定されるようにします。ドライバは絶対パスを使用して Dwsqls27.so ドライバををポイントしている必要があります。

PowerCenter インストールディレクトリで次の手順を実行します。

1. PowerCenter インストールディレクトリの <pwd_install_path>/ODBC7.1 フォルダに移動し、odbc.ini ドライバを編集して次の情報を更新します。

- **[ドライバ]**。ドライバへのパスを入力します。
パスは /data/Informatica/10.1.1/ODBC7.1/lib/Dwsqls27.so のようになります。
- **[説明]**。DSN エントリの説明を入力します。
説明は Azure SQL DATABASE Connection for ODL のようになります。
- **[アドレス]**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名を入力します。
- **[LogonID]**。Microsoft Azure SQL データベースユーザーの名前を入力します。
- **[パスワード]**。Microsoft Azure SQL データベースユーザーのパスワードを入力します。
- **[QuotedId]**。[No] を選択します。
- **[AnsiNPW]**。[Yes] を選択します。
- **[EncryptionMethod]**。選択する暗号化方法に対応する数値を入力します。
- 「WorkArounds2=2」と入力します。

注: WorkArounds2=2 オプションを有効化すると、ドライバではアプリケーションで指定したカラムサイズや浮動小数点数が無視され、代わりにデータベースデフォルトが使用されます。アプリケーションには、タイムスタンプパラメータをバインドする際に不正確なカラムサイズや浮動小数点数を指定していることがあります。

- odbc.ini ファイルをポイントする環境変数 \$ODBINI が設定されていない場合は、環境変数 \$ODBINI を \$ODBCINI=<pwd_install_path>/ODBC7.1/odbc.ini と設定します。

注: ODBC 環境変数は、PowerCenter をインストールする前に設定されています。

設定例を次に示します。

```
Driver=<PwC_Install_Loc>/ODBC7.1/lib/Dwsqls27.so
Description=Azure SQL DATABASE Connection for ODL
Address=<server_name>
Database= <db_name>
LogonID=<usr>
Password=<pwd>
QuotedId=No
AnsiNPW=Yes
EncryptionMethod=1
ValidateServerCertificate=0
WorkArounds2=2
```

2. この手順で説明しているとおりオペレーティングシステム上でデータソース名を作成しているときに環境変数を設定した場合は、PowerCenter サービスを再起動します。

ドキュメントストアのディレクトリのセットアップ

Data Integration Hub ドキュメントストアのディレクトリをセットアップします。

このドキュメントストアディレクトリは、Data Integration Hub、Apache Tomcat、および PowerCenter に、同じドライブとファイルパスでアクセスできる必要があります。

Microsoft SQL Server データベースの設定

Data Integration Hub リポジトリを Microsoft SQL Server データベース上にインストールする場合は、READ_COMMITTED_SNAPSHOT データベースオプションを有効化します。ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールする場合は、オペレーショナルデータストアでも READ_COMMITTED_SNAPSHOT オプションを有効にします。

注: Microsoft SQL Server 2012 を使用する場合は、Microsoft SQL Server Management Studio のオプション **[読み取りコミット済みのスナップショットが有効]** を **[true]** に設定できます。

1. データベースオプションを設定する権限を使用して、データベースサーバーの SQL クエリを開きます。

2. 次の SQL 文を実行します。

```
ALTER DATABASE [<database_name>] SET SINGLE_USER WITH ROLLBACK IMMEDIATE
```

3. 次の SQL クエリを実行します。

```
ALTER DATABASE <database_name> SET READ_COMMITTED_SNAPSHOT ON
```

4. このオプションが設定されていることを確認するには、次の SQL クエリを実行します。

```
SELECT is_read_committed_snapshot_on FROM sys.databases WHERE name = '<database_name>'
```

オプションが設定されている場合は、値 1 が返ります。オプションが設定されていない場合は、値 0 が返ります。

5. 次の SQL 文を実行し、強制的にすべてのユーザーをシステムから切り離します。

```
ALTER DATABASE [<database_name>] SET MULTI_USER
```

第 4 章

Data Integration Hub のインストール

この章では、以下の項目について説明します。

- [Data Integration Hub のインストール \(Windows\) , 23 ページ](#)
- [UNIX オペレーティングシステムでの Data Integration Hub のコンソールモードでのインストール, 48 ページ](#)
- [サイレントモードでの Data Integration Hub のインストール, 59 ページ](#)

Data Integration Hub のインストール (Windows)

Windows オペレーティングシステムでは、グラフィカルモードで Data Integration Hub をインストールします。UNIX オペレーティングシステムの場合、コンソールモードで Data Integration Hub をインストールします。

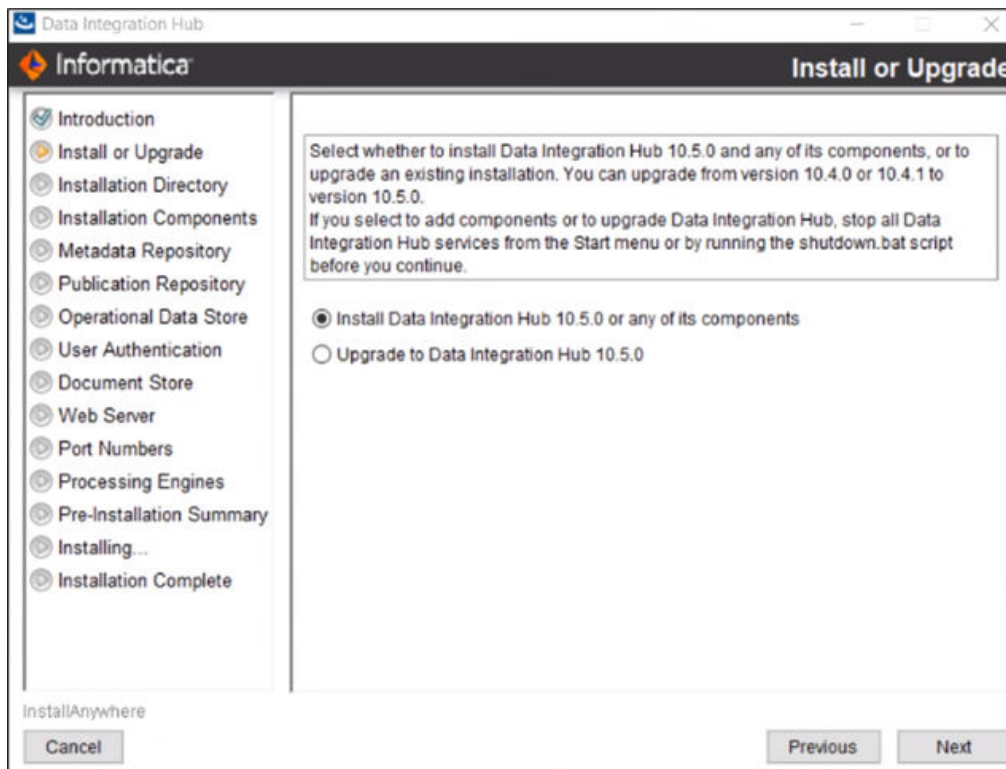
インストールする前に、使用している環境が最小システム要件を満たしていることを確認し、インストール前の手順を実行し、さらに PowerCenter サービスが実行中であることを確認します。

注: インストール時、Data Integration Hub により、ユーザーのホームディレクトリの DXLogs サブディレクトリにログファイルが保存されます。インストールが正常に終了しなかった場合は、この場所でログファイルを確認できます。

手順 1. インストーラの実行

1. Data Integration Hub のインストールに使用するユーザーアカウントでマシンにログインします。
権限エラーを回避するため、Data Integration Hub と PowerCenter のインストールには同じアカウントを使用します。
2. 他のすべてのアプリケーションを終了します。
3. インストーラをダウンロードしたディレクトリから Install.exe を実行します。
【概要】 ページが表示されます。
4. 説明を読み、【次へ】 をクリックします。

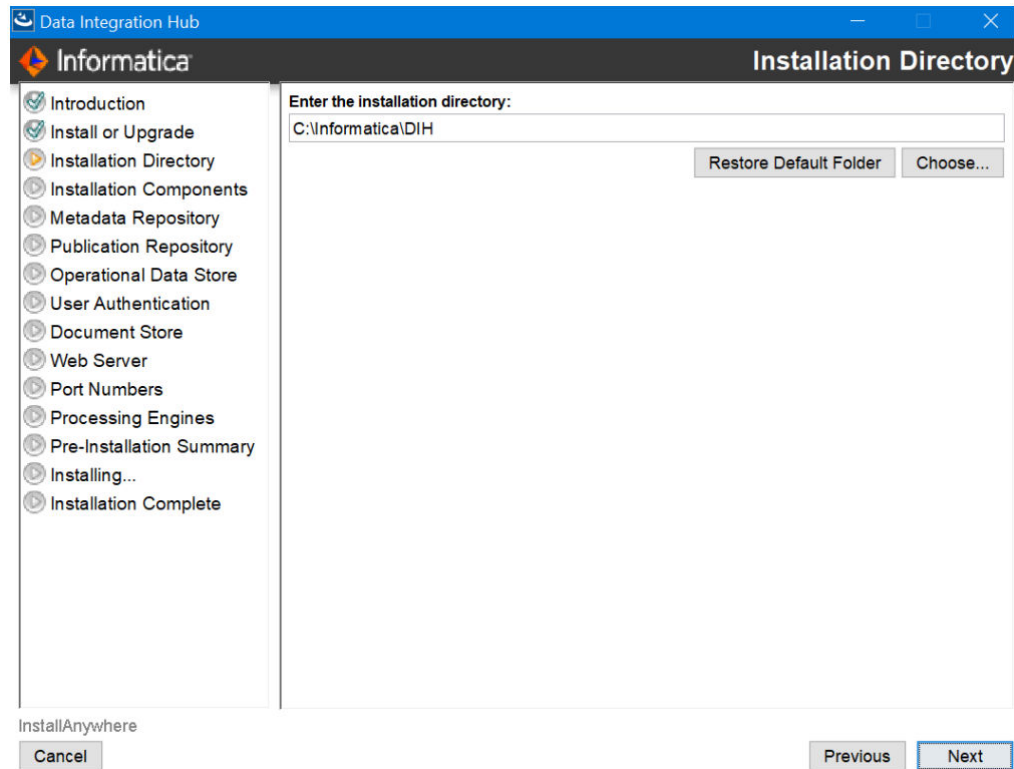
[インストールまたはアップグレード] ページが表示されます。



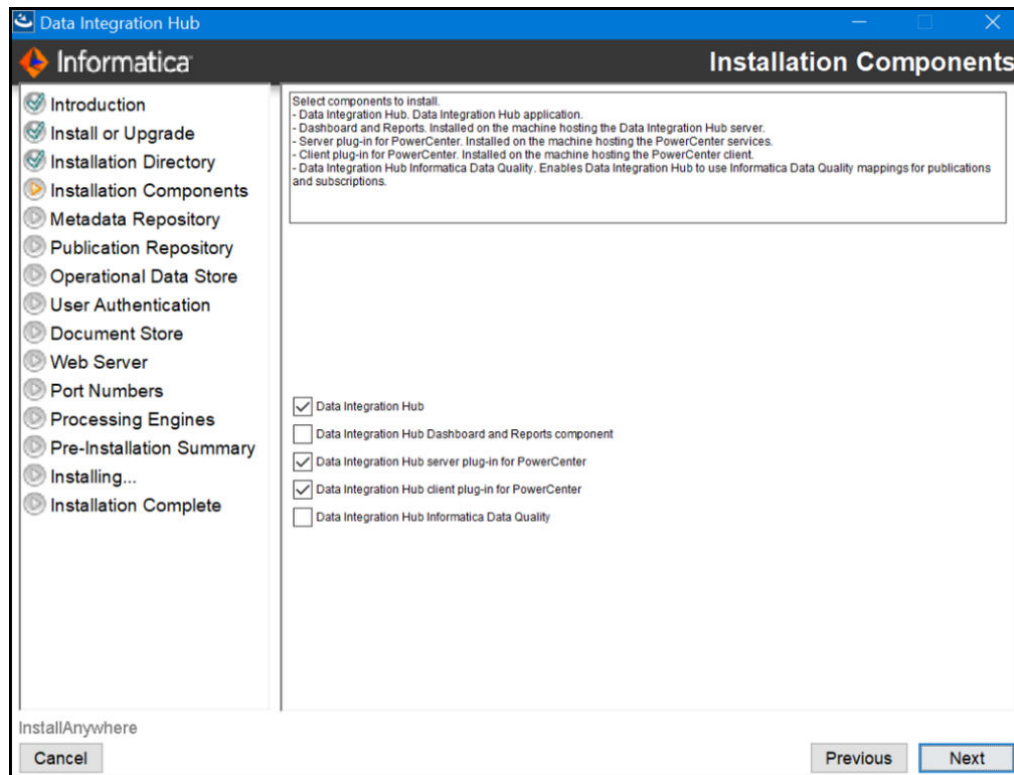
5. Data Integration Hub をインストールするオプションを選択し、[次へ] をクリックします。
[インストールディレクトリ] ページが表示されます。

手順 2.インストール設定の定義

1. **【インストールディレクトリ】** ページで、インストールディレクトリへの絶対パスを入力するか、またはデフォルトのディレクトリを受け入れて、**【次へ】** をクリックします。



【インストールコンポーネント】 ページが表示されます。



2. インストールするコンポーネントを選択します。

Data Integration Hub

Data Integration Hub のコアアプリケーションをインストールします。
デフォルトで選択されています。

Data Integration Hub **ダッシュボードとレポート**

Data Integration Hub のダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールします。
ダッシュボードを Data Integration Hub で使用可能にするには、2 つの方法があります。Data Integration Hub をインストールすると、オペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードを有効にすることができます。その他の場合、デフォルトで使用可能なメタデータリポジトリを使用するダッシュボードを使用できます。

このコンポーネントは、オペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードにレポートを表示する場合に選択します。ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールするには、Data Integration Hub をインストールする必要があります。
デフォルトでは選択されていません。

注:

- メタデータディレクトリを使用するダッシュボードはデフォルトでインストールされています。このコンポーネントは、オペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードにレポートを表示する場合に選択します。インストール後、オペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードにレポートを表示するには、`dx.dashboard.ods.page.show` システムプロパティを `true` に設定する必要があります。詳細については、『*Data Integration Hub 管理者ガイド*』と『*Data Integration Hub オペレータガイド*』を参照してください。

- ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールする場合は、Data Integration Hub をインストールした後に、オペレーショナルデータストアイベントローダーをインポートする必要があります。
- ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールするときに、Data Integration Hub およびオペレーショナルデータストアリポジトリが Microsoft SQL Server にインストールされており、PowerCenter バージョン 10 を使用している場合は、PowerCenter Workflow Manager でリポジトリ接続を設定する必要があります。詳細については、[「PowerCenter バージョン 10 でのリポジトリ接続の設定」 \(ページ 127\)](#) を参照してください。

Data Integration Hub PowerCenter **サーバープラグイン**

PowerCenter サービス用 Data Integration Hub プラグインをインストールします。インストール後、プラグインを PowerCenter リポジトリに登録します。
デフォルトで選択されています。

Data Integration Hub PowerCenter client **プラグイン**

PowerCenter Client 用 Data Integration Hub プラグインをインストールします。このコンポーネントは、PowerCenter Client を実行するすべてのマシンにインストールします。
デフォルトで選択されています。

Data Integration Hub Informatica Data Quality

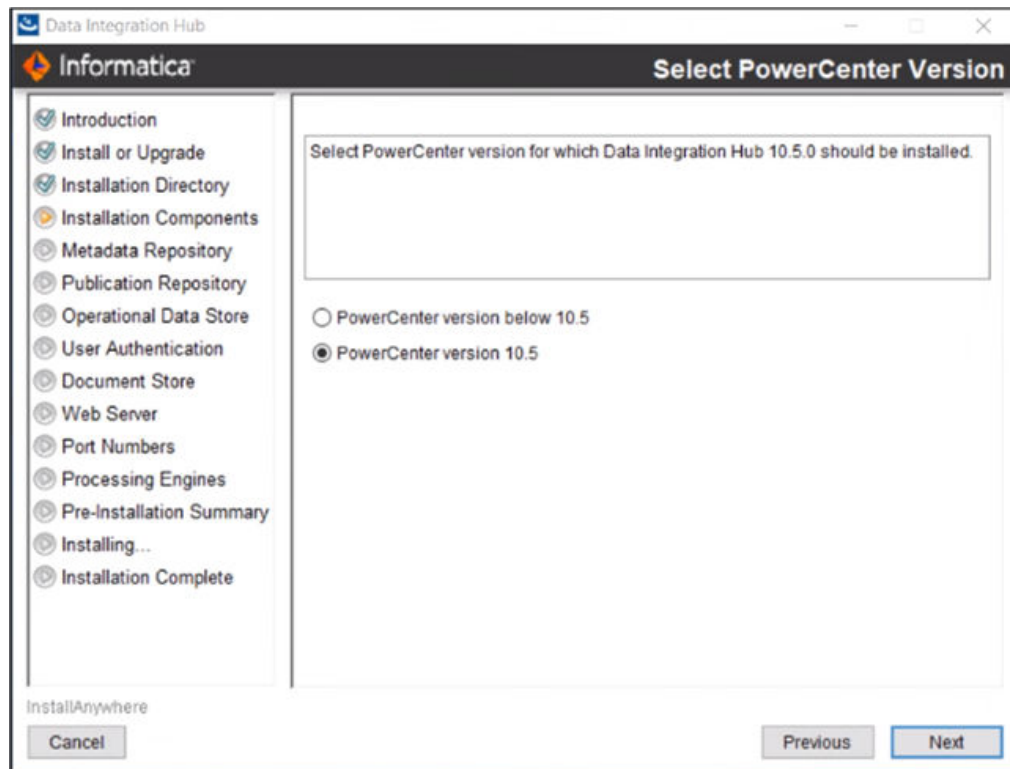
カスタムパブリケーションおよびカスタムサブスクリプションを行うために、Data Integration Hub で Data Quality マッピングを使用できるようにします。

このコンポーネントは、Data Integration Hub で、Data Quality マッピングを使用するカスタムパブリケーションおよびカスタムサブスクリプションを作成する場合に選択します。

デフォルトでは選択されていません。

3. **【次へ】** をクリックします。

【PowerCenter のバージョンの選択】 ページが表示されます。

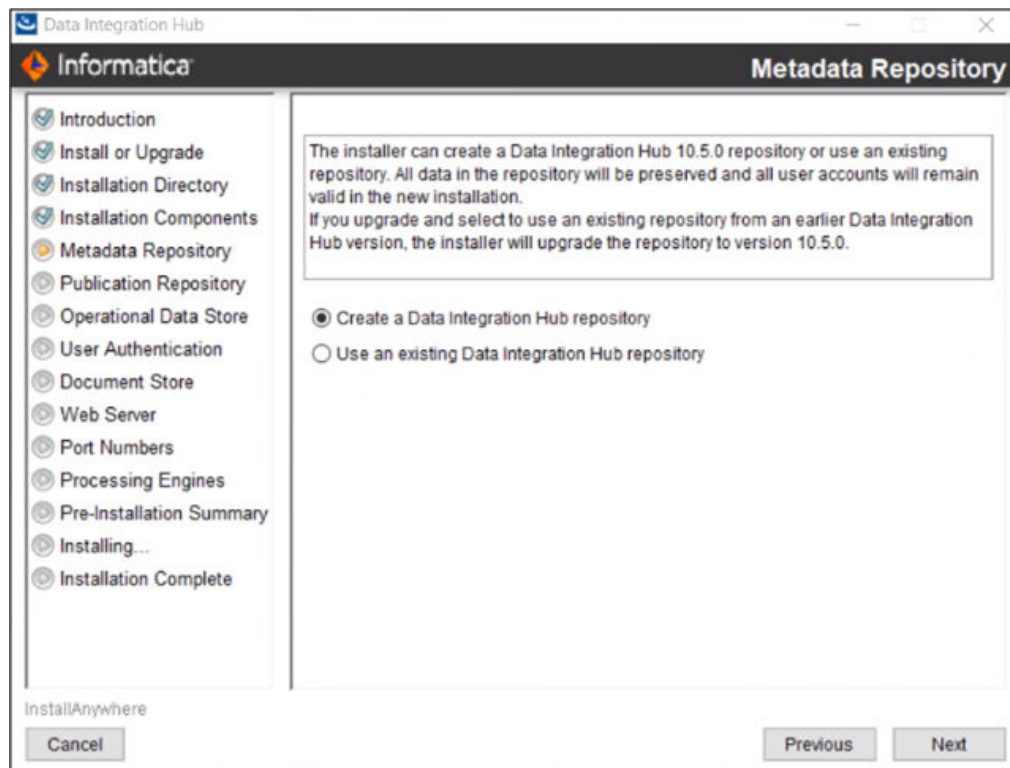


4. Data Integration Hub をインストールする PowerCenter のバージョンを選択し、[次へ] をクリックします。

[メタデータリポジトリ] ページが表示されます。

手順 3.Data Integration Hub リポジトリの設定

1. [メタデータリポジトリ] ページで、次のオプションのうち 1 つを選択します。
 - [Data Integration Hub リポジトリを作成する]。リポジトリをデータベース内に作成します。
 - [既存の Data Integration Hub リポジトリを使用する]。既存の Data Integration Hub リポジトリ内のテーブルおよびデータを使用し、リポジトリを更新します。



2. [次へ] をクリックします。

[メタデータリポジトリ接続] ページが表示されます。

3. 次のフィールドに値を入力します。

データベースタイプ

Data Integration Hub メタデータリポジトリに使用するデータベースのタイプ。以下のいずれかのオプションを選択することができます。

- Oracle
- Microsoft SQL Server

データベース URL

データベースの場所。

このオプションを選択する場合、次のフィールドに値を入力します。

- **[データベースホスト名]**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
- **[データベースポート]**。データベースのポート番号。Oracle のデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server または Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポート番号は 1433 です。
- **[データベース SID]**。データベースが Oracle の場合のデータベースのシステム識別子。完全修飾された ServiceName または完全修飾された SID を入力します。
注: このフィールドには ServiceName を入力することをお勧めします。
- **[Microsoft SQL Server データベース]** または **[Microsoft Azure SQL データベース]**。データベース名。

カスタム接続文字列

データベースへの接続文字列。

このオプションを選択する場合、次のいずれかのフィールドに値を入力します。

- **[JDBC 文字列]**。メタデータリポジトリに対する JDBC 接続文字列。
- **[ODBC 文字列]**。メタデータリポジトリに対する ODBC 接続文字列。PowerCenter Client プラグインをインストールする場合に使用できます。インストーラで ODBC 文字列の有効性を検証することはできません。

注: Microsoft SQL Server データベースの名前付きインスタンスを使用する場合、**[データベース URL]** オプションを使用してデータベースインスタンスに接続できません。**[カスタム接続文字列]** オプションを使用します。

例：

```
jdbc:informatica:sqlserver://MYSQLSERVERCOMPUTERHOSTNAME  
\MYDBINSTANCENAME;DatabaseName=MYDATABASENAME;
```

Windows 認証の使用

Microsoft Windows 認証メカニズムでユーザー名を認証するように Data Integration Hub に指示します。Microsoft SQL Server データベースを選択する場合に使用できます。

データベースユーザー名

Windows 認証を使用しないデータベースのデータベースユーザーアカウントの名前。

データベースユーザのパスワード

Windows 認証を使用しないデータベースのデータベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

4. **[次へ]** をクリックします。

[パブリケーションリポジトリ接続] ページが表示されます。

Enter the publication repository connection details. The publication repository stores published data that subscribing applications can consume.
Note: When using Microsoft SQL Server named instances, you must define a custom connection string.

Database type: **SQLServer**

☒ Database URL

Database host name:

Database port number:

Database name:

☐ Custom connection string

JDBC string:

☐ Use Windows Authentication

Database username:

Database user password:

Cancel Previous Next

5. 次のフィールドに値を入力します。

データベースタイプ

パブリケーションリポジトリに使用するデータベースのタイプ。データベースタイプは Data Integration Hub メタデータリポジトリデータベースタイプと一致する必要があり、読み取り専用モードで表示されます。

データベース URL

データベースの場所。

このオプションを選択する場合、次のフィールドに値を入力します。

- **[データベースホスト名]**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
- **[データベースポート]**。データベースのポート番号。Oracle のデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server または Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポートは 1433 です。
- **[データベース SID]**。データベースが Oracle の場合のデータベースのシステム識別子。完全修飾された ServiceName または完全修飾された SID を入力します。

注: このフィールドには ServiceName を入力することをお勧めします。

- **[Microsoft SQL Server データベース]** または **[Microsoft Azure SQL データベース]**。データベースインスタンスの名前。

カスタム接続文字列

データベースへの JDBC 接続文字列。

注: Microsoft SQL Server データベースの名前付きインスタンスを使用する場合、**[データベース URL]** オプションを使用してデータベースインスタンスに接続できません。**[カスタム接続文字列]** オプションを使用します。

Windows 認証の使用

Microsoft Windows 認証メカニズムでユーザー名を認証するように Data Integration Hub に指示します。Microsoft SQL Server データベースを選択する場合に使用できます。

データベースユーザー名

Windows 認証を使用しないデータベースのデータベースユーザーアカウントの名前。

データベースユーザのパスワード

Windows 認証を使用しないデータベースのデータベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

6. **[次へ]** をクリックします。

[Data Integration Hub ダッシュボードとレポートコンポーネント] を選択した場合は、**[オペレーショナルデータストア]** ページが表示されます。ダッシュボードとレポートコンポーネントを選択していない場合は、[「手順 5.ユーザー認証の設定」 \(ページ 34\)](#)に進みます。

手順 4.オペレーショナルデータストアのセットアップ

1. これは、レガシーダッシュボードを使用する場合にのみ適用されます。**[オペレーショナルデータストア]** ページで、次のオプションのいずれかを選択します。
 - **[オペレーショナルデータストアリポジトリを作成する]**。データベース内にオペレーショナルデータストアリポジトリを作成します。
 - **[既存のオペレーショナルデータストアリポジトリを使用する]**。既存のオペレーショナルデータストアリポジトリ内のテーブルおよびデータを使用します。
2. **[次へ]** をクリックします。

[オペレーショナルデータストアのデータベース接続] ページが表示されます。

Informatica Operational Data Store Database Connection

Enter the database connection details for the operational data store.
Note: When using Microsoft SQL Server named instances, you must define a custom connection string.

Database type: SQL Server

☒ Database URL

Database host name: 1

Database port number: 1433

Database name:

☐ Custom connection string

JDBC string: jdbc:informatica:sqlserver://RWY1PC08IAQE:1433:DatabaseName=DEMO_DIH_ODS

☐ Use Windows Authentication

Database username:

Database user password:

Cancel Previous Next

3. 次のフィールドに値を入力します。

データベース URL

データベースの場所。このオプションを選択する場合、次のフィールドに値を入力します。

- **[データベースホスト名]**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
- **[データベースポート番号]**。データベースのポート番号。Oracle データベースのデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server または Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポート番号は 1433 です。

- **[データベース SID]**。Oracle をデータベースとして選択した場合のデータベースのシステム識別子。完全修飾された ServiceName または完全修飾された SID を入力します。

注: このフィールドには ServiceName を入力することをお勧めします。

- **[Microsoft SQL Server データベース]** または **[Microsoft Azure SQL データベース]**。データベース名。

カスタム接続文字列

データベースへの接続文字列。このオプションを選択する場合、次のいずれかのフィールドに値を入力します。

- **[JDBC 文字列]**。オペレーショナルデータストアに対する JDBC 接続文字列。
- **[ODBC 文字列]**。オペレーショナルデータストアに対する ODBC 接続文字列。PowerCenter Client プラグインをインストールする場合に使用できます。インストーラで ODBC 文字列の有効性を検証することはできません。

注: Microsoft SQL Server データベースの名前付きインスタンスを使用する場合、**[データベース URL]** オプションを使用してデータベースインスタンスに接続できません。**[カスタム接続文字列]** オプションを使用します。

例:

```
jdbc:informatica:sqlserver://MYSQLSERVERCOMPUTERHOSTNAME  
\\MYDBINSTANCENAME;DatabaseName=MYDATABASENAME;
```

Windows 認証の使用

Microsoft Windows 認証メカニズムでユーザー名を認証するように Data Integration Hub に指示します。Microsoft SQL Server データベースを選択する場合に使用できます。

データベースユーザー名

Windows 認証を使用しないデータベースのオペレーショナルデータストアユーザーアカウントの名前。

データベースユーザのパスワード

Windows 認証を使用しないデータベースのオペレーショナルデータストアアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

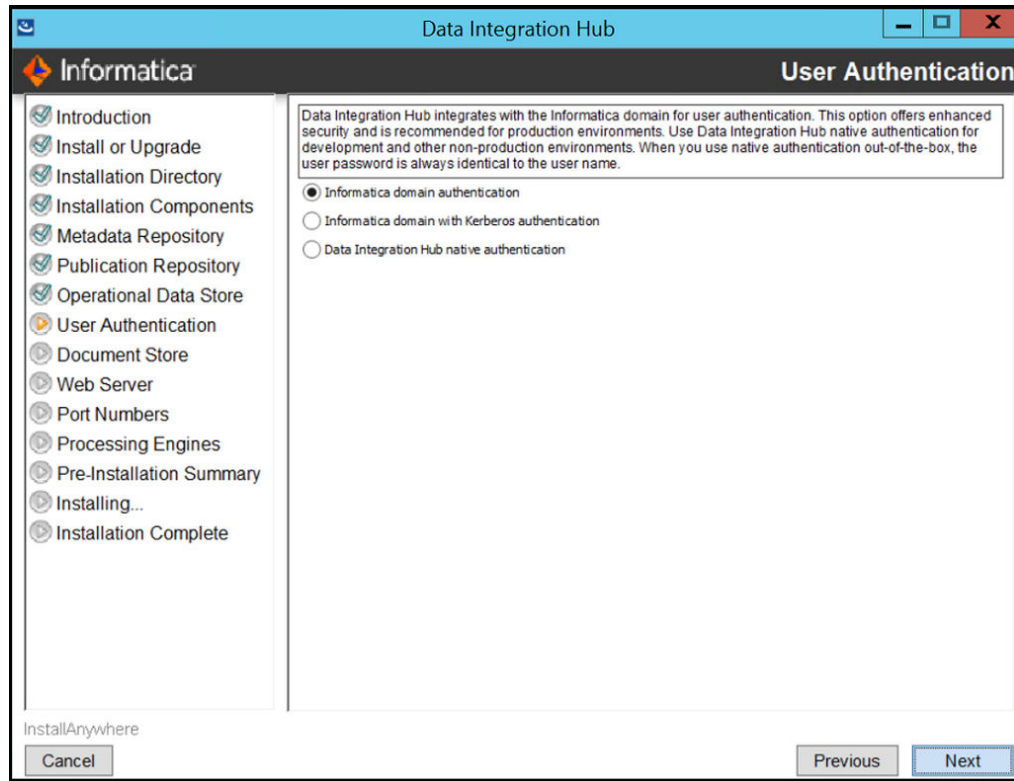
4. **[次へ]** をクリックします。
[ユーザー認証] ページが表示されます。

手順 5. ユーザー認証の設定

1. **[ユーザー認証]** ページで、使用するユーザー認証のタイプを選択します。
 - **[Informatica ドメイン認証]** を選択します。これは、Informatica ドメインでユーザー資格情報を管理し、ユーザー情報を Data Integration Hub と同期させる場合です。プロダクション環境には、Informatica ドメイン認証を使用します。詳細については、[「Informatica ドメイン認証の設定」 \(ページ 35\)](#) を参照してください。

注: Informatica ドメインが Kerberos 認証を使用する場合は、オプション **[Kerberos 認証を使用する Informatica ドメイン]** を選択します。
 - Informatica ドメインで Kerberos 認証を使用する場合は、**[Kerberos 認証を使用する Informatica ドメイン]** を選択します。プロダクション環境には、Kerberos 認証を使用する Informatica ドメインを使用します。詳細については、[「Kerberos 認証を使用する Informatica ドメインの設定」 \(ページ 37\)](#) を参照してください。

- でユーザー資格情報をローカルに管理する場合は、**[B2B Data Exchange ネイティブ認証]** Data Integration Hub を選択します。開発環境とステージング環境ではネイティブ認証を使用します。詳細については、[「Data Integration Hub ネイティブ認証の設定」](#) (ページ 38) を参照してください。



2. 認証情報を入力し、**[次へ]** をクリックします。

[Data Integration Hub ドキュメントストア] ページが表示されます。

Informatica ドメイン認証の設定

[ユーザー認証] ページで **[Informatica ドメイン認証]** オプションを選択すると、**[Informatica プラットフォーム認証]** ページで Informatica ドメイン認証を設定できます。

下の図は、[Informatica プラットフォーム認証] ページを示しています。

下の表は、[Informatica プラットフォーム認証] ページの構成に必要な設定を示しています。

ゲートウェイホスト

Informatica セキュリティドメインサーバーのホスト名。Data Integration Hub は、ホスト名を `pwd.domain.gateway` システムプロパティに格納します。

ゲートウェイポート番号

Informatica セキュリティドメインゲートウェイのポート番号。Data Integration Hub は、ポート番号を `pwd.domain.gateway` システムプロパティに格納します。ゲートウェイ HTTP ポート番号を使用して、PowerCenter Client からドメインに接続します。ドメインの接続に HTTPS ポート番号は使用できません。

ユーザ名

Administrator ツールにアクセスするためのユーザー名。Administrator ツールでユーザーを作成し、そのユーザーに [役割の管理]、[グループの管理]、または [ユーザーの管理] 権限を割り当てる必要があります。

パスワード

Informatica セキュリティドメインユーザーのパスワード。

セキュリティドメイン

ユーザーが定義されている Informatica セキュリティドメインの名前。

セキュリティグループ

オプション。Data Integration Hub ユーザーが次の形式で定義されている Informatica セキュリティドメイン内のセキュリティグループ。

`<security group>@<domain>`

このフィールドを空のままにすると、Informatica セキュリティドメインは Data Integration Hub 管理者ユーザーアカウントのみを同期させます。

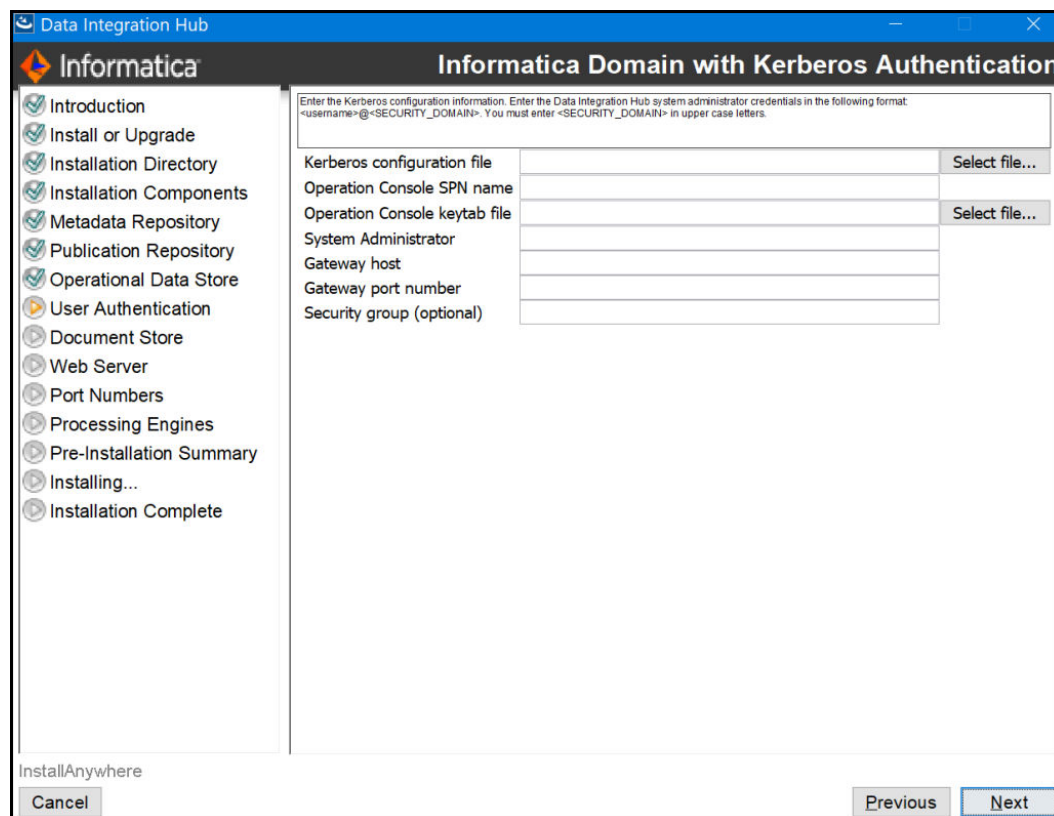
Data Integration Hub は、次の形式で `dx.authentication.groups` システムプロパティにセキュリティグループを格納します。

`<group name>@<security group>[;<groupname>@<security group>]`

Kerberos 認証を使用する Informatica ドメインの設定

[ユーザー認証] ページで [Kerberos 認証を使用する Informatica ドメイン] オプションを選択すると、[Kerberos 認証を使用する Informatica ドメイン] ページで認証設定を構成できます。

下の図は、[Kerberos 認証を使用する Informatica ドメイン] ページを示しています。



設定情報を入力します。

Kerberos 設定ファイル

Keberos 設定情報を格納するファイル（通常は krb5.conf と名付けられている）。

インストールではこのファイルが次の場所にコピーされます。

<DIHInstallationDir>/shared/conf/security/krb5.conf

操作コンソール SPN 名

Data Integration Hub 操作コンソールのサービスプリンシパル名（SPN）。

Data Integration Hub は、dx-security-config.properties プロパティファイルの dx.kerberos.console.service.principal.name プロパティに SPN を格納します。

操作コンソールキータブファイル

Data Integration Hub 操作コンソール SPN のキータブファイルの場所。

このファイルはインストーラによって次の場所にコピーされます。

<DIHInstallationDir>/shared/conf/security/HTTP_console.keytab

Data Integration Hub は、キータブファイルの場所を dx-security-config.properties プロパティファイルの dx.kerberos.console.keytab.file プロパティに格納します。

別のファイルを指すようにこのプロパティを変更する場合は、次の形式を使用してファイルの絶対パスを入力する必要があります。

file://<full_path>

システム管理者

Data Integration Hub システム管理者の資格情報。

この資格情報は次の形式で入力します。

<username>@<SECURITY_DOMAIN>

注: <SECURITY_DOMAIN>は大文字で入力する必要があります。

ゲートウェイホスト

PowerCenter ドメインゲートウェイホスト。

ゲートウェイポート番号

PowerCenter ドメインゲートウェイのポート番号。

セキュリティグループ

オプション。Data Integration Hub ユーザーが次の形式で定義されている Informatica セキュリティドメイン内のセキュリティグループ。

<security group>@<domain>

このフィールドを空のままにすると、Informatica セキュリティドメインは Data Integration Hub 管理者ユーザーアカウントのみを同期させます。

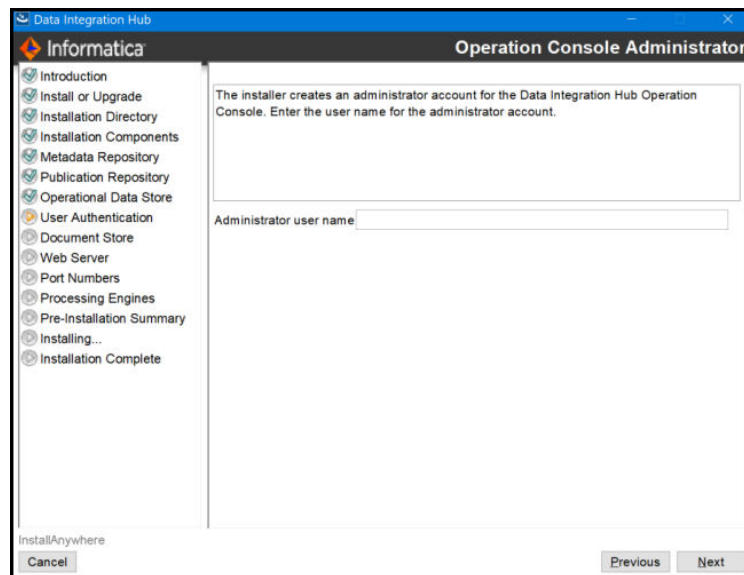
Data Integration Hub は、次の形式で dx.authentication.groups システムプロパティにセキュリティグループを格納します。

<group name>@<security group>[;<groupname>@<security group>]

Data Integration Hub ネイティブ認証の設定

[ユーザー認証] ページで [Data Integration Hub ネイティブ認証] オプションを選択した場合、[操作コンソール管理者] ページで Data Integration Hub の管理者ユーザー名を入力する必要があります。操作コンソールにログインするときには、Data Integration Hub はユーザー名とパスワード用にこの値を使用します。

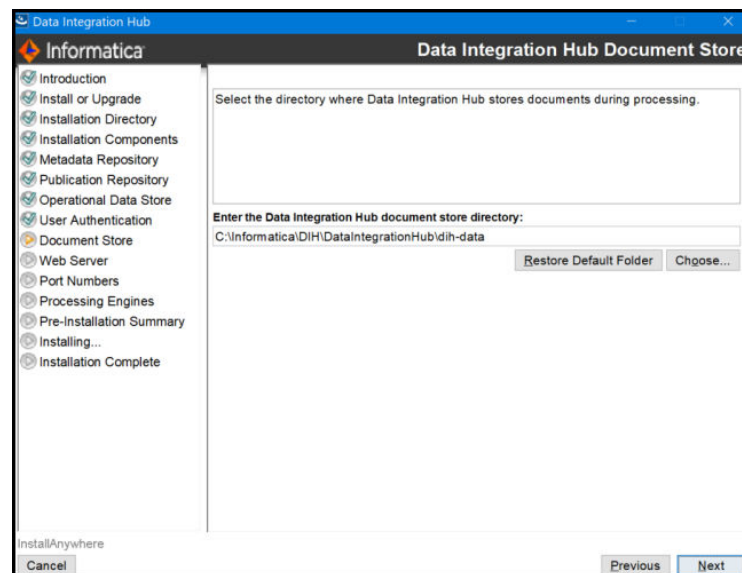
下の図は、[操作コンソール管理者] ページを示しています。



手順 6. ドキュメントストアと Web サーバーの構成

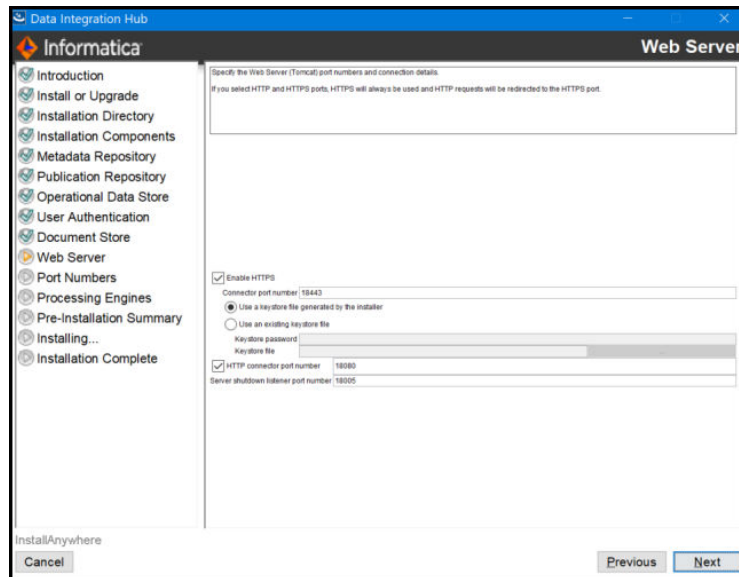
1. [Data Integration Hub ドキュメントストア] ページで、デフォルトのディレクトリを受け入れるか、ドキュメントストアディレクトリを作成するディレクトリを入力します。

Data Integration Hub は、処理中にドキュメントストアにドキュメントとファイルを格納します。ドキュメントストアディレクトリは、Data Integration Hub、PowerCenter サービスおよび Data Transformation からアクセスできる必要があります。



2. [次へ] をクリックします。

[Web サーバー] ページが表示されます。



3. 次のフィールドに値を入力します。

有効 HTTPS

Data Integration Hub に、ブラウザで操作コンソールを開く場合は、セキュリティで保護されたネットワーク通信を使用するよう指示します。HTTPS および HTTP を選択すると、操作コンソールにより既存の HTTP 接続は HTTPS 接続に切り替わります。

コネクタポート番号

HTTPS で操作コンソールを開く場合に使用する Tomcat コネクタのポート番号です。
デフォルト値は 18443 です。

インストーラによって生成されたキーストアを使用

未登録の証明書によりキーストアファイルを生成するようインストーラに指示します。このオプションを選択した場合、操作コンソールを初めて開いた際にブラウザから受け取るセキュリティ警告は無視します。

既存のキーストアファイルの使用

インストーラに既存のキーストアファイルをロードするよう指示します。次のフィールドに値を入力します。

- キーストアのパスワードキーストアファイルのパスワード
- キーストアファイル。キーストアファイルのパス。

キーストアファイルは、PKCS（Public Key Cryptography Standard: 公開鍵暗号標準）#12 方式である必要があります。

HTTP コネクタポート番号

HTTP コネクタのポート番号。このフィールドをクリアすると、操作コンソールへのログイン時、ブラウザから Data Integration Hub サーバーに HTTPS を使用して接続します。
デフォルト値は 18080 です。

サーバーシャットダウンリスナのポート番号

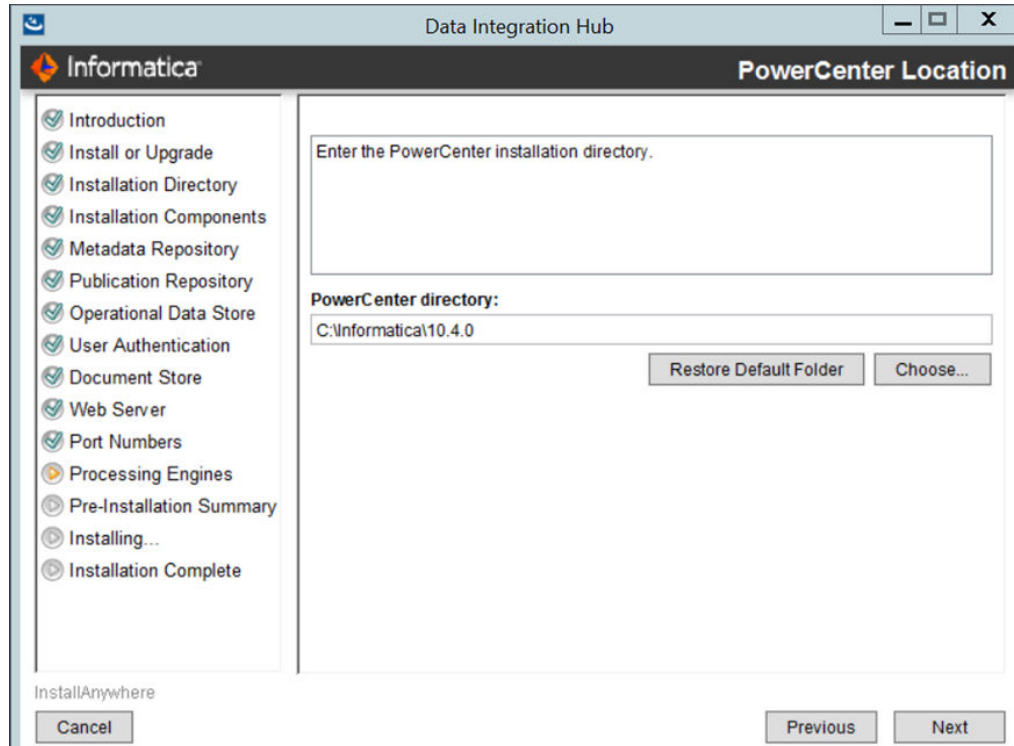
Tomcat サーバーシャットダウンを制御するリスナのポート番号。
デフォルト値は 18005 です。

4. **【次へ】** をクリックします。

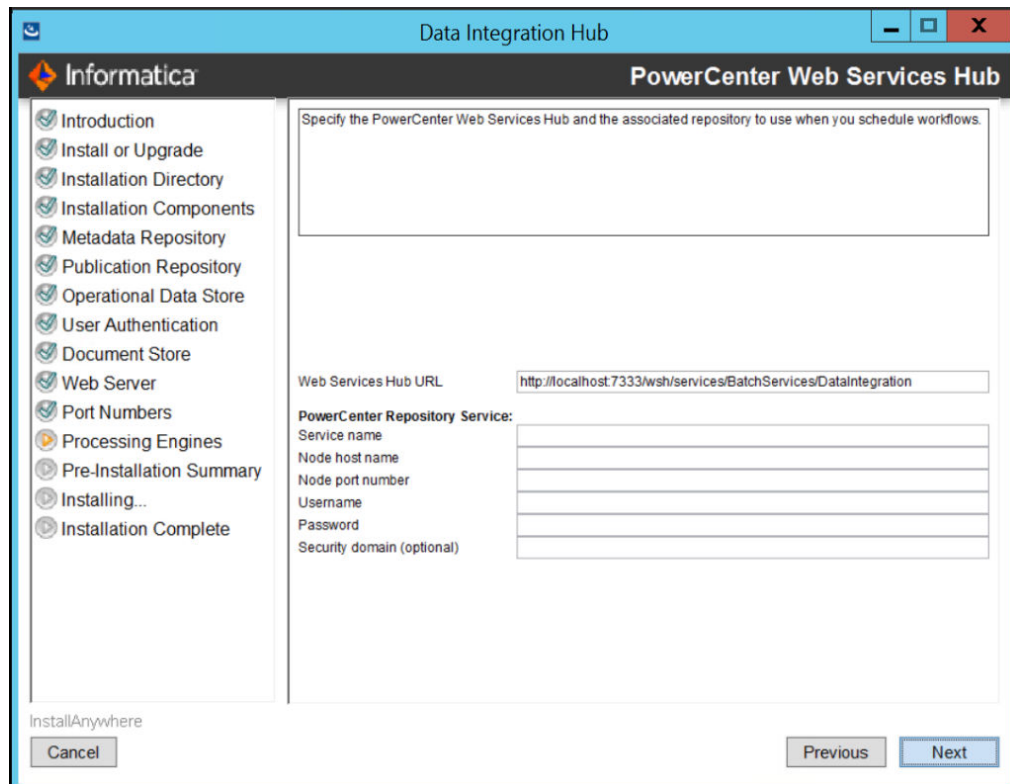
PowerCenter の Data Integration Hub サーバープラグインか、または PowerCenter コンポーネントの Data Integration Hub クライアントプラグインのインストールを選択している場合、**【PowerCenter の場所】** ページが表示されます。PowerCenter サーバーまたはクライアントコンポーネントを選択しなかった場合は、**【PowerCenter Web サービス Hub】** ページが表示されます。

手順 7.PowerCenter 設定の構成

1. PowerCenter 用 Data Integration Hub サーバープラグインまたは PowerCenter コンポーネント用 Data Integration Hub クライアントプラグインのインストールを選択した場合は、**[PowerCenter の場所]** ページで、PowerCenter をインストールしたディレクトリを入力するか、またはデフォルトディレクトリを受け入れて **Enter** キーを押します。



[PowerCenter Web サービス Hub] ページが表示されます。



2. **【PowerCenter Web サービス Hub】** ページで、PowerCenter Web サービスの詳細を入力します。

Web サービス Hub の URL

以下の場合に PowerCenter Web サービス Hub が使用する URL: パブリケーションおよびサブスクリプションのワークフローを処理する場合。

サービス名

PowerCenter リポジトリサービスの名前。

ノードのホスト名

PowerCenter リポジトリサービスを実行するノードのホスト名。

ノードのポート番号

PowerCenter リポジトリサービスを実行するノードのポート番号。

ユーザ名

PowerCenter リポジトリサービスユーザーの名前。

パスワード

PowerCenter リポジトリサービスユーザーのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

セキュリティドメイン

オプション。PowerCenter リポジトリサービスユーザーが保存されている Informatica セキュリティドメインの名前。

デフォルトは LDAP 認証です。

3. **【次へ】** をクリックします。

PowerCenter コンポーネントの Data Integration Hub サーバープラグインのインストールを選択した場合は、**[PowerCenter ドメイン設定]** ページが表示されます。
PowerCenter サーバーコンポーネントを選択しなかった場合は、**[PowerCenter pmrep コマンドラインユーティリティの場所]** ページが表示されます。手順 [6](#) に進みます。

4. 次のフィールドに値を入力します。

ドメイン名

Data Integration Hub ワークフローを実行するための PowerCenter 統合サービスを含む Informatica ドメインの名前。

ノード名

PowerCenter 統合サービスが実行する Informatica ドメインのノード。

ドメイン管理者のユーザー名

Informatica ドメイン管理者の名前。

ドメイン管理者のパスワード

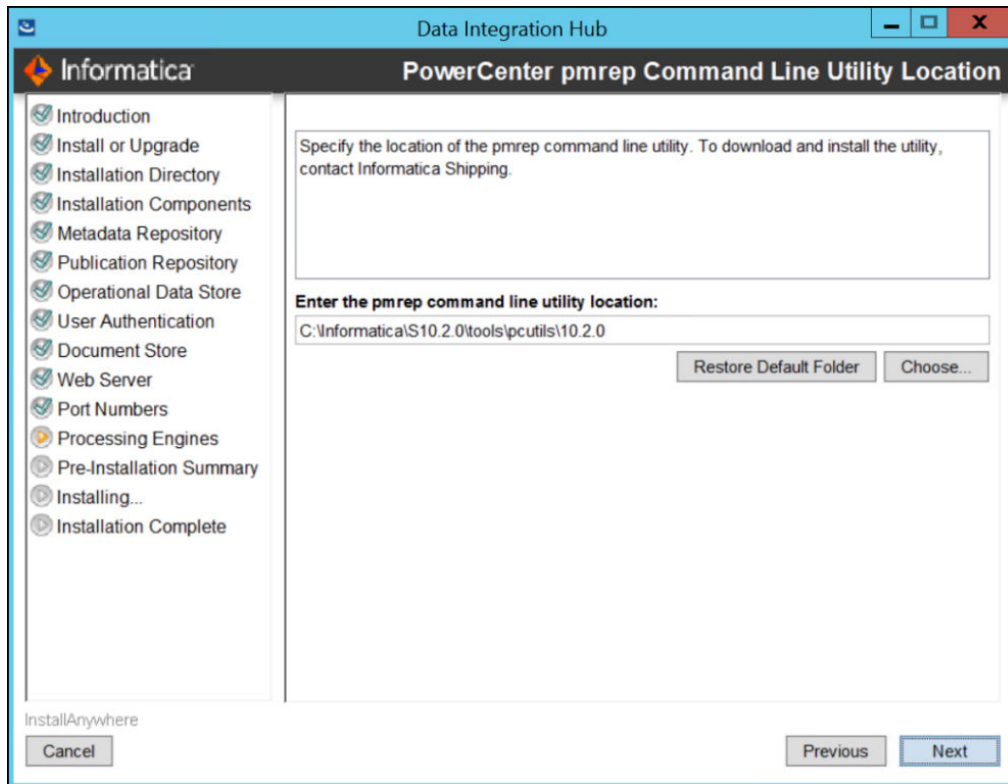
Informatica ドメイン管理者のパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

Integration Service 名

ワークフローを実行するために Data Integration Hub で使用する PowerCenter 統合サービスの名前。

5. **[次へ]** をクリックします。

[PowerCenter pmrep コマンドラインユーティリティの場所] ページが表示されます。



6. pmrep コマンドラインユーティリティの場所を指定します。

ユーティリティの場所は、PowerCenter サービスがインストールされているマシンに Data Integration Hub がインストールされているかどうかによって変わります。

環境	pmrep コマンドラインユーティリティの場所
Data Integration Hub は PowerCenter サービスがインストールされている場所にインストールされます。	<PowerCenter_services_installation_folder> \<PowerCenter_version>\tools\pcutils \<PowerCenter_version>
Data Integration Hub と PowerCenter サービスは、別々のマシンにインストールされます。	<PowerCenter_client_installation_folder> \<PowerCenter_version>\clients\PowerCenterClient\client \bin

7. [次へ] をクリックします。

Data Integration Hub Informatica Data Quality コンポーネントのインストールを選択した場合は、**[Informatica Data Quality ドメイン設定]** ページが表示されます。Data Integration Hub Informatica Data Quality コンポーネントのインストールを選択しなかった場合は、**[インストール前のサマリ]** ページが表示されます。

手順 8. Informatica Data Quality 設定の構成

1. Data Integration Hub Informatica Data Quality コンポーネントのインストールを選択した場合は、**[Informatica Data Quality ドメイン設定]** ページが表示されます。

次のフィールドに値を入力します。

ドメイン名

データ統合サービスが実行されているノードのドメイン名。

ホスト名

データ統合サービスが実行されているノードのホスト名。

ポート番号

データ統合サービスが実行されているノードのポート番号。

ドメイン管理者のユーザー名

ユーザーデータ統合サービスが実行されているノードのユーザー名。

ドメイン管理者のパスワード

データ統合サービスが実行されているノードのパスワード。

セキュリティドメイン

オプション。モデルリポジトリサービスユーザーが保存されている Informatica セキュリティドメインの名前。

データ統合サービス名

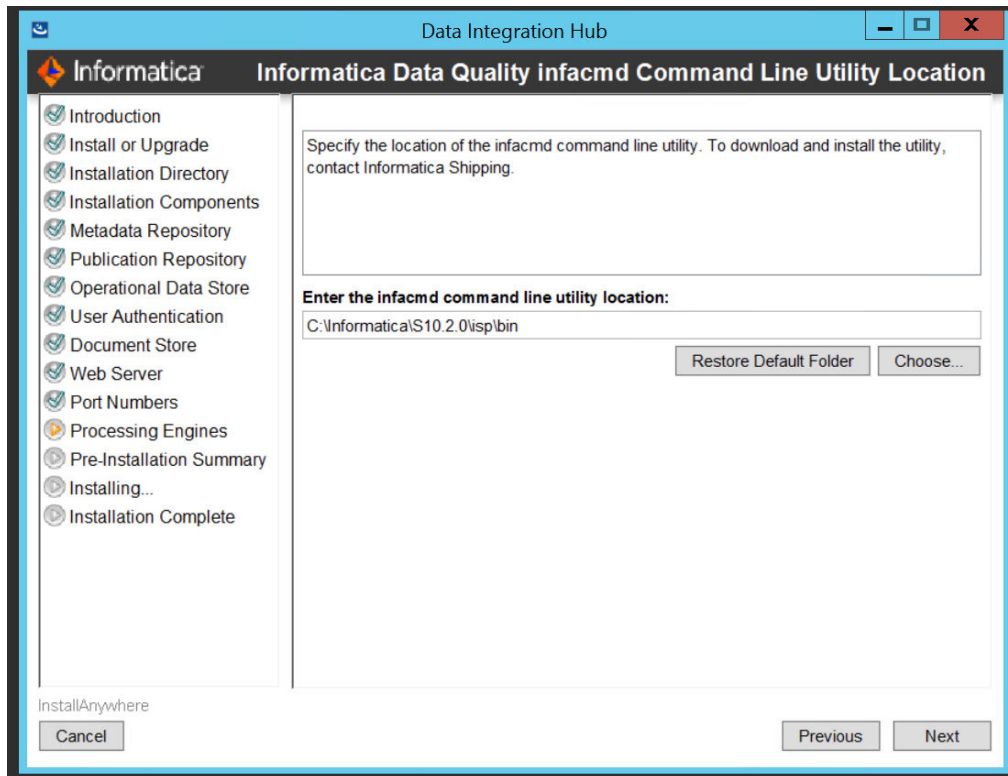
データ統合サービスの名前。

モデルリポジトリサービス名

モデルリポジトリサービスの名前。

2. **[次へ]** をクリックします。

[Informatica Data Quality infacmd コマンドラインユーティリティ] ページが表示されます。



3. infacmd コマンドラインユーティリティの場所を入力するか、またはデフォルトのディレクトリを受け入れて、[次へ] をクリックします。

[インストール前のサマリ] ページが表示されます。

手順 9. インストールの完了

1. [インストール前のサマリ] ページで、インストール情報が正しいことを確認し、[インストール] をクリックします。

インストールプロセス中、進捗情報が表示されます。インストールプロセスが終了すると、[インストール後のアクション] ページが表示されます。

2. Data Integration Hub PowerCenter サーバープラグインをインストールした場合は、ウィザードの指示に従ってプラグインを PowerCenter リポジトリに登録し、[次へ] をクリックします。

[インストールの完了] ページが表示されます。

3. [完了] をクリックして、インストーラを終了します。
4. インストーラによって生成されたログファイルを表示するには、次のディレクトリに移動します。
<DIHInstallationDir>\logs
5. 必要なインストール後のタスクを実行します。

詳細については、[第 5 章, 「インストール後の作業」 \(ページ 71\)](#)を参照してください。

注: ご利用の環境に関連したタスクのみ実行します。

6. 必要に応じて、追加の設定タスクを実行します。詳細については、[第 8 章, 「省略可能な Data Integration Hub 設定」 \(ページ 117\)](#)を参照してください。

UNIX オペレーティングシステムでの Data Integration Hub のコンソールモードでのインストール

UNIX オペレーティングシステムで、Data Integration Hub をコンソールモードでインストールします。Windows オペレーティングシステムでは、Data Integration Hub をグラフィカルモードでインストールします。

インストールする前に、使用している環境が最小システム要件を満たしていることを確認し、インストール前の手順を実行し、さらに PowerCenter サービスが実行中であることを確認します。

インストールの間、Data Integration Hub により DXLogs サブディレクトリにあるユーザーのホームディレクトリにログファイルが保存されます。インストールが正常に終了しなかった場合は、この場所でログファイルを確認できます。

手順 1. インストーラの実行

1. Data Integration Hub のインストールに使用するユーザーアカウントでマシンにログインします。
権限エラーを回避するため、Data Integration Hub と PowerCenter のインストールには同じアカウントを使用します。
2. 他のすべてのアプリケーションを終了します。
3. インストーラをダウンロードしたディレクトリで `Install.bin -i console` を実行します。
【概要】 セクションが表示されます。
4. 説明を読み、**Enter** キーを押します。
【インストールまたはアップグレード】 セクションが表示されます。
5. **1** を入力して Data Integration Hub をインストールした後、**Enter** キーを押します。
【インストールディレクトリ】 セクションが表示されます。

手順 2. インストール設定の定義

1. 【インストールディレクトリ】 セクションで、インストールディレクトリへの絶対パスを入力するか、またはデフォルトのディレクトリを受け入れて、**Enter** キーを押します。
【インストールコンポーネント】 セクションが表示され、インストールするコンポーネントの番号付きリストが表示されます。
2. インストールするコンポーネントのカンマ区切りリスト番号を入力するか、またはデフォルトのコンポーネントを受け入れます。
 - 1- Data Integration Hub
Data Integration Hub のコアアプリケーションをインストールします。
デフォルトで選択されています。
 - 2- Data Integration Hub **ダッシュボードとレポート**
ダッシュボードを Data Integration Hub で使用可能にするには、2 つの方法があります。Data Integration Hub をインストールすると、オペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードを有効にすることができます。その他の場合、デフォルトで使用可能なメタデータリポジトリを使用するダッシュボードを使用できます。

Data Integration Hub のダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールします。ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールするには、Data Integration Hub をインストールする必要があります。

デフォルトでは選択されていません。

注:

- メタデータディレクトリを使用するダッシュボードはデフォルトでインストールされています。このコンポーネントは、オペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードにレポートを表示する場合に選択します。インストール後、オペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードにレポートを表示するには、`dx.dashboard.ods.page.show` システムプロパティを `true` に設定する必要があります。詳細については、『*Data Integration Hub 管理者ガイド*』と『*Data Integration Hub オペレータガイド*』を参照してください。
- ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールする場合は、Data Integration Hub をインストールした後に、オペレーショナルデータストアイベントローダーをインポートする必要があります。
- ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールするときに、Data Integration Hub およびオペレーショナルデータストアリポジトリが Microsoft SQL Server にインストールされており、PowerCenter バージョン 10 を使用している場合は、PowerCenter Workflow Manager でリポジトリ接続を設定する必要があります。詳細については、[「PowerCenter バージョン 10 でのリポジトリ接続の設定」 \(ページ 127\)](#) を参照してください。

3- PowerCenter 用 Data Integration Hub サーバープラグイン

Data Integration Hub PowerCenter サーバープラグインコンポーネントをインストールします。インストール後、プラグインを PowerCenter リポジトリに登録します。

デフォルトで選択されています。

4- Data Integration Hub Hadoop サービス

Data Integration Hub と Hadoop クラスタ間の接続モジュール。Data Integration Hub が Hadoop パブリケーションリポジトリに対して操作を実行できるようにします。

Hadoop ベースのパブリケーションリポジトリを定義し、トピックの一部を Hadoop で管理する場合は、このコンポーネントを選択します。

注: Data Integration Hub Hadoop サービスは、Hadoop クラスタのエッジノードにインストールする必要があります。Data Integration Hub を Hadoop エッジノードにインストールしない場合は、Data Integration Hub インストール時にこのコンポーネントを選択しないでください。この場合、Data Integration Hub インストールの完了後に、エッジノードで再度インストールを実行し、エッジノードに Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントのみをインストールすることを選択します。

5- Data Integration Hub Data Engineering Integration/Informatica Data Quality

カスタムパブリケーションおよびカスタムサブスクリプションを行うために、Data Integration Hub で Data Engineering Integration および Data Quality マッピングを使用できるようにします。

このコンポーネントは、Data Integration Hub で、Data Engineering Integration または Data Quality マッピングを使用するカスタムパブリケーションおよびカスタムサブスクリプションを作成する場合に選択します。

3. **Enter** キーを押します。

[PowerCenter のバージョンの選択] セクションが表示されます。

4. Data Integration Hub をインストールする PowerCenter のバージョンを選択するか、デフォルトの選択を受け入れます。

1- PowerCenter バージョン 10.5 未満。

PowerCenter バージョン 10.5 未満の場合は、このオプションを選択します。

2- PowerCenter バージョン 10.5。

PowerCenter バージョン 10.5 の場合は、このオプションを選択します。

5. **【入力】** キーを押します。

【メタデータリポジトリ】 セクションが表示されます。

手順 3.Data Integration Hub リポジトリの設定

1. **【メタデータリポジトリ】** セクションで、メタデータリポジトリデータベースの設定オプションの番号を入力するか、デフォルトのオプションを受け入れます。

1- Data Integration Hub リポジトリを作成する

リポジトリをデータベース内に作成します。

2- 既存の Data Integration Hub リポジトリを使用する

既存のリポジトリ内のテーブルおよびデータを使用します。

2. **【入力】** キーを押します。

【メタデータリポジトリの接続】 セクションが表示されます。

3. Data Integration Hub メタデータリポジトリデータベースとして使用する予定のデータベースに応じて、次のいずれかの数値を入力します。

- Data Integration Hub メタデータリポジトリデータベースとして Oracle データベースを使用する場合は、「1」と入力します。
- Data Integration Hub メタデータリポジトリデータベースとして Microsoft SQL Server データベースを使用する場合は、「2」と入力します。

4. メタデータリポジトリデータベース接続タイプの番号を入力するか、またはデフォルトの接続タイプを受け入れます。

1- データベース URL

データベースの場所。このオプションを選択する場合、次のフィールドに値を入力します。

- **【データベースホスト名】**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
- **【データベースポート番号】**。データベースのポート番号。Oracle のデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server および Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポートは 1433 です。
- **【データベース SID】**。データベースのシステム識別子。
- **【Microsoft SQL Server データベース】** または **【Microsoft Azure SQL データベース】**。データベース名。データベースインスタンスの名前。

2- カスタム接続文字列

データベースへの接続文字列。このオプションを選択する場合、次のいずれかのフィールドに値を入力します。

- **JDBC 文字列**。メタデータリポジトリに対する JDBC 接続文字列。
- **ODBC 文字列**。メタデータリポジトリに対する ODBC 接続文字列。PowerCenter Client プラグインをインストールする場合に適用できます。インストーラで ODBC 文字列の有効性を検証することはできません。

注: Microsoft SQL Server データベースの名前付きインスタンスを使用する場合、**[データベース URL]** オプションを使用してデータベースインスタンスに接続できません。**[カスタム接続文字列]** オプションを使用します。

例:

```
jdbc:informatica:sqlserver://MYSQLSERVERCOMPUTERHOSTNAME  
\MYDBINSTANCENAME;DatabaseName=MYDATABASENAME;
```

5. 次のフィールドに値を入力します。

データベースユーザー名

データベースユーザーアカウントの名前。

データベースユーザのパスワード

データベースのデータベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

6. **Enter** キーを押します。

7. パブリケーションリポジトリ接続タイプの番号を入力するか、またはデフォルトの接続タイプを受け入れます。

注: Microsoft SQL Server の名前付きインスタンスを使用する場合は、カスタム接続文字列を定義する必要があります。

1- データベース URL

データベースの場所。このオプションを選択する場合、次のフィールドに値を入力します。

- **[データベースホスト名]**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
- **[データベースポート番号]**。データベースのポート番号。Oracle のデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server または Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポート。
- **[Oracle データベース]** データベース SID。データベースのシステム識別子。
- **[Microsoft SQL Server データベース]** または **[Microsoft Azure SQL データベース]**。データベース名。データベースインスタンスの名前。

2- カスタム接続文字列

データベースへの接続文字列。このオプションを選択する場合、次のいずれかのフィールドに値を入力します。

- **[JDBC 文字列]**。パブリケーションリポジトリに対する JDBC 接続文字列。
- **[ODBC 文字列]**。PowerCenter Client プラグインをインストールする場合に適用できます。パブリケーションリポジトリに対する ODBC 接続文字列。インストーラで ODBC 文字列の有効性を検証することはできません。

注: Microsoft SQL Server データベースの名前付きインスタンスを使用する場合、**[データベース URL]** オプションを使用してデータベースインスタンスに接続できません。**[カスタム接続文字列]** オプションを使用します。

例:

```
jdbc:informatica:sqlserver://MYSQLSERVERCOMPUTERHOSTNAME  
\MYDBINSTANCENAME;DatabaseName=MYDATABASENAME;
```

8. **[入力]** キーを押します。

9. 次のフィールドに値を入力します。

データベースユーザー名

データベースのデータベースユーザーアカウントの名前。

データベースユーザのパスワード

データベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

10. **【入力】** キーを押します。

Data Integration Hub のダッシュボードとレポートコンポーネントのインストールを選択した場合は、**【オペレーショナルデータストア】** セクションが表示されます。ダッシュボードとレポートコンポーネントのインストールを選択していない場合は、[「手順 5. Web サーバーの設定」 \(ページ 107\)](#)に進みます。

手順 4. オペレーショナルデータストアのセットアップ

1. **【オペレーショナルデータストア】** セクションで、オペレーショナルデータストアのデータベース設定オプションの番号を入力するか、デフォルトのオプションを受け入れます。

1- オペレーショナルデータストアリポジトリを作成する

データベース内にオペレーショナルデータストアリポジトリを作成します。

2- 既存のオペレーショナルデータストアリポジトリを使用する

既存のオペレーショナルデータストアリポジトリ内のテーブルおよびデータを使用します。

2. オペレーショナルデータストアに関するデータベース接続タイプの番号を入力するか、またはデフォルトの接続タイプを受け入れます。

1- データベース URL

データベースの場所。このオプションを選択する場合、次のフィールドに値を入力します。

- **【データベースホスト名】**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
- **【データベースポート番号】** データベースのポート番号。Oracle のデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server または Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポートは 1433 です。
- **【Oracle データベース】** データベース SID。データベースのシステム識別子。
- **【Microsoft SQL Server データベース】** または **【Microsoft Azure SQL データベース】**。データベース名。データベースインスタンスの名前。

2- カスタム接続文字列

データベースへの接続文字列。このオプションを選択する場合、次のいずれかのフィールドに値を入力します。

- **JDBC 文字列**。オペレーショナルデータストアに対する JDBC 接続文字列。
- **[ODBC 文字列]**。オペレーショナルデータストアに対する ODBC 接続文字列。PowerCenter Client プラグインをインストールする場合、インストーラでは ODBC 文字列の有効性を検証できません。

注: Microsoft SQL Server データベースの名前付きインスタンスを使用する場合、**【データベース URL】** オプションを使用してデータベースインスタンスに接続できません。**【カスタム接続文字列】** オプションを使用します。

例:

```
jdbc:informatica:sqlserver://MYSQLSERVERCOMPUTERHOSTNAME  
\\MYDBINSTANCENAME;DatabaseName=MYDATABASENAME;
```

3. オペレーショナルデータストアについて、次のフィールドに値を入力します。

データベースユーザー名

データベースのデータベースユーザーアカウントの名前。

データベースユーザのパスワード

データベースのデータベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

4. **【入力】** キーを押します。

【ユーザー認証】 セクションが表示されます。

手順 5. ユーザー認証の設定

1. **【ユーザー認証】** セクションで、使用するユーザー認証のタイプを選択します。

- **【Informatica ドメイン認証】** を選択します。これは、Informatica ドメインでユーザー資格情報を管理し、ユーザー情報を Data Integration Hub と同期させる場合です。プロダクション環境には、Informatica ドメイン認証を使用します。詳細については、[「Informatica ドメイン認証の設定」 \(ページ 53\)](#)を参照してください。

注: Informatica ドメインが Kerberos 認証を使用する場合は、オプション **【Kerberos 認証を使用する Informatica ドメイン】** を選択します。

- Informatica ドメインが Kerberos 認証を使用する場合は、**【Kerberos 認証を使用する Informatica ドメイン】** を選択します。プロダクション環境には、Kerberos 認証を使用する Informatica ドメインを使用します。詳細については、[「Kerberos 認証を使用する Informatica ドメインの設定」 \(ページ 54\)](#)を参照してください。
- **【B2B Data Exchange ネイティブ認証】** **【Data Integration Hub ネイティブ認証】** Data Integration Hub。開発環境とステージング環境ではネイティブ認証を使用します。詳細については、[「Data Integration Hub ネイティブ認証の設定」 \(ページ 55\)](#)を参照してください。

2. **【入力】** キーを押します。

【ドキュメントストア】 セクションが表示されます。

Informatica ドメイン認証の設定

Informatica ドメイン認証を選択する場合は、次のフィールドに値を入力します。

ゲートウェイホスト

Informatica セキュリティドメインサーバーのホスト名。Data Integration Hub は、ホスト名を `pwd.domain.gateway` システムプロパティに格納します。

ゲートウェイポート

Informatica セキュリティドメインゲートウェイのポート番号。Data Integration Hub は、ポート番号を `pwd.domain.gateway` システムプロパティに格納します。ゲートウェイ HTTP ポート番号を使用して、PowerCenter Client からドメインに接続します。ドメインの接続に HTTPS ポート番号は使用できません。

ユーザ名

Administrator ツールにアクセスするためのユーザー名。Administrator ツールでユーザーを作成し、そのユーザーに **【役割の管理】**、**【グループの管理】**、または **【ユーザーの管理】** 権限を割り当てる必要があります。

パスワード

Informatica セキュリティドメインユーザーのパスワード。

セキュリティドメイン

ユーザーが定義されている Informatica セキュリティドメインの名前。

セキュリティグループ

オプション。Data Integration Hub ユーザーが次の形式で定義されている Informatica セキュリティドメイン内のセキュリティグループ。

<security group>@<domain>

このフィールドを空のままにすると、Informatica セキュリティドメインは Data Integration Hub 管理者ユーザーアカウントのみを同期させます。

Data Integration Hub は、次の形式で dx.authentication.groups システムプロパティにセキュリティグループを格納します。

<group name>@<security group>[;<groupname>@<security group>]

Kerberos 認証を使用する Informatica ドメインの設定

[Kerberos 認証を使用する Informatica ドメイン] を選択する場合は、次のフィールドに値を入力します。

Kerberos 設定ファイル

Kerberos 設定情報を格納するファイル（通常は krb5.conf と名付けられている）。

インストールではこのファイルが次の場所にコピーされます。

<DIHInstallationDir>/shared/conf/security/krb5.conf

操作コンソール SPN 名

Data Integration Hub 操作コンソールのサービスプリンシパル名（SPN）。

Data Integration Hub は、dx-security-config.properties プロパティファイルの dx.kerberos.console.service.principal.name プロパティに SPN を格納します。

操作コンソールキータブファイル

Data Integration Hub 操作コンソール SPN のキータブファイルの場所。

インストールではこのファイルが次の場所にコピーされます。

<DIHInstallationDir>/shared/conf/security/HTTP_console.keytab

Data Integration Hub は、キータブファイルの場所を dx-security-config.properties プロパティファイルの dx.kerberos.console.keytab.file プロパティに格納します。

別のファイルを指すようにこのプロパティを変更する場合は、次の形式を使用してファイルの絶対パスを入力する必要があります。

file://<full_path>

システム管理者

Data Integration Hub システム管理者の資格情報。

この資格情報は次の形式で入力します。

<username>@<SECURITY_DOMAIN>

注: <SECURITY_DOMAIN>は大文字で入力する必要があります。

ゲートウェイホスト

PowerCenter ドメインゲートウェイホスト。

ゲートウェイポート番号

PowerCenter ドメインゲートウェイのポート番号。

セキュリティグループ

オプション。Data Integration Hub ユーザーが次の形式で定義されている Informatica セキュリティドメイン内のセキュリティグループ。

<security group>@<domain>

このフィールドを空のままにすると、Informatica セキュリティドメインは Data Integration Hub 管理者ユーザーアカウントのみを同期させます。

Data Integration Hub は、次の形式で dx.authentication.groups システムプロパティにセキュリティグループを格納します。

<group name>@<security group>[;<groupname>@<security group>]

Data Integration Hub ネイティブ認証の設定

[Data Integration Hub ネイティブ認証] を選択した場合、Data Integration Hub 管理者ユーザー名を入力します。操作コンソールにログインするときには、Data Integration Hub はユーザー名とパスワード用にこの値を使用します。

手順 6. ドキュメントストアと Web サーバーの構成

1. **[ドキュメントストア]** セクションで、処理中に Data Integration Hub がドキュメントおよびファイルを保存するディレクトリを入力するか、またはデフォルトのディレクトリを受け入れ、Enter キーを押します。

ドキュメントストアディレクトリは、Data Integration Hub、PowerCenter サービスおよび Data Transformation からアクセスできる必要があります。

2. **[入力]** キーを押します。

[Web サーバー] セクションが表示されます。

3. Web サーバー接続を設定します。

- a. ネットワーク通信プロトコルの番号を入力するか、またはデフォルトのプロトコルを受け入れます。

1- HTTPS を有効にする

Data Integration Hub に、ブラウザで操作コンソールを開く場合は、セキュリティで保護されたネットワーク通信を使用するよう指示します。

HTTPS および HTTP を選択すると、操作コンソールにより既存の HTTP 接続は HTTPS 接続に切り替わります。

2- HTTP を有効にする

Data Integration Hub に、ブラウザで操作コンソールを開く場合は、通常の HTTP ネットワーク通信を使用するよう指示します。

- b. **[HTTPS を有効にする]** を選択している場合は、次のフィールドに値を入力します。

コネクタポート番号

HTTPS で操作コンソールを開く場合に使用する Tomcat コネクタのポート番号です。
デフォルト値は 18443 です。

インストーラによって生成されたキーストアを使用

未登録の証明書によりキーストアファイルを生成するようインストーラに指示します。このオプションを選択した場合、操作コンソールを初めて開いた際にブラウザから受け取るセキュリティ警告は無視します。

既存のキーストアファイルの使用

インストーラに既存のキーストアファイルをロードするよう指示します。次のフィールドに値を入力します。

- キーストアのパスワードキーストアファイルのパスワード
- キーストアファイル。キーストアファイルのパス。

キーストアファイルは、PKCS（Public Key Cryptography Standard: 公開鍵暗号標準）#12 方式である必要があります。

- c. **【HTTP を有効にする】** を選択している場合は、次のフィールドに値を入力します。

HTTP コネクタポート番号

HTTP コネクタのポート番号。このフィールドをクリアすると、操作コンソールへのログイン時、ブラウザから Data Integration Hub サーバーに HTTPS を使用して接続します。
デフォルト値は 18080 です。

サーバーシャットダウンリスナのポート番号

Tomcat サーバーシャットダウンを制御するリスナのポート番号。
デフォルト値は 18005 です。

4. **Enter** キーを押します。

Data Integration Hub PowerCenter サーバープラグインか、または Data Integration Hub PowerCenter Client プラグインコンポーネントのインストールを選択している場合、**【PowerCenter の場所】** セクションが表示されます。PowerCenter サーバーまたはクライアントコンポーネントを選択しなかった場合は、**【PowerCenter Web サービス Hub】** セクションが表示されます。

手順 7.PowerCenter 設定の構成

1. Data Integration Hub PowerCenter サーバープラグインまたは Data Integration Hub PowerCenter Client プラグインコンポーネントのインストールを選択した場合は、**【PowerCenter の場所】** セクションで、PowerCenter をインストールしたディレクトリを入力するか、またはデフォルトディレクトリを受け入れて **Enter** キーを押します。
【PowerCenter Web サービス】 セクションが表示されます。
2. **【PowerCenter Web サービス】** セクションで、**Enter** キーを押してデフォルトの URL を受け入れるか、**Enter** キーを押します。
3. PowerCenter リポジトリサービスの名前を入力し、**Enter** キーを押します。
4. 次のフィールドに値を入力します。

ノードのホスト名

PowerCenter リポジトリサービスを実行するノードのホスト名。

ノードのポート番号

PowerCenter リポジトリサービスを実行するノードのポート番号。

ユーザ名

PowerCenter リポジトリサービスユーザーの名前。

パスワード

PowerCenter リポジトリサービスユーザーのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

セキュリティドメイン

オプション。PowerCenter リポジトリサービスユーザーが保存されている Informatica セキュリティドメインの名前。
デフォルトは LDAP 認証です。

5. **【入力】** キーを押します。

PowerCenter コンポーネントの Data Integration Hub サーバープラグインのインストールを選択した場合、**【PowerCenter ドメイン設定】** セクションが表示されます。PowerCenter サーバーコンポーネントを選択しなかった場合は、**【PowerCenter pmrep コマンドラインユーティリティの場所】** セクションが表示されます。手順 9 に進みます。

6. 次のフィールドに値を入力します。

ドメイン名

Data Integration Hub ワークフローを実行するための PowerCenter 統合サービスを含む Informatica ドメインの名前。

ノード名

PowerCenter 統合サービスが実行する Informatica ドメインのノード。

ドメイン管理者のユーザー名

Informatica ドメイン管理者の名前。

ドメイン管理者のパスワード

Informatica ドメイン管理者のパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

7. **Enter** キーを押します。
8. ワークフローを実行するために Data Integration Hub で使用する PowerCenter 統合サービスの名前を入力し、**Enter** キーを押します。
9. pmrep コマンドラインユーティリティの場所を入力し、**【入力】** キーを押します。ユーティリティの場所は、PowerCenter サービスがインストールされているマシンに Data Integration Hub がインストールされているかどうかによって変わります。

注: Linux オペレーティングシステムでは、pmrep が実行可能でなければなりません。

環境	pmrep コマンドラインユーティリティの場所
Data Integration Hub は PowerCenter サービスがインストールされている場所にインストールされます。	<PowerCenter_services_installation_folder>/ <PowerCenter_version>/tools/pcutils/ <PowerCenter_version>
Data Integration Hub と PowerCenter サービスは、別々のマシンにインストールされます。	<PowerCenter_client_utility_directory>/PowerCenter/ server/bin

10. **Enter** キーを押します。

Data Integration Hub Data Engineering Integration/Informatica Data Quality コンポーネントのインストールを選択した場合、Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の **【ドメイン名】** セクションが表示されます。Data Integration Hub Data Engineering Integration/Informatica Data Quality コンポーネントのインストールを選択しなかった場合は、**【インストール前のサマリ】** セクションが表示されます。

手順 8.処理エンジン設定の構成

1. Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の **【ドメイン名】** セクションで、**Enter** キーを押してデフォルトのドメイン名を受け入れるか、Informatica ドメインの名前を入力して、**Enter** キーを押します。

Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の **【ホスト名】** セクションが表示されます。

2. **Enter** キーを押してデフォルトホスト名を受け入れるか、データ統合サービスが実行されているノードのホスト名を入力して **Enter** キーを押します。

Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の **【ポート番号】** セクションが表示されます。

3. **Enter** キーを押してデフォルトのポート番号を受け入れるか、データ統合サービスが実行されているノードのポート番号を入力して **Enter** キーを押します。

Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の **【管理者ユーザー名】** セクションが表示されます。

4. **Enter** キーを押してデフォルトユーザー名を受け入れるか、データ統合サービスが実行されているノードのユーザー名を入力して **Enter** キーを押します。

Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の **【管理者パスワード】** セクションが表示されます。

5. **Enter** キーを押してデフォルトパスワードを受け入れるか、データ統合サービスが実行されているノードのパスワードを入力して **Enter** キーを押します。

Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の **【セキュリティドメイン】** セクションが表示されます。

6. 必要に応じて、モデルリポジトリサービスユーザーが保存されている Informatica セキュリティドメインの名前を入力します。 **Enter** キーを押します。

Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の **【データ統合サービス名】** セクションが表示されます。

7. **Enter** キーを押してデフォルト名を受け入れるか、データ統合サービスの名前を入力して、**Enter** キーを押します。

Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の **【モデルリポジトリサービス名】** セクションが表示されます。

8. **Enter** キーを押してデフォルト名を受け入れるか、モデルリポジトリサービスの名前を入力して、**Enter** キーを押します。

Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の infacmd コマンドラインユーティリティの **【場所】** セクションが表示されます。

9. **Enter** キーを押してデフォルトの場所を受け入れるか、Infacmd コマンドラインユーティリティの場所を入力して、**Enter** キーを押します。

【インストール前のサマリ】 セクションが表示されます。

手順 9. インストールの完了

1. **【インストール前のサマリ】** セクションで、インストール情報が正しいことを確認し、**Enter** キーを押します。
インストールプロセス中、進捗情報が表示されます。
2. Data Integration Hub PowerCenter サーバープラグインをインストールした場合は、画面の指示に従い、プラグインを PowerCenter リポジトリに登録し、**Enter** キーを押します。
3. インストーラにより生成されたログファイルを表示するには、次のディレクトリに移動します。
<DIHInstallationDir>\logs
4. 必要なインストール後のタスクを実行します。
詳細については、[第 5 章, 「インストール後の作業」 \(ページ 71\)](#)を参照してください。
注: ご利用の環境に関連したタスクのみ実行します。
5. 必要に応じて、追加の設定タスクを実行します。詳細については、[第 8 章, 「省略可能な Data Integration Hub 設定」 \(ページ 117\)](#)を参照してください。

サイレントモードでの Data Integration Hub のインストール

Data Integration Hub をユーザー操作なしでインストールするには、サイレントモードでインストールします。プロパティファイルを使用して、インストールオプションを指定します。インストーラによりこのファイルが読み込まれ、インストールオプションが決定されます。サイレントモードによるインストールを使用して、Data Integration Hub をネットワーク上の複数のマシンにインストールしたり、マシン全体のインストールを標準化することができます。

サイレントインストールでは、単一ノードのすべての Data Integration Hub コンポーネントのフレッシュインストールがサポートされています。サイレントインストーラを使用した Data Integration Hub のアップグレードと、Data Integration Hub の高可用性マルチノードインストールはサポートされていません。インストールする前に、使用している環境が最小システム要件を満たしていることを確認し、インストール前の手順を実行し、さらに PowerCenter サービスが実行中であることを確認します。

サイレントモードでインストールするには、以下のタスクを実行します。

1. インストールプロパティファイルを設定し、そのプロパティファイル内でインストールオプションを指定する。
2. インストールプロパティファイルを使用してインストーラを実行する。

インストールプロパティの設定

インストールプロパティファイルには、インストーラに必要なパラメータが含まれています。

以下の表に、インストールプロパティファイルに追加するパラメータを示します。

パラメータ	説明
Data Integration Hub をインストールまたはアップグレードするかどうかを指定します。	
IS_INSTALL	Data Integration Hub をインストールするには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
IS_UPGRADE	Data Integration Hub をアップグレードするには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。 注: このパラメータを 1 に設定した場合は、BLANK_USER パラメータを 0 に設定し、CONFIGURED_USER パラメータを 1 に設定する必要があります。
次のパラメータを使用して、PowerCenter のバージョンを設定します。	
PMREP_HOME_1	pmrep コマンドラインユーティリティフォルダの絶対場所。
POWERCENTER_HOME_1	PowerCenter をインストールした絶対ディレクトリ。
次のパラメータを使用して、インストールディレクトリを設定します。	
USER_INSTALL_DIR	インストールディレクトリの絶対パス。。
次のパラメータを使用して、インストールするコンポーネントを設定します。	
DX_SERVER	Data Integration Hub アプリケーションをインストールするには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
DX_DASHBOARD	Data Integration Hub の「ダッシュボードとレポート」コンポーネントをインストールするには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
PC_SERVER_PLUGIN	PowerCenter サービス向けに Data Integration Hub サーバープラグインをインストールするには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は 0 に設定します。
PC_CLIENT_PLUGIN	PowerCenter クライアント向けに Data Integration Hub プラグインをインストールするには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。これは Windows にのみ適用されます。

パラメータ	説明
DIH_BIG_DATA_MANAGEMENT	Data Integration Hub Big Data Management コンポーネントをインストールするには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
DIH_HADOOP_SERVICE	Data Integration Hub Hadoop サービスをインストールするには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。これは Linux にのみ適用されます。
次のパラメータを使用して、Data Integration Hub リポジトリを設定します。	
BLANK_USER	Data Integration Hub リポジトリを新規作成するには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
CONFIGURED_USER	既存の Data Integration Hub リポジトリを設定するには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
DB_TYPE_1	Data Integration Hub メタデータリポジトリに使用するデータベースのタイプ。 次のいずれかのオプションを入力します。 - Oracle - SQLServer
DB_CONNECTION_STRING_1	カスタム接続文字列を使用するには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。 注: このパラメータを 1 に設定した場合、DB_HOST、DB_PORT および DB_SID を無視します。
DB_HOST_1	データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
DB_PORT_1	データベースサーバーのポート番号。Oracle のデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server のデフォルトのポート番号は 1433 です。
DB_SID_1	データベースのシステム識別子。完全修飾されたサービス名または完全修飾された SID を入力します。
DB_CONNECTION_STRING_VALUE_1	接続文字列の JDBC 値。このパラメータは、DB_CONNECTION_STRING_1 が 1 に設定されている場合にのみ設定します。
DB_ODBC_STRING_VALUE_1	必須。接続文字列のドライバ値。 次のいずれかのドライバ接続文字列を使用します。 - Oracle: {DataDirect 7.1 Oracle Wire Protocol};UID=%1;PWD=%2;Host=<Server_Host>;Port=1521;SN=<SID> - SQL server: {DataDirect 7.1 SQL Server Wire Protocol};UID=%1;PWD=%2;Server=<server>,<port_no>;Database=<REPO_DB>

パラメータ	説明
DB_WINDOWS_AUTHENTICATION_1	Microsoft Windows 認証メカニズムでユーザー名を認証するには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
DB_USER_1	Windows 認証を使用しないデータベースのデータベースユーザーアカウントの名前。
DB_PASSWORD_1	Windows 認証を使用しないデータベースのデータベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。
次のパラメータを使用して、パブリケーションリポジトリを設定します。	
STAGING_TYPE_1	Data Integration Hub パブリケーションリポジトリに使用するデータベースのタイプ。 次のいずれかのオプションを入力します。 - Oracle - SQLServer
STAGING_CONNECTION_STRING_1	カスタム接続文字列を使用するには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。 注: このパラメータを 1 に設定した場合、STAGING_HOST、STAGING_PORT および STAGING_SID を無視します。
STAGING_HOST_1	ステージングサーバーをインストールするマシンのホスト名。
STAGING_PORT_1	ステージングサーバーのポート番号。Oracle のデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server のデフォルトのポート番号は 1433 です。
STAGING_SID_1	データベースの場合のステージングのシステム識別子。完全修飾されたサービス名または完全修飾された SID を入力します。
STAGING_WINDOWS_AUTHENTICATION_1	Microsoft Windows 認証メカニズムでユーザー名を認証するには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
STAGING_USER_1	Windows 認証を使用しないデータベースのステージングユーザーアカウントの名前。
STAGING_PASSWORD_1	Windows 認証を使用しないステージングのデータベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。
STAGING_CONNECTION_STRING_VALUE_1	接続文字列の JDBC 値。このパラメータは、STAGING_CONNECTION_STRING_1 が 1 に設定されている場合のみ設定します。
次のパラメータを使用して、オペレーショナルデータストアを設定します。	

パラメータ	説明
ODS_DB_USE_NEW	オペレーショナルデータストアのリポジトリを作成するには、このパラメータを 1 に設定します。
ODS_DB_USE_EXISTING	既存のオペレーショナルデータストアのリポジトリを設定するには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
ODS_DB_TYPE_1	オペレーショナルデータストアに使用するデータベースのタイプ。 次のいずれかのオプションを入力します。 - Oracle - SQLServer
ODS_DB_CONNECTION_STRING_1	カスタム接続文字列を使用するには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。 注: このパラメータを 1 に設定した場合、ODS_HOST、ODS_PORT および ODS_SID を無視します。
ODS_DB_HOST_1	データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
ODS_DB_PORT_1	データベースのポート番号。Oracle データベースのデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server のデフォルトのポート番号は 1433 です。
ODS_DB_SID_1	データベースのシステム識別子。完全修飾されたサービス名または完全修飾された SID のいずれかを入力します。
ODS_DB_JDBC_STRING_VALUE_1	接続文字列の JDBC 値。このパラメータは、ODS_CONNECTION_STRING_1 が 1 に設定されている場合にのみ設定します。
ODS_DB_WINDOWS_AUTHENTICATION_1	Microsoft Windows 認証メカニズムでユーザー名を認証するには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
ODS_DB_USER_1	Windows 認証を使用しないデータベースのデータベースユーザーアカウントの名前。
ODS_DB_PASSWORD_1	Windows 認証を使用しないデータベースのデータベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。
次のパラメータを使用して、Kerberos 認証を使用する Informatica ドメインの設定を構成します。	
INTERNAL_AUTH	Data Integration Hub ネイティブ認証を使用するには、この値を 1 に設定します。それ以外の場合は、この値を 0 に設定します。
INTERNAL_AUTH_DEFAULT	Data Integration Hub ネイティブ認証をデフォルト認証として使用するには、この値を True に設定します。それ以外の場合は、この値を False に設定します。

パラメータ	説明
ISF_AUTH	Informatica ドメイン認証を使用するには、この値を 1 に設定します。それ以外の場合は、この値を 0 に設定します。
ISF_AUTH_DEFAULT	Informatica ドメイン認証をデフォルト認証として使用するには、この値を True に設定します。それ以外の場合は、False に設定します。
KERBEROS_AUTH	Kerberos 認証を使用する Informatica ドメインを使用するには、この値を 1 に設定します。それ以外の場合は、この値を 0 に設定します。
KERBEROS_AUTH_DEFAULT	Kerberos 認証を使用する Informatica ドメインをデフォルト認証として使用するには、この値を True に設定します。それ以外の場合は、この値を False に設定します。
次のパラメータを使用して、Informatica ドメイン認証の設定を構成します。	
INFA_HOST_1	Informatica セキュリティドメインサーバーのホスト名。
INFA_PORT_1	Informatica セキュリティドメインゲートウェイのポート番号。
INFA_USERNAME_1	Administrator ツールにアクセスするためのユーザー名。
INFA_PASSWORD_1	Informatica セキュリティドメインユーザーのパスワード。
INFA_SECURITY_DOMAIN_1	ユーザーが定義されている Informatica セキュリティドメインの名前。
INFA_SECURITY_GROUP_1	オプション。Data Integration Hub ユーザーが次の形式で定義されている Informatica セキュリティドメイン内のセキュリティグループ。 <セキュリティグループ>@<ドメイン>
次のパラメータを使用して、Data Integration Hub ネイティブ認証を設定します。	
CONSOLE_ADMIN_1	インストール中に作成される管理者アカウントのユーザー名。
次のパラメータを使用して、Data Integration Hub ドキュメントストアを設定します。	
DATA_STORE_FOLDER_1	Data Integration Hub が処理時にドキュメントを保存するディレクトリの絶対パス。
次のパラメータを使用して、Web サーバーを設定します。	

パラメータ	説明
TOMCAT_ENABLE_HTTPS_1	ブラウザで操作コンソールを開く場合に HTTPS セキュアネットワーク通信を使用するには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
TOMCAT_HTTPS_PORT_1	HTTPS で操作コンソールを開く場合に使用する Tomcat コネクタのポート番号です。 デフォルト値は 18443 です。
TOMCAT_EXISTING_KEYSTORE_FILE_1	既存のキーストアファイルを使用するには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
TOMCAT_KEYSTORE_PASSWORD_1	既存のキーストアを使用する場合は、キーストアファイルのパスワードを入力します。
TOMCAT_KEYSTORE_FILE_PATH_1	既存のキーストアを使用する場合は、キーストアファイルのパスを入力します。
TOMCAT_ENABLE_HTTP_1	ブラウザで操作コンソールを開く場合に HTTP ネットワーク通信を使用するには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
TOMCAT_PORT_1	HTTP コネクタのポート番号。
TOMCAT_SERVER_LISTENER_PORT_1	Tomcat サーバシャットダウンを制御するリスナのポート番号。 デフォルト値は 18005 です。
次のパラメータを使用して、PowerCenter の設定を構成します。	
PWC_VERSION_BEFORE_10_5	バージョンが 10.5 未満の PowerCenter に Data Integration Hub をインストールするには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
PWC_VERSION_10_5	PowerCenter バージョン 10.5 に Data Integration Hub をインストールするには、このパラメータを 1 に設定します。それ以外の場合は、このパラメータを 0 に設定します。
POWERCENTER_HOME_1	PowerCenter がインストールされる絶対パス。
PC_SCHEDULING_WORKFLOWS_1	必須。Data Integration Hub で PowerCenter サービスがバッチワークフローの処理に使用されるようにするには、このパラメータを 1 に設定する必要があります。
PC_WEB_SERVICES_URL_1	Data Integration Hub がバッチワークフローで処理するためのドキュメントを PowerCenter に転送する場合に、PowerCenter Web サービス Hub が使用する URL。

パラメータ	説明
PC_REPOSITORY_NAME_1	PowerCenter リポジトリサービスの名前。
PC_REPOSITORY_HOST_1	PowerCenter リポジトリサービスを実行するノードのホスト名。
PC_REPOSITORY_PORT_1	PowerCenter リポジトリサービスを実行するノードのポート番号。
PC_REPOSITORY_USER_1	PowerCenter リポジトリサービスユーザーの名前。
PC_REPOSITORY_PASSWORD_1	PowerCenter リポジトリサービスユーザーのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。
PC_REPOSITORY_SECURITY_DOMAIN_1	オプション。PowerCenter リポジトリサービスユーザーが保存されている Informatica セキュリティドメインの名前。 デフォルトは LDAP 認証です。
PC_DOMAIN_NAME_1	Data Integration Hub ワークフローを実行するための PowerCenter 統合サービスを含む Informatica ドメインの名前。
PC_NODE_NAME_1	PowerCenter 統合サービスが実行する Informatica ドメインのノード。
PC_ADMIN_USER_1	Informatica ドメイン管理者の名前。
PC_ADMIN_PASSWORD_1	Informatica ドメイン管理者のパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。
PC_INTEGRATION_SERVICE_1	ワークフローを実行するために Data Integration Hub で使用する PowerCenter 統合サービスの名前。
PMREP_HOME_1	pmrep コマンドラインユーティリティの絶対場所。
次のパラメータを使用して、Informatica Data Quality ドメイン設定を行います。	
DIS_DOMAIN_NAME_1	データ統合サービスを含む Informatica ドメインの名前。
DIS_HOST_NAME_1	データ統合サービスを実行するノードのホスト名。
DIS_PORT_NUMBER_1	データ統合サービスを実行するノードのポート番号。
DIS_ADMIN_SECURITY_DOMAIN_1	オプション。データ統合サービスユーザーが保存されている Informatica セキュリティドメインの名前。 デフォルトはネイティブです。
DIS_ADMIN_USER_1	Informatica ドメイン管理者の名前。

パラメータ	説明
DIS_ADMIN_PASSWORD_1	Informatica ドメイン管理者のパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。
DIS_INTEGRATION_SERVICE_1	バッチワークフローを実行するために Data Integration Hub で使用するデータ統合サービスの名前。
DIS_MODEL_REPOSITORY_SERVICE_1	バッチワークフローを保存するために Data Integration Hub で使用するデータ統合サービスの名前。
次のパラメータを使用して、Informatica Data Quality コマンドラインユーティリティを設定します。	
INFACMD_HOME_1	infacmd コマンドラインユーティリティの絶対場所。

インストーラプロパティの設定例

次のサンプルを使用して、Data Integration Hub をサイレントモードでインストールするためのインストールプロパティファイルを設定します。

```
#Install or Upgrade
#-----
IS_INSTALL=1
IS_UPGRADE=0

#PowerCenter pmrep Command Line Utility Location
#-----
PMREP_HOME_1=C:\\Informatica\\105\\server\\bin

#PowerCenter Version
#-----
PWC_VERSION_BEFORE_10_5=0
PWC_VERSION_10_5=1

#PowerCenter Location
#-----
POWERCENTER_HOME_1=C:\\Informatica\\105

#Installation Directory#Mandatory
#-----
USER_INSTALL_DIR=C:\\Informatica\\DIH

#Installation Components
#-----
DX_SERVER=0
DX_DASHBOARD=0
PC_SERVER_PLUGIN=0
PC_CLIENT_PLUGIN=1
DIH_HADOOP_SERVICE=0
DIH_BIG_DATA_MANAGEMENT=0

#Metadata Repository
#-----
BLANK_USER=0
CONFIGURED_USER=1

#Metadata Repository Connection
#-----
```

```

DB_TYPE_1=SQLServer
DB_CONNECTION_STRING_1=0
DB_HOST_1=<serverhost>
DB_PORT_1=<port_no>
DB_SID_1=<REPO_SID>
DB_CONNECTION_STRING_VALUE_1=jdbc:informatica:sqlserver://<server>:<port_no>;DatabaseName=<DB_Name>;
DB_ODBC_STRING_VALUE_1=DRIVER={DataDirect 7.1 SQL Server Wire Protocol};UID=%1;PWD=%2;Server=<server>,
<port_no>;Database=<REPO_DB>
DB_WINDOWS_AUTHENTICATION_1=0
DB_USER_1=<db_username>
DB_PASSWORD_1=<db_password>

#Publication Repository Connection
#-----
STAGING_TYPE_1=SQLServer
STAGING_CONNECTION_STRING_1=0
STAGING_HOST_1=<serverhost>
STAGING_PORT_1=<port_no>
STAGING_SID_1=<STAGING_SID>
STAGING_WINDOWS_AUTHENTICATION_1=0
STAGING_USER_1=<db_username>
STAGING_PASSWORD_1=<db_password>
STAGING_CONNECTION_STRING_VALUE_1=jdbc:informatica:sqlserver://<server>:<port_no>;DatabaseName=<DB_Name>;

#Operational Data Store
#-----
ODS_DB_USE_NEW=1
ODS_DB_USE_EXISTING=0

#Operational Data Store Database Connection
#-----
ODS_DB_TYPE_1=SQLServer
ODS_DB_CONNECTION_STRING_1=0
ODS_DB_HOST_1=<server_host>
ODS_DB_PORT_1=<port_no>
ODS_DB_SID_1=<ODS_SID>
ODS_DB_JDBC_STRING_VALUE_1=
ODS_DB_WINDOWS_AUTHENTICATION_1=0
ODS_DB_USER_1=<db_username>
ODS_DB_PASSWORD_1=<db_password>

#User Authentication
#-----
INTERNAL_AUTH=1
INTERNAL_AUTH_DEFAULT=true
ISF_AUTH=0
ISF_AUTH_DEFAULT=false
KERBEROS_AUTH=0
KERBEROS_AUTH_DEFAULT=false

#Informatica Platform Authentication
#-----
INFA_HOST_1=$INFA_HOST_1$
INFA_PORT_1=$INFA_PORT_1$
INFA_USERNAME_1=$INFA_USERNAME_1$
INFA_PASSWORD_1=
INFA_SECURITY_DOMAIN_1=$INFA_SECURITY_DOMAIN_1$
INFA_SECURITY_GROUP_1=$INFA_SECURITY_GROUP_1$

#Operation Console Administrator
#-----
CONSOLE_ADMIN_1=Administrator

#Data Integration Hub Document Store
#-----
DATA_STORE_FOLDER_1=C:\\Informatica\\DIH\\DataIntegrationHub\\dih-data

#Web Server
#-----

```

```

TOMCAT_ENABLE_HTTPS_1=1
TOMCAT_HTTPS_PORT_1=18443
TOMCAT_EXISTING_KEYSTORE_FILE_1=0
TOMCAT_KEYSTORE_PASSWORD_1=
TOMCAT_KEYSTORE_FILE_PATH_1=
TOMCAT_ENABLE_HTTP_1=1
TOMCAT_PORT_1=18080
TOMCAT_SERVER_LISTENER_PORT_1=18005

#PowerCenter Location
#-----
POWERCENTER_HOME_1=C:\\Informatica\\105

#PowerCenter Web Services Hub
#-----
PC_SCHEDULING_WORKFLOWS_1=1
PC_WEB_SERVICES_URL_1=http://<hostname>:7333/wsh/services/BatchServices/DataIntegration
PC_REPOSITORY_NAME_1=<PowerCenter_Repository_Name>
PC_REPOSITORY_HOST_1=<hostname>
PC_REPOSITORY_PORT_1=<PwC_Port_no>
PC_REPOSITORY_USER_1=<PwC_username>
PC_REPOSITORY_PASSWORD_1=<PwC_password>
PC_REPOSITORY_SECURITY_DOMAIN_1=<Optional>

#PowerCenter Domain Settings
#-----
PC_DOMAIN_NAME_1=<PwC_Domain_Name>
PC_NODE_NAME_1=<PwC_node_Name_inDomain>
PC_ADMIN_USER_1=<PwC_username>
PC_ADMIN_PASSWORD_1=<PwC_password>
PC_INTEGRATION_SERVICE_1=<PwC_Integration_Service_Name>

#PowerCenter pmrep Command Line Utility Location
#-----
PMREP_HOME_1=C:\\Informatica\\105\\server\\bin

#Informatica Data Quality Domain Settings
#-----
DIS_DOMAIN_NAME_1=<IDQ_Domain_name>
DIS_HOST_NAME_1=<host_name>
DIS_PORT_NUMBER_1=<IDQ_Port>
DIS_ADMIN_SECURITY_DOMAIN_1=<Optional>
DIS_ADMIN_USER_1=<IDQ_Domain_username>
DIS_ADMIN_PASSWORD_1=<IDQ_Domain_password>
DIS_INTEGRATION_SERVICE_1=<DIS_Name>
DIS_MODEL_REPOSITORY_SERVICE_1=<MRS_Name>

#Informatica Data Quality infacmd Command Line Utility Location
#-----
INFACMD_HOME_1=C:\\Informatica\\105\\isp\\bin

```

サイレントインストーラの実行

インストーラをサイレントモードで実行する前に、必ずインストーラの構成ファイルを設定します。

1. テキストファイルのインストーラプロパティを設定します。

注:

- インストーラプロパティファイルで設定するパラメータの詳細については、[「インストールプロパティの設定」 \(ページ 60\)](#)を参照してください。
 - インストーラプロパティファイルのサンプルの使用については、[「インストーラプロパティの設定例」 \(ページ 67\)](#)を参照してください。
2. 次のコマンドをコマンドプロンプトで実行して、インストーラプロパティファイルを使用して B2B Data Exchange をサイレントインストールします。

- Windows オペレーティングシステムを使用する場合は、次のコマンドを実行します:
`Install.exe -i silent -f <installer.properties>`。ここで、filename は、インストーラのプロパティを含むファイルの名前です。
- UNIX オペレーティングシステムを使用している場合は、次のコマンドを実行します:
`/Install.bin -i silent -f <location>/installer.properties`。ここで、location は、インストーラのプロパティを含むファイルの場所です。例: `/data/username/installers/105/installer.properties`

サイレントインストーラがバックグラウンドで実行します。

サイレントインストールは、プロパティファイルが正しく設定されない場合、または、インストールディレクトリにアクセスできない場合に失敗します。インストールログファイルを確認し、エラーを修正します。それからサイレントインストールを再実行します。

注: インストール前でエラーが発生した場合、ログが `USER_HOME\DXLogs\B2B_DX_InstallLog.txt` パスに作成されます。エラーを修正し、サイレントモードインストールをトリガする必要があります。

第 5 章

インストール後の作業

この章では、以下の項目について説明します。

- [インストール後の作業の概要, 71 ページ](#)
- [PowerCenter の Data Integration Hub サーバープラグインの登録, 72 ページ](#)
- [Run Publication Subscription Web サービスの設定, 73 ページ](#)
- [Windows 認証の資格情報の設定, 74 ページ](#)
- [パブリケーションリポジトリへのデータベースパーティションのセットアップ, 74 ページ](#)
- [Hadoop パブリケーションリポジトリに対応するための環境の設定, 75 ページ](#)
- [操作コンソールへのログイン, 78 ページ](#)
- [Data Integration Hub リポジトリへの接続の設定, 78 ページ](#)
- [Microsoft Azure SQL データベースへの接続の設定, 80 ページ](#)
- [Data Integration Hub ユーザーの同期, 81 ページ](#)
- [「ダッシュボードとレポート」コンポーネントの有効化, 81 ページ](#)
- [Data Integration Hub ユーザーの同期, 83 ページ](#)

インストール後の作業の概要

Data Integration Hub をインストールした後、環境に関連する手順を実行します。

1. PowerCenter の Data Integration Hub サーバープラグインをインストールした場合は、そのプラグインを PowerCenter リポジトリに登録します。
2. Data Integration Hub にアクセスするように PowerCenter を設定します。
3. Run Publication Subscription Web サービス API を使用する場合は、Web サービスを設定します。
4. Data Integration Hub リポジトリを Microsoft SQL Server 上にインストールした場合、そして Windows 認証を使用することを選択した場合、Windows 認証用の資格情報を設定します。
5. 発行済みのデータセットを格納する Data Integration Hub パブリケーションリポジトリデータベース上にパーティションをセットアップします。パーティションのセットアップを強くお勧めします。
6. Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントをインストールした場合は、Hadoop ベースのパブリケーションリポジトリに対応するように環境を設定します。
7. Data Integration Hub を SUSE Linux オペレーティングシステムにインストールした場合は、環境変数 JRE_HOME を<DIH_HOME>/DataIntegrationHub/jdk1.8/jre に設定します。
8. Data Integration Hub サービスを起動します。詳細については、[第 7 章、「Data Integration Hub の起動と停止」 \(ページ 115\)](#)を参照して下さい。

注: Data Integration Hub をインストールしたマシンとは別のマシンに Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントをインストールした場合は、両方のマシンでサービスを起動します。詳細については、[「Linux での Data Integration Hub の起動と停止」 \(ページ 116\)](#)を参照して下さい。

9. Data Integration Hub 操作コンソールにログインします。
10. Data Integration Hub 操作コンソール内の Data Integration Hub リポジトリへの接続を設定します。
11. Data Integration Hub リポジトリを Microsoft Azure SQL データベースにインストールした場合は、Microsoft Azure SQL データベースへの接続を設定します。
12. Informatica ドメイン認証または Kerberos による Informatica ドメイン認証で Data Integration Hub をインストールした場合は、Data Integration Hub 操作コンソールにおいて Data Integration Hub ユーザーを同期します。
13. 「ダッシュボードとレポート」コンポーネントをインストールした場合は、そのコンポーネントを有効にします。
14. 配信オプション **「新しい行を追加して変更された行を更新」** を使用してサブスクリプションを設定する場合、およびカラムの値に NULL が含まれると予想される場合、PowerCenter 統合サービスのプロパティ **「比較演算子で NULL を以下のように処理」** を **「低」** に設定する必要があります。

関連項目：

- [「Data Integration Hub の起動と停止の概要」 \(ページ 115\)](#)

PowerCenter の Data Integration Hub サーバープラグインの登録

PowerCenter の Data Integration Hub サーバープラグインをインストールした場合は、Data Integration Hub ワークフローを作成する PowerCenter リポジトリにそのプラグインを登録します。このプラグインを登録しないと、PowerCenter Designer で Data Integration Hub トランスフォーメーションを作成できず、Data Integration Hub は PowerCenter ワークフローを実行できません。このような状況で Data Integration Hub が PowerCenter ワークフローの実行を試みて失敗すると、Data Integration Hub によって [REP_12400] リポジトリエラー（[REP_57140] オブジェクトが存在しません）というエラーが PowerCenter ワークフローセッションログに書き込まれます。

このプラグインを登録する場合は、PowerCenter リポジトリサービスが排他モードで実行中である必要があります。登録後、PowerCenter リポジトリサービスをノーマルモードで再起動します。

1. Administration ツールにログインします。
2. ナビゲータで、プラグインを登録するリポジトリサービスを選択します。
3. [Properties (プロパティ)] タブで、[General Properties (全般プロパティ)] セクションを編集して操作モードを [Exclusive (排他)] に設定します。
4. リポジトリサービスを再起動します。
5. リポジトリサービスが再起動した後、[Plug-ins (プラグイン)] タブをクリックします。
6. リンクをクリックして、Repository Service プラグインを登録します。
7. [Register Plug-in for <Repository Service> (<Repository Service>のプラグインの登録)] ページで、**「Browse (参照)」** ボタンをクリックし、プラグインファイルを見つけます。

PowerCenter の Data Integration Hub サーバープラグインをインストールしたディレクトリにある次のファイルを選択します。

```
<DIHInstallationDir>/powercenter/plugin/VERSION/dxplugin.xml
```

注: Data Integration Hub インストーラは、PowerCenter バージョンごとに個別のプラグインフォルダを作成します。必ず、使用している PowerCenter バージョンのプラグインフォルダを選択します。

8. リポジトリにログインするためのリポジトリサービス管理者ユーザー名とパスワードを入力します。
セキュリティグループフィールドが表示される場合は、リポジトリサービス管理者のセキュリティグループを選択します。
9. **[OK]** をクリックします。
リポジトリサービスによってプラグインが登録されます。リポジトリサービスの登録済みプラグインのリストに Data Integration Hub トランスフォーメーションが含まれることを確認します。
10. [Properties (プロパティ)] タブで、[General Properties (全般プロパティ)] セクションを編集して操作モードを [Normal (ノーマル)] に設定します。
11. PowerCenter 統合サービスを再起動します。

Run Publication Subscription Web サービスの設定

Run Publication Subscription Web サービス API を使用する場合は、Web サービスワークフローを PowerCenter にインポートします。

PowerCenter サービスと Data Integration Hub サーバーが別のマシンで実行される場合は、Data Integration Hub サーバーが正しく設定されていることを確認します。

Web サービスの PowerCenter へのインポート

Data Integration Hub のインストール時、Data Integration Hub Web サービスワークフローが <DIH_InstallationDir>\powercenter\webservices フォルダにインストールされます。Data Integration Hub Web サービスワークフローを PowerCenter にインポートすることが、Web サービスにアクセスするためには必須です。

Web サービスを使用するには、Informatica ドメインに次のサービスが含まれている必要があります。

- PowerCenter リポジトリサービス
- Web サービス Hub
- PowerCenter 統合サービス

1. PowerCenter Repository Manager を使用して、PowerCenter リポジトリにワークフローファイル wf_m_DIH_WS_StartPublicationSubscription.xml をインポートします。
2. Web Services Hub コンソールで、Data Integration Hub Web サービスが PowerCenter に正しくインポートされていることを確認します。インポート処理が成功した場合、Data Integration Hub Web サービスを含む有効なサービスがリストに表示されます。
3. Web Services Hub コンソール内の Try-It アプリケーションを使用して、Data Integration Hub Web サービスをテストすることができます。 **[XML Input (XML 入力)]** タブで SOAP メッセージにデータを入力し、**[Send (送信)]** をクリックします。認証エラーを回避するため、**[Form Input (フォーム入力)]** ページの使用によりこの Data Integration Hub Web サービスをテストすることはしません。

Web サービスが動作していることを確認したら、Web サービスにリクエストを送るためのクライアントアプリケーションを作成できます。

サーバー設定の確認

PowerCenter サービスと Data Integration Hub サーバーが別のマシンで実行される場合は、Data Integration Hub サーバーの設定が正しく設定されていることを確認します。

Informatica Administrator で、Data Integration Hub ワークフローが実行される PowerCenter 統合サービスを選択します。以下の環境変数設定を確認します。

環境変数	値
DX_SERVER_URL	Data Integration Hub サーバーの RMI URL。 以下に例を示します。 rmi://<DIHServerHostname>:<RMIPort>/TSSARuntime 注: <RMIPort>は、 <i>dx.rmi.port</i> パラメータ (dx-configuration.properties ファイル内) に一致している必要があります。デフォルトのポート番号は 18095 です。

Windows 認証の資格情報の設定

いずれかの Data Integration Hub リポジトリを Microsoft SQL Server にインストールして、Windows 認証を使用することを選択した場合、Data Integration Hub で Microsoft SQL Server instance インスタンスへのアクセスに使用する資格情報を設定します。

設定プロセスを開始する前に、すべての Data Integration Hub Windows サービスが停止され、Data Integration Hub 操作コンソールおよび Data Integration Hub サーバーが実行されていないことを確認します。

1. Windows の **【サービス】** ウィンドウにアクセスします。
2. サービス **【Informatica Data Integration Hub Server *version*】** をクリックします。
Data Integration Hub の **【サーバープロパティ】** ウィンドウが表示されます。
3. **【ログオン】** タブを選択します。
4. **【このアカウント】** を選択し、**【参照】** をクリックして、**【ユーザーの選択】** ダイアログボックスでユーザーアカウントを指定します。完了したら、**【OK】** をクリックします。
5. **【パスワード】** および **【パスワードの確認】** にユーザーアカウントのパスワードを入力し、**【OK】** をクリックします。
6. [2.5](#) サービス **【Informatica Data Integration Hub Console *version*】** で手順を繰り返します。

パブリケーションリポジトリへのデータベースパーティションのセットアップ

発行済みデータセットを格納するパブリケーションリポジトリデータベースにパーティションをセットアップすることを強くお勧めします。パーティションは、格納される発行済みデータセットを作成日によって分割し

たものです。各パーティションには、特定の日にすべてのアプリケーションが発行するデータセットが格納されます。デフォルトでは、パブリケーションリポジトリはパーティションを使用しません。

パーティション化を設定すると、Data Integration Hub では期限が切れたデータセットが削除されデータセットの作成時間やデータ消費が削減されるため、フラグメント化が低減されます。パーティションは、Oracle データベースと Microsoft SQL Server データベース上にセットアップできます。

パブリケーションリポジトリデータベースでのパーティションの作成と管理には、Data Integration Hub リポジトリユーティリティコマンド `enablePartitioning` を使用します。パーティションの状態は、`dih.staging.use.partitions.default` システムプロパティに示されます。Data Integration Hub リポジトリユーティリティの詳細については、『*Data Integration Hub 管理者ガイド*』を参照します。

データベースのパーティション化の有効/無効切り替えを行うと、その変更は切り替え後に作成するトピック、パブリケーション、およびサブスクリプションに影響を与えます。このため、パーティション状態は Data Integration Hub の使用を開始する前に選択することをお勧めします。既存のトピック、パブリケーション、またはサブスクリプションのパーティション状態を切り替える場合は、Informatica Global Customer Service まで連絡します。

Hadoop パブリケーションリポジトリに対応するための環境の設定

Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントをインストールした場合は、Hadoop パブリケーションリポジトリに対応するように環境を設定します。

タスクを完了するには、次のアクションを実行します。

1. `dx-configuration.properties` ファイルの設定を構成します。
2. `dih-hadoop-service.xml` ファイルに含まれる参照を確認します。
3. Cloudera Manager のオプションを有効にします。
1. Data Integration Hub Hadoop サービスのインストール先のマシンで、テキストエディタを使用して、次の場所にある `dx-configuration.properties` ファイルを開きます。
<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/shared/classes/
2. ファイルの次のセクションでプロパティを設定した後、ファイルを保存します。

HIVE の設定

プロパティ	説明
<code>dih.hadoop.hive.username</code>	Apache Hive サーバーに接続するためのユーザー名。
<code>dih.hadoop.hive.password</code>	Apache Hive サーバーに接続するユーザーのパスワード。

プロパティ	説明
dih.hadoop.hive.url	<p>Apache Hive サーバーの URL。形式は次のとおりです。</p> <pre>jdbc:hive2://<hostname>:<port>/<schema></pre> <p>場所:</p> <ul style="list-style-type: none"> - hostname は、サーバーのホスト名または IP 番号です。 - port は、サーバーのポート番号です。デフォルトは 10000 です。 - schema は、Hive ウェアハウスで使用されるスキーマです。デフォルトは default です。Hive ウェアハウスでデフォルト以外のスキーマを使用する場合は、プロパティ <code>dih.hadoop.service.warehouse.dir</code> を設定します。
dih.hadoop.service.warehouse.dir	<p>Hive ウェアハウスディレクトリのパス。Apache Hive サーバーがデフォルト以外のスキーマを使用している場合に必要です。Apache Hive サーバーがデフォルトスキーマを使用している場合は、このプロパティの値を入力しないでください。</p> <p>例:</p> <pre>dih.hadoop.hive.username=hive dih.hadoop.hive.password=password dih.hadoop.hive.url=jdbc:hive2://hive_host:10000/myschema dih.hadoop.service.warehouse.dir=/user/hive/ mydatawarehousedir</pre>

SPARK の設定

プロパティ	説明
dih.hadoop.service.spark.version	Apache Spark のバージョン。次の値を取ります。 <ul style="list-style-type: none">- 1.2。Apache Spark のバージョン 1.2。- 1.3。Apache Spark のバージョン 1.3 以降。 デフォルトは 1.3 です。
dih.hadoop.service.spark.url	Apache Spark の URL。 <ul style="list-style-type: none">- Apache Spark が YARN モードで動作している場合は、デフォルト値を使用します。 dih.hadoop.service.spark.url=yarn- Apache Spark がスタンドアロンモードで動作している場合は、次の形式の URL を入力します。 spark://master_host:<port_number> 場所:<ul style="list-style-type: none">- master_host は、実行プログラムを実行するワーカーの操作を調整するマスタデーモンです。- <port_number>は、マスタデーモンのポート番号です。デフォルトは 7077 です。 例: spark://Mymasterhost:7077 注: ここに入力する値は、Spark コンソールに表示されるものと同じでなければなりません。デフォルトでは、Spark コンソールは http://<host_name>:18080 にあります。
dih.hadoop.service.spark.additional.args	ジョブを実行する際の追加の引数。 例: --executor-memory 20G --total-executor-cores 100 引数の詳細については、Spark のドキュメントを参照してください。

KERBEROS の設定

Hadoop クラスタで Kerberos 認証を使用する場合は、次の設定を構成します。

プロパティ	説明
dih.hadoop.principal	次の形式の Kerberos プリンシパル名。 <principal>/<domain>@<realm>
dih.hadoop.keytab.path	キータブファイルの場所と名前。 例: dih.hadoop.principal=infra/admin@informatica.com dih.hadoop.keytab.path=/etc/security/keytabs/infra.keytab 注: ファイル名を infra.keytab にする必要はありません。

3. Data Integration Hub Hadoop サービスのインストール先のマシンで、テキストエディタを使用して、次の場所にある dii-hadoop-service.xml ファイルを開きます。

```
<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/conf/Catalina/localhost
```

4. このファイルに Hadoop クラスパス設定の正しい参照が含まれていることを確認します。デフォルトでは、このファイルは Cloudera VM - sample default configurations セクションの Cloudera VM 設定を参照しています。

このファイルには、Cloudera Manager と Hortonworks VM の参照も含まれていますが、これらの参照は、コメント化されたセクションである Cloudera CDH - sample cloudera manager configurations と Hortonworks VM - sample default configurations に含まれています。必要な場合は、Cloudera VM - sample default configurations セクションをコメント化し、ご自分の設定に適したセクションのコメントを外してください。
5. Cloudera Manager で、オプション[NameNode をワイルドカードアドレスにバインド]を有効にし、HDFS サービスを再起動します。

操作コンソールへのログイン

操作コンソールのログインには、インストール時に定義した管理者ユーザーアカウントを使用します。

Informatica プラットフォーム認証を使用する場合は、すべてのユーザーアカウントとユーザーパスワードが認証サーバー上に存在することを確認します。

1. 操作コンソールサービスが実行されていることを確認します。
2. 操作コンソールのログインページにアクセスします。
 - Microsoft Windows または UNIX オペレーティングシステムで、ブラウザウィンドウを開き、次の形式のいずれかで操作コンソールの URL を入力します。
HTTP: `http://<HostName>:<HTTPPortNumber>/`
HTTPS: `https://<HostName>:<HTTPSPortNumber>/`
 - Microsoft Windows オペレーティングシステムでは、デスクトップショートカットをクリックして新しいブラウザウィンドウを開き、操作コンソール URL に移動します。
3. ユーザー名とパスワードを入力し、[Log In (ログイン)] をクリックします。

Data Integration Hub リポジトリへの接続の設定

Data Integration Hub リポジトリへの接続を設定します。接続を設定すると、Data Integration Hub によって PowerCenter リポジトリ内に接続が作成されます。Data Integration Hub は、接続詳細を使用してパブリケーションのワークフローとサブスクリプションのワークフローを作成するとともに、PowerCenter 内にデータソースとデータターゲットを作成します。

接続を設定するには、管理者ユーザーアカウントを使用して Data Integration Hub 操作コンソールにログインしている必要があります。

1. ナビゲータで、[ハブの管理] > [接続] をクリックします。
[接続] ページが表示され、DIH__REPO 接続と DIH__STAGING 接続が表示されます。
2. DIH__REPO 接続の横にある [編集] アイコンをクリックします。
[接続の編集] ページが表示され、DIH__REPO 接続の詳細が表示されます。DIH__REPO は、インストール時に定義した Data Integration Hub メタデータリポジトリへの接続です。
3. 接続の [データベース名] プロパティ (必要な場合) と [データアクセス] プロパティを設定します。詳細については、『Data Integration Hub 管理者ガイド』を参照してください。

4. **【接続の編集】** ページで **【保存】** をクリックします。
【接続の編集】 ページが閉じます。
5. DIH__REPO 接続の横にある **【テスト接続】** アイコンをクリックします。
Data Integration Hub は接続をテストします。この処理は少し時間がかかる可能性があります。
6. メッセージ「接続に成功しました」が表示されたら、**【テスト接続】** ダイアログボックスで **【OK】** をクリックします。
注: Data Integration Hub で接続を初めてテストした場合、テストに失敗し、エラーが表示されることがあります。1 分間待機してから、接続をテストします。
数秒間待機した後にテストに失敗した場合は、PowerCenter の DIH__SYSTEM_WORKFLOWS フォルダを削除してから、接続をテストします。
7. ナビゲータで、**【接続】** をクリックします。
【接続】 ページが表示されます。
8. DIH__STAGING 接続の横にある **【編集】** アイコンをクリックします。
【接続の編集】 ページが表示され、DIH__STAGING 接続の詳細が表示されます。DIH__STAGING は、インストール時に定義した Data Integration Hub パブリケーションリポジトリへの接続です。
9. 3 から 6 の手順を繰り返し、DIH__STAGING 接続を設定してテストします。
10. Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントをインストールした場合は、DIH__STAGING__HADOOP 接続の横にある **【編集】** アイコンをクリックします。
【接続の編集】 ページが表示され、DIH__STAGING__HADOOP 接続の詳細が表示されます。
DIH__STAGING__HADOOP は、Data Integration Hub Hadoop ベースのパブリケーションリポジトリへの接続できます。
11. 次に示す Hadoop 設定の接続プロパティを構成します。

Hadoop クラスタユーザー

Hadoop クラスタユーザーアカウントの名前。

NameNode の URI

次の接続 URI を使用します。

hdfs://<namenode>:<port>/<path>

ここで、

- <namenode>は、NameNode のホスト名または IP アドレスです。
- <port>は、NameNode がリモートプロシージャコール (RPC) をリスンするポートです。
- <path>は HDFS 内の作業ディレクトリです。Hadoop クラスタユーザーアカウントは、作業ディレクトリに対するすべての権限を持っている必要があります。

例：

hdfs://mycluster:8020/user/claudera

注: hdfs://<namenode>:<port>は、core-site.xml ファイルに定義されているプロパティ fs.defaultFS と同一である必要があります。

Hadoop ディストリビューション

Hadoop クラスタが使用する Hadoop ディストリビューションのタイプ。

12. **【接続の編集】** ページで **【保存】** をクリックします。
【接続の編集】 ページが閉じます。
13. DIH__STAGING__HADOOP 接続の横にある **【テスト接続】** アイコンをクリックします。
Data Integration Hub は接続をテストします。この処理は少し時間がかかる可能性があります。

14. メッセージ「接続に成功しました」が表示されたら、**【テスト接続】** ダイアログボックスで **【OK】** をクリックします。

Microsoft Azure SQL データベースへの接続の設定

Data Integration Hub リポジトリを Microsoft Azure SQL データベースにインストールする場合は、そのデータベースへの接続を Data Integration Hub と PowerCenter の各アプリケーションに設定します。接続を設定すると、Data Integration Hub によって PowerCenter リポジトリ内に対応する接続が作成されます。Data Integration Hub は、接続詳細を使用してパブリケーションのワークフローとサブスクリプションのワークフローを作成するとともに、PowerCenter 内にデータソースとデータターゲットを作成します。

接続を設定するには、次のアプリケーションにログインする必要があります。

- Data Integration Hub 操作コンソール（管理者ユーザーアカウントを使用）。
- PowerCenter クライアント操作コンソール（管理者ユーザーアカウントを使用）。

Microsoft Azure SQL データベースへの接続を設定するためには、Data Integration Hub コンソールで DIH_REPO 接続を編集し、PowerCenter で DIH_REPO 接続の DSN を有効化してから、Data Integration Hub で接続をテストします。同じ手順を DIH_STAGING 接続で実行します。

1. Data Integration Hub 操作コンソールで次の手順を実行して DIH___REPO 接続を編集します。
 - a. ナビゲータで、**【ハブの管理】** > **【接続】** をクリックします。
 - b. DIH___REPO 接続の横にある **【編集】** アイコンをクリックします。
【接続の編集】 ページが表示され、DIH___REPO 接続の詳細が表示されます。DIH___REPO は、インストール時に定義した Data Integration Hub メタデータリポジトリへの接続です。
 - c. **データアクセスプロパティ** を次のように設定します。
 - **データベース名**（dbname の形式で入力）
 - **サーバー名**（hostname の形式で入力）詳細については、『*Data Integration Hub 管理者ガイド*』を参照してください。
 - d. **【接続の編集】** ページで **【保存】** をクリックします。
【接続の編集】 ページが閉じます。
2. PowerCenter で次の手順を実行して、DIH___REPO 接続の DSN 名を作成します。
 - a. **【PwC Workflow Manager】** > **【接続】** > **【リレーショナル】** を選択します。
 - b. **【Microsoft SQL Server 接続】** を選択して **【編集】** をクリックします。
 - c. DSN を有効化して、環境設定時に作成した DIH_Repo 接続のデータソースの名前を入力します。データソース名の詳細については、[「Microsoft Azure SQL データベースのデータソース名の作成」](#)（ページ 20）を参照してください。
 - d. **【保存】** をクリックします。
3. 次の手順を実行して、DIH_REPO 接続をテストします。
 - a. Data Integration Hub コンソールで DIH___REPO 接続の横にある **【テスト接続】** アイコンをクリックします。

Data Integration Hub は接続をテストします。この処理は少し時間がかかる可能性があります。

- b. メッセージ「接続に成功しました」が表示されたら、**【テスト接続】** ダイアログボックスで **【OK】** をクリックします。

注: Data Integration Hub で接続を初めてテストした場合、テストに失敗し、エラーが表示されることがあります。1 分間待機してから、接続をテストします。

数秒間待機した後にテストに失敗した場合は、PowerCenter の DIH__SYSTEM_WORKFLOWS フォルダを削除してから、接続をテストします。

4. 前述の手順を DIH_STAGING 接続で繰り返し、DIH_STAGING リポジトリへの接続を設定します。

Data Integration Hub ユーザーの同期

Data Integration Hub を Informatica ドメイン認証または Informatica ドメインに設定した Kerberos 認証でインストールした場合、Data Integration Hub 操作コンソール内の Data Integration Hub ユーザーを同期します。

Informatica セキュリティドメインと Data Integration Hub 間でユーザーを同期するには、次の条件が true でなければなりません。

- Informatica セキュリティドメインは、Informatica Administrator の **【セキュリティ】** ページで設定されています。
- Informatica セキュリティドメイン内の 1 つ以上のセキュリティグループに同期する Data Integration Hub ユーザーが含まれます。
- Data Integration Hub のシステムプロパティ `dx.authentication.groups` には、同期する Informatica セキュリティドメインのグループのリストが含まれます。
`<group name>@<security domain> [<groupname>@<security domain>]`
- `dx.authentication.groups` で定義されているグループの 1 つに同期を実行するユーザーが含まれています。
- Data Integration Hub のシステムプロパティ `pwc.repository.user.name` で定義されているユーザーには、ユーザー、グループおよびロールを管理する権限があります。
- Data Integration Hub ユーザーには、ユーザーを同期する権限があります。

1. ナビゲータで、**【管理】** > **【ユーザー】** をクリックします。
【ユーザー】 ページが表示されます。
2. **【ユーザーの同期】** をクリックし、画面の指示に従います。
3. **【ユーザー】** ページに追加されている各ユーザーに、必要な権限を割り当てます。詳細については、『*Data Integration Hub 管理者ガイド*』を参照してください。

「ダッシュボードとレポート」コンポーネントの有効化

レポートをオペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードに表示するには、「ダッシュボードとレポート」コンポーネントをインストールし、以下のタスクを実行してコンポーネントを有効化する必要があります。

- 「ダッシュボードとレポート」コンポーネントのライセンスを登録します。

- PowerCenter にオペレーショナルデータストアイベントローダーをインポートします。

「ダッシュボードとレポート」ライセンスの登録

このセクションは、オペレーショナルデータストアを使用したダッシュボードを使用する場合にのみ適用されます。Data Integration Hub のダッシュボードとレポートコンポーネントのライセンスを登録します。

1. Informatica グローバルカスタマサポートから Logi Info ダッシュボードライセンスファイル入手します。
2. Data Integration Hub サービスを起動します。
3. 次の場所にある _Settings.lgx ファイルを移動します。
`<DIHInstallationDir>\DataIntegrationHub\tomcat\webapps\dih-dashboard_Definitions`
 次の場所に移動します。
`<DIHInstallationDir>\DataIntegrationHub\tomcat\shared\classes`
 ファイル名を次の名前に変更します。
`dx_dashboard_configuration.xml`
4. Logi Info ダッシュボードライセンスファイル _Settings_encrypted.lgx を次の場所にコピーします。
`<DIHInstallationDir>\DataIntegrationHub\tomcat\webapps\dih-dashboard_Definitions`
5. ファイル _Settings_encrypted.lgx の名前を _Settings.lgx に変更します。
6. Data Integration Hub サービスを再起動します。

インストール後に、Data Integration Hub をホストするマシンの IP アドレスが変更された場合には、Logi Info ダッシュボードライセンスファイル内の IP アドレスを更新する必要があります。詳細については、[「ダッシュボードの設定ファイルの更新」](#) (ページ 125) を参照してください。

PowerCenter へのオペレーショナルデータストアイベントローダーワークフローのインポート

このセクションは、オペレーショナルデータストアを使用したダッシュボードを使用する場合にのみ適用されます。イベント情報をロードするオペレーショナルデータストア (ODS) イベントローダーワークフローを、Data Integration Hub リポジトリから Data Integration Hub ODS にインポートします。

DX_ETL という名前の既存のワークフローを使用する場合は、ODS イベントローダーワークフローをインポートする前に PowerCenter Repository Manager でこの既存ワークフローの名前を変更するか、またはワークフローを別のフォルダにインポートしてください。

注: ODS イベントローダーワークフローをインポートした後、そのワークフローを手動で実行しないでください。ワークフローはスケジュール設定された時刻に開始される必要があります。ワークフローを手動で開始すると、集計されたイベントが Data Integration Hub ODS に格納されないことがあります。

1. PowerCenter Workflow Manager で、**[Connections (接続)]** > **[Relational (リレーショナル)]** を選択します。
2. Data Integration Hub リポジトリの **DX_REPO** 接続を追加します。
3. Data Integration Hub ODS の **DX_ODS** 接続を追加します。

- PowerCenter Repository Manager で、Data Integration Hub ODS ワークフローファイルをインポートします。ワークフローファイルの名前は、ODS がインストールされているデータベースのタイプによって異なります。

データベースタイプ	ワークフローの場所と名前
Oracle	<DIHInstallationDir>\powercenter\ETL\DX_ETL.xml
Microsoft SQL Server	<DIHInstallationDir>\powercenter\ETL\DX_ETL_SQLSERVER.xml

- PowerCenter Workflow Manager で、PowerCenter リポジトリに接続します。
- サイトで以前に Data Integration Hub がインストールされており、ダッシュボードレポートから古いイベントを除外する場合は、特定の日時より後に処理を完了したイベントだけをロードするようにワークフローを指定してください。**[Workflow (ワークフロー)]** > **[Edit (編集)]** > **[Variables (変数)]** をクリックし、**\$\$WF_Last_Load_End_Time** 変数の値を変更します。
注: ワークフローの最初の実行後はこの変数を変更しないでください。
- デフォルトでは、ワークフローは 15 分ごとに実行されます。ワークフローの開始時刻はスケジュールできます。
- ODS イベントローダーワークフローに割り当てる PowerCenter 統合サービスを右クリックし、**[Assign to Workflows (ワークフローへの割り当て)]** を選択します。
[Assign Integration Service (統合サービスの割り当て)] ダイアログボックスが表示されます。
- [DX_ETL (DX_ETL)]** チェックボックスを選択し、**[Assign (割り当て)]** をクリックします。
PowerCenter でデータ統合サービスを ODS イベントローダーワークフローに割り当てます。

Data Integration Hub ユーザーの同期

Data Integration Hub を Informatica ドメイン認証または Informatica ドメインに設定した Kerberos 認証でインストールした場合、Data Integration Hub 操作コンソール内の Data Integration Hub ユーザーを同期します。

- ナビゲータで、**[管理]** > **[ユーザー]** をクリックします。
[ユーザー] ページが表示されます。
- [ユーザーの同期]** をクリックし、画面の指示に従います。
- [ユーザー]** ページに追加されている各ユーザーに、必要な権限を割り当てます。詳細については、『*Data Integration Hub 管理者ガイド*』を参照してください。

第 6 章

Data Integration Hub のアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [Data Integration Hub のアップグレード概要, 84 ページ](#)
- [アップグレードする前に, 85 ページ](#)
- [Data Integration Hub のアップグレード \(Windows\) , 86 ページ](#)
- [Data Integration Hub のアップグレード \(UNIX\) , 102 ページ](#)
- [アップグレードした後に, 110 ページ](#)

Data Integration Hub のアップグレード概要

次のバージョンのは、最新バージョンに直接アップグレードできます。

- 10.4.1
- 10.4.0

Data Integration Hub のアップグレード時には、以前のバージョンの Data Integration Hub のファイルのバックアップがインストーラにより作成された後に、新しいバージョンがインストールされます。Data Integration Hub のインストールフォルダ下にドキュメントストアが検出された場合は、アップグレード処理が完了した後と DIH サービスを開始する前に、ドキュメントストアを元の場所に移動する必要があります。新しいバージョン用に新規リポジトリを作成するか、または既存のリポジトリを使用することができます。以前のバージョンからのリポジトリを使用する場合、リポジトリはインストーラにより最新バージョンにアップグレードされます。Data Integration Hub のリポジトリをアップグレードする場合、データベースサーバーのタイプおよびサーバーの場所は変更できません。

アップグレードプロセスを開始する前に、「[アップグレードする前に](#)」 ([ページ 85](#))で説明されている手順を実行します。その後、Data Integration Hub インストーラを実行します。アップグレードが完了したら、「[アップグレードした後に](#)」 ([ページ 110](#))で説明されている手順を実行します。

注: アップグレード中、Data Integration Hub で使用されるユーザー認証方法を変更することはできません。ユーザー認証方法を変更するには、まずシステムをアップグレードし、その後必要な認証方法に切り替えます。認証方法の切り替えについては、『*Data Integration Hub 管理者ガイド*』を参照します。

アップグレードする前に

アップグレードの準備をするには、以下のタスクを実行します。

1. 必要なデータベースアカウントのユーザー名とパスワードがあることを確認します。
2. 実行中のパブリケーションまたはサブスクリプションがないこと、およびすべてのイベントが最終状態にあることを確認します。
ヒント: すべてのイベントの状態は、Data Integration Hub 操作コンソールの **【イベントリスト】** ページで確認できます。
3. すべてのトピックが有効なステータスになっていることを確認します。
ヒント: すべてのトピックのステータスは、Data Integration Hub 操作コンソールの **【トピック】** ページで確認できます。
4. 保持管理ジョブが実行されていないことを確認します。保持管理ジョブが実行されている場合、保持管理ジョブに対して未完了のシステムイベントが表示されます。
注: Data Integration Hub 以外のアプリケーションがパブリケーションリポジトリを使用している場合、アップグレードの完了時に、Data Integration Hub によって管理されていないテーブルのデータが消失することがあります。
5. `dx.endpoint.file.prefix` プロパティが空になっていることを確認します。
注: このプロパティはランディングゾーンのパスです。Data Integration Hub の以前のリリースは、このプロパティをサポートしていません。このプロパティ値が空ではない場合は空の値に設定してください。
6. すべての Data Integration Hub サービスを停止します。Data Integration Hub をアップグレードすると、Data Integration Hub のファイルは変更されます。使用中のファイルがある場合は、インストールを続行できません。
注: Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントのインストール先のマシンと Data Integration Hub のインストール先のマシンが異なる場合は、両方のマシンでサービスを停止します。詳細については、[「Linux での Data Integration Hub の起動と停止」 \(ページ 116\)](#)を参照してください。
7. PowerCenter のすべてのカスタムワークフローのスケジュールを解除します。PowerCenter で、すべてのカスタムワークフローのスケジュールを解除し、アップグレードが完了するまでワークフローが実行されないことを確認します。
8. アップグレードする Data Integration Hub のリポジトリをバックアップします。リポジトリをバックアップするには、データベースサーバーのバックアップユーティリティを使用します。これにより、アップグレード中に発生したあらゆるエラーからリカバリできます。
9. アップグレードする Data Integration Hub のパブリケーションリポジトリをバックアップします。リポジトリをバックアップするには、データベースサーバーのバックアップユーティリティを使用します。これにより、アップグレード中に発生したあらゆるエラーからリカバリできます。
10. 既存の Data Integration Hub インストールフォルダをバックアップします。これを行うことで、アップグレード中に発生するエラーから回復する場合や、以前のバージョンで設定に加えた修正をアップグレード後に再適用する場合に役立てることができます。
11. PowerCenter サービスが Data Integration Hub がインストールされているマシンと同じマシンにインストールされておらず、以前のバージョンの Data Integration Hub のインストール後に `pmrep` コマンドラインユーティリティをアップグレードしていた場合は、ルートディレクトリ上の `Tmp` フォルダからすべての CNX ファイルをクリーンアップします。

Data Integration Hub のアップグレード (Windows)

Windows オペレーティングシステムでは、グラフィカルモードで Data Integration Hub をアップグレードします。UNIX オペレーティングシステムの場合は、コンソールモードで Data Integration Hub をアップグレードします。

インストールする前に、使用している環境が最小システム要件を満たしていることを確認し、インストール前の手順を実行し、さらに PowerCenter サービスが実行中であることを確認します。

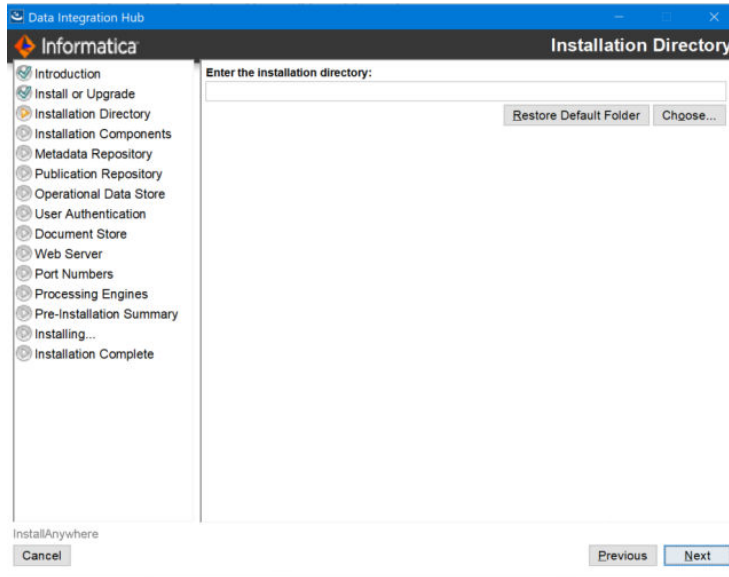
注: アップグレード時、Data Integration Hub により、ユーザーのホームディレクトリの DXLogs サブディレクトリにログファイルが保存されます。アップグレードが正常に終了しなかった場合は、この場所でログファイルを確認できます。

手順 1. インストーラの実行

1. Data Integration Hub のインストールに使用するユーザーアカウントでマシンにログインします。
権限エラーを回避するため、Data Integration Hub と PowerCenter のインストールには同じアカウントを使用します。
2. 他のすべてのアプリケーションを終了します。
3. インストーラをダウンロードしたディレクトリから Install.exe を実行します。
【概要】 ページが表示されます。
4. 説明を読み、【次へ】をクリックします。
【インストールまたはアップグレード】 ページが表示されます。
5. Data Integration Hub をアップグレードするオプションを選択し、【次へ】をクリックします。
【インストールディレクトリ】 ページが表示されます。

手順 2. インストール設定の定義

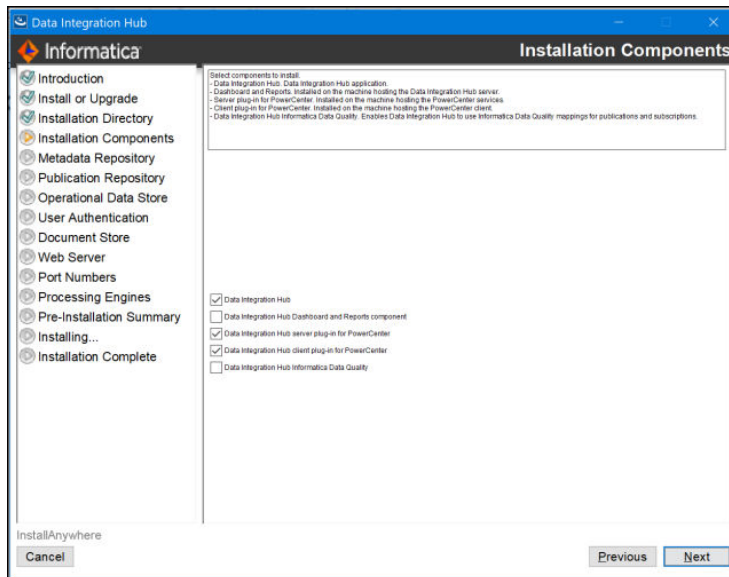
1. [インストールディレクトリ] ページで、インストールディレクトリへの絶対パスを入力するか、またはデフォルトのディレクトリを受け入れます。



注: 以前のバージョンの Data Integration Hub と同じインストールディレクトリを選択する必要があります。

2. [次へ] をクリックします。

[インストールコンポーネント] ページが表示されます。



3. インストールするコンポーネントを選択します。

Data Integration Hub

Data Integration Hub のコアアプリケーションをインストールします。
デフォルトで選択されています。

Data Integration Hub **ダッシュボードとレポート**

Data Integration Hub のダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールします。このコンポーネントは、オペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードにレポートを表示する場合に選択します。ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールするには、Data Integration Hub をインストールする必要があります。

デフォルトでは選択されていません。

注:

- メタデータディレクトリを使用するダッシュボードはデフォルトでインストールされています。このコンポーネントは、オペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードにレポートを表示する場合に選択します。インストール後、オペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードにレポートを表示するには、`dx.dashboard.ods.page.show` システムプロパティを `true` に設定する必要があります。詳細については、『*Data Integration Hub 管理者ガイド*』と『*Data Integration Hub オペレータガイド*』を参照してください。
- ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールする場合は、Data Integration Hub をインストールした後に、オペレーショナルデータストアイベントローダーをインポートする必要があります。
- ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールするときに、Data Integration Hub およびオペレーショナルデータストアリポジトリが Microsoft SQL Server にインストールされており、PowerCenter バージョン 10 を使用している場合は、PowerCenter Workflow Manager でリポジトリ接続を設定する必要があります。詳細については、[「PowerCenter バージョン 10 でのリポジトリ接続の設定」 \(ページ 127\)](#)を参照してください。

Data Integration Hub PowerCenter **サーバープラグイン**

PowerCenter サービス用 Data Integration Hub プラグインをインストールします。インストール後、プラグインを PowerCenter リポジトリに登録します。
デフォルトで選択されています。

Data Integration Hub PowerCenter client **プラグイン**

PowerCenter Client 用 Data Integration Hub プラグインをインストールします。このコンポーネントは、PowerCenter Client を実行するすべてのマシンにインストールします。
デフォルトで選択されています。

Data Integration Hub Informatica Data Quality

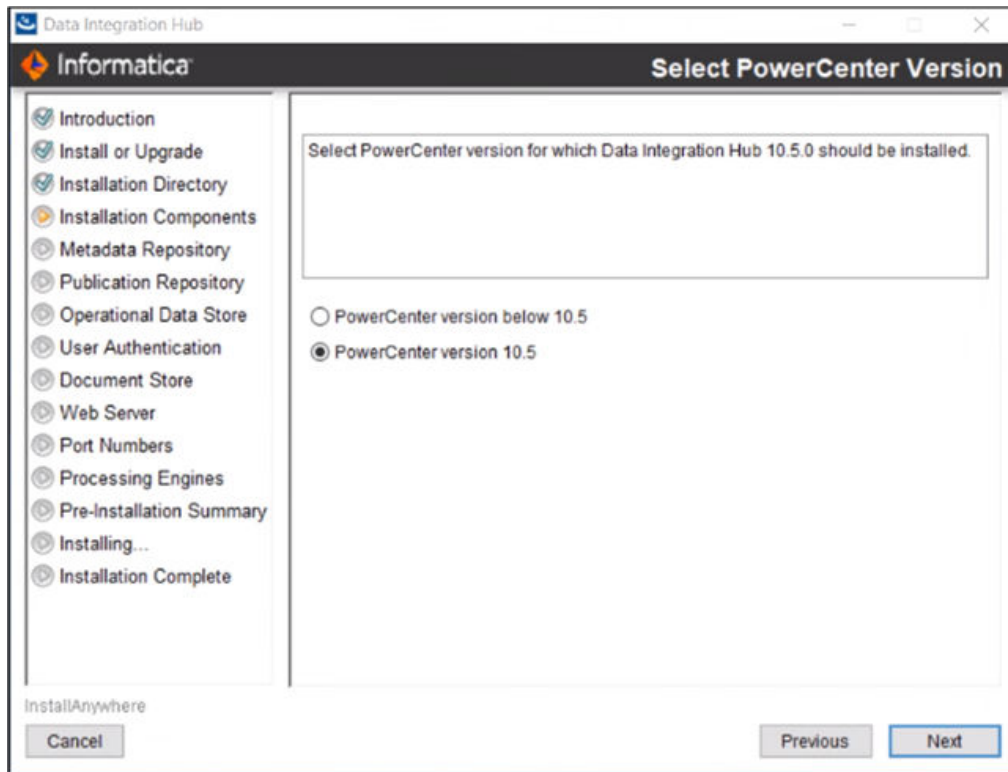
カスタムパブリケーションおよびカスタムサブスクリプションを行うために、Data Integration Hub で Data Quality マッピングを使用できるようにします。

このコンポーネントは、Data Integration Hub で、Data Quality マッピングを使用するカスタムパブリケーションおよびカスタムサブスクリプションを作成する場合に選択します。

デフォルトでは選択されていません。

4. **【次へ】** をクリックします。

[PowerCenter のバージョンの選択] ページが表示されます。



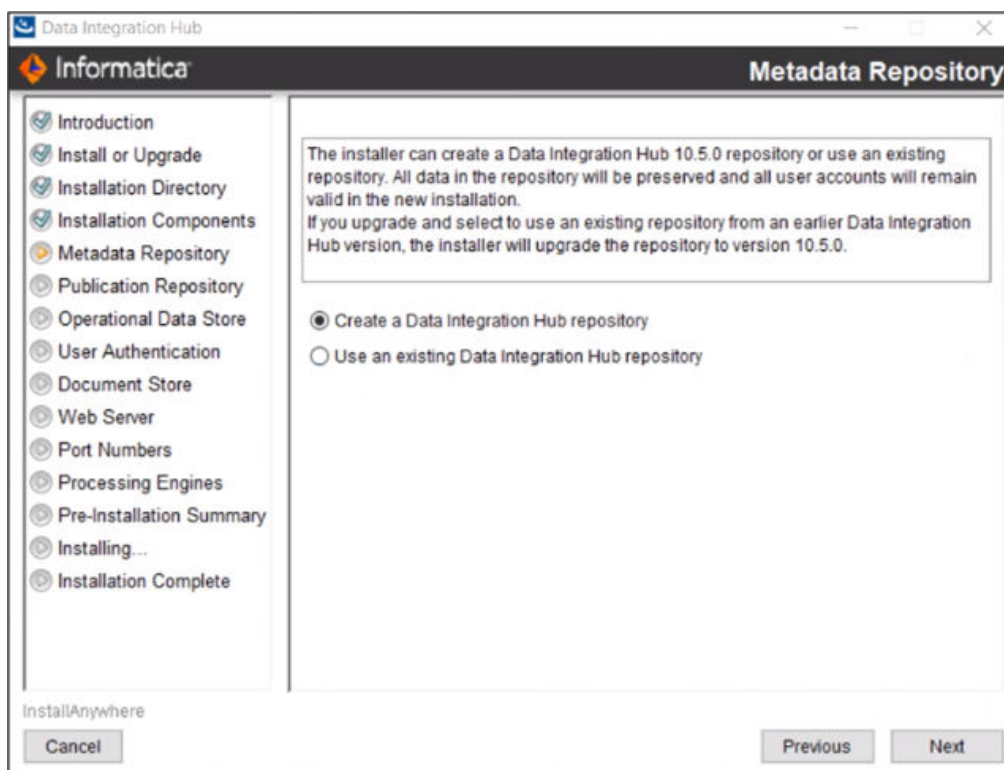
5. Data Integration Hub をインストールする PowerCenter のバージョンを選択し、[次へ] をクリックします。

[メタデータリポジトリ] ページが表示されます。

手順 3.Data Integration Hub リポジトリの設定

1. [メタデータリポジトリ] ページで、次のオプションのうち 1 つを選択します。
 - [Data Integration Hub リポジトリを作成する]。リポジトリをデータベース内に作成します。

- **[既存の Data Integration Hub リポジトリを使用する]**。既存の Data Integration Hub リポジトリ内のテーブルおよびデータを使用し、リポジトリを更新します。



2. **[次へ]** をクリックします。

[メタデータリポジトリ接続] ページが表示されます。

3. 次のフィールドに値を入力します。

データベースタイプ

Data Integration Hub メタデータリポジトリに使用するデータベースのタイプ。以下のいずれかのオプションを選択することができます。

- Oracle
- Microsoft SQL Server

データベース URL

データベースの場所。

このオプションを選択する場合、次のフィールドに値を入力します。

- **[データベースホスト名]**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
- **[データベースポート]**。データベースのポート番号。Oracle のデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server または Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポート番号は 1433 です。
- **[データベース SID]**。データベースが Oracle の場合のデータベースのシステム識別子。完全修飾された ServiceName または完全修飾された SID を入力します。
注: このフィールドには ServiceName を入力することをお勧めします。
- **[Microsoft SQL Server データベース]** または **[Microsoft Azure SQL データベース]**。データベース名。

カスタム接続文字列

データベースへの接続文字列。

このオプションを選択する場合、次のいずれかのフィールドに値を入力します。

- **[JDBC 文字列]**。メタデータリポジトリに対する JDBC 接続文字列。
- **[ODBC 文字列]**。メタデータリポジトリに対する ODBC 接続文字列。PowerCenter Client プラグインをインストールする場合に使用できます。インストーラで ODBC 文字列の有効性を検証することはできません。

注: Microsoft SQL Server データベースの名前付きインスタンスを使用する場合、**[データベース URL]** オプションを使用してデータベースインスタンスに接続できません。**[カスタム接続文字列]** オプションを使用します。

例：

```
jdbc:informatica:sqlserver://MYSQLSERVERCOMPUTERHOSTNAME  
\MYDBINSTANCENAME;DatabaseName=MYDATABASENAME;
```

Windows 認証の使用

Microsoft Windows 認証メカニズムでユーザー名を認証するように Data Integration Hub に指示します。Microsoft SQL Server データベースを選択する場合に使用できます。

データベースユーザー名

Windows 認証を使用しないデータベースのデータベースユーザーアカウントの名前。

データベースユーザのパスワード

Windows 認証を使用しないデータベースのデータベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

4. **[次へ]** をクリックします。

[パブリケーションリポジトリ接続] ページが表示されます。

Enter the publication repository connection details. The publication repository stores published data that subscribing applications can consume.
Note: When using Microsoft SQL Server named instances, you must define a custom connection string.

Database type: **SQLServer**

☒ Database URL

Database host name:

Database port number:

Database name:

☐ Custom connection string

JDBC string:

☐ Use Windows Authentication

Database username:

Database user password:

Cancel Previous Next

5. 次のフィールドに値を入力します。

データベースタイプ

パブリケーションリポジトリに使用するデータベースのタイプ。データベースタイプは Data Integration Hub メタデータリポジトリデータベースタイプと一致する必要があり、読み取り専用モードで表示されます。

データベース URL

データベースの場所。

このオプションを選択する場合、次のフィールドに値を入力します。

- **[データベースホスト名]**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
- **[データベースポート]**。データベースのポート番号。Oracle のデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server または Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポートは 1433 です。
- **[データベース SID]**。データベースが Oracle の場合のデータベースのシステム識別子。完全修飾された ServiceName または完全修飾された SID を入力します。

注: このフィールドには ServiceName を入力することをお勧めします。

- **[Microsoft SQL Server データベース]** または **[Microsoft Azure SQL データベース]**。データベースインスタンスの名前。

カスタム接続文字列

データベースへの JDBC 接続文字列。

注: Microsoft SQL Server データベースの名前付きインスタンスを使用する場合、**[データベース URL]** オプションを使用してデータベースインスタンスに接続できません。**[カスタム接続文字列]** オプションを使用します。

Windows 認証の使用

Microsoft Windows 認証メカニズムでユーザー名を認証するように Data Integration Hub に指示します。Microsoft SQL Server データベースを選択する場合に使用できます。

データベースユーザー名

Windows 認証を使用しないデータベースのデータベースユーザーアカウントの名前。

データベースユーザのパスワード

Windows 認証を使用しないデータベースのデータベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

6. **[次へ]** をクリックします。

[Data Integration Hub ダッシュボードとレポートコンポーネント] を選択した場合は、**[オペレーショナルデータストア]** ページが表示されます。ダッシュボードとレポートコンポーネントを選択していない場合は、[「手順 5. Web サーバーの設定」 \(ページ 96\)](#)に進みます。

手順 4. オペレーショナルデータストアのセットアップ

1. これは、レガシーダッシュボードを使用する場合にのみ適用されます。**[オペレーショナルデータストア]** ページで、次のオプションのいずれかを選択します。
 - **[オペレーショナルデータストアリポジトリを作成する]**。データベース内にオペレーショナルデータストアリポジトリを作成します。
 - **[既存のオペレーショナルデータストアリポジトリを使用する]**。既存のオペレーショナルデータストアリポジトリ内のテーブルおよびデータを使用します。
2. **[次へ]** をクリックします。

[オペレーショナルデータストアのデータベース接続] ページが表示されます。

3. 次のフィールドに値を入力します。

データベース URL

データベースの場所。このオプションを選択する場合、次のフィールドに値を入力します。

- **[データベースホスト名]**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
- **[データベースポート番号]** データベースのポート番号。Oracle データベースのデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server または Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポート番号は 1433 です。

- **[データベース SID]**。Oracle をデータベースとして選択した場合のデータベースのシステム識別子。完全修飾された ServiceName または完全修飾された SID を入力します。

注: このフィールドには ServiceName を入力することをお勧めします。

- **[Microsoft SQL Server データベース]** または **[Microsoft Azure SQL データベース]**。データベース名。

カスタム接続文字列

データベースへの接続文字列。このオプションを選択する場合、次のいずれかのフィールドに値を入力します。

- **[JDBC 文字列]**。オペレーショナルデータストアに対する JDBC 接続文字列。
- **[ODBC 文字列]**。オペレーショナルデータストアに対する ODBC 接続文字列。PowerCenter Client プラグインをインストールする場合に使用できます。インストーラで ODBC 文字列の有効性を検証することはできません。

注: Microsoft SQL Server データベースの名前付きインスタンスを使用する場合、**[データベース URL]** オプションを使用してデータベースインスタンスに接続できません。**[カスタム接続文字列]** オプションを使用します。

例:

```
jdbc:informatica:sqlserver://MYSQLSERVERCOMPUTERHOSTNAME  
\MYDBINSTANCENAME;DatabaseName=MYDATABASENAME;
```

Windows 認証の使用

Microsoft Windows 認証メカニズムでユーザー名を認証するように Data Integration Hub に指示します。Microsoft SQL Server データベースを選択する場合に使用できます。

データベースユーザー名

Windows 認証を使用しないデータベースのオペレーショナルデータストアユーザーアカウントの名前。

データベースユーザのパスワード

Windows 認証を使用しないデータベースのオペレーショナルデータストアアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

4. **[次へ]** をクリックします。
[Web サーバー] ページが表示されます。

手順 5. Web サーバーの設定

1. **[Web サーバー]** ページで、次のフィールドに値を入力します。

有効 HTTPS

Data Integration Hub に、ブラウザで操作コンソールを開く場合は、セキュリティで保護されたネットワーク通信を使用するよう指示します。HTTPS および HTTP を選択すると、操作コンソールにより既存の HTTP 接続は HTTPS 接続に切り替わります。

コネクタポート番号

HTTPS で操作コンソールを開く場合に使用する Tomcat コネクタのポート番号です。
デフォルト値は 18443 です。

インストーラによって生成されたキーストアを使用

未登録の証明書によりキーストアファイルを生成するようインストーラに指示します。このオプションを選択した場合、操作コンソールを初めて開いた際にブラウザから受け取るセキュリティ警告は無視します。

既存のキーストアファイルの使用

インストーラに既存のキーストアファイルをロードするよう指示します。次のフィールドに値を入力します。

- キーストアのパスワードキーストアファイルのパスワード
- キーストアファイル。キーストアファイルのパス。

キーストアファイルは、PKCS (Public Key Cryptography Standard: 公開鍵暗号標準) #12 方式である必要があります。

2. **【次へ】** をクリックします。

PowerCenter の Data Integration Hub サーバープラグインか、または PowerCenter コンポーネントの Data Integration Hub クライアントプラグインのインストールを選択している場合、**【PowerCenter の場所】** ページが表示されます。PowerCenter サーバーまたはクライアントコンポーネントを選択しなかった場合は、**【PowerCenter Web サービス Hub】** ページが表示されます。

手順 6.PowerCenter 設定の構成

1. **【PowerCenter Web サービス Hub】** ページで、PowerCenter Web サービスの詳細を入力します。

Web サービス Hub の URL

以下の場合に PowerCenter Web サービス Hub が使用する URL: パブリケーションおよびサブスクリプションのワークフローを処理する場合。

サービス名

PowerCenter リポジトリサービスの名前。

ノードのホスト名

PowerCenter リポジトリサービスを実行するノードのホスト名。

ノードのポート番号

PowerCenter リポジトリサービスを実行するノードのポート番号。

ユーザ名

PowerCenter リポジトリサービスユーザーの名前。

パスワード

PowerCenter リポジトリサービスユーザーのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

セキュリティドメイン

オプション。PowerCenter リポジトリサービスユーザーが保存されている Informatica セキュリティドメインの名前。
デフォルトは LDAP 認証です。

2. **【次へ】** をクリックします。

PowerCenter コンポーネントの Data Integration Hub サーバープラグインのインストールを選択した場合、**【PowerCenter ドメイン設定】** ページが表示されます。

PowerCenter サーバーコンポーネントを選択しなかった場合は、**【PowerCenter pmrep コマンドラインユーティリティの場所】** ページが表示されます。手順 [5](#) に進みます。

3. 次のフィールドに値を入力します。

ドメイン名

Data Integration Hub ワークフローを実行するための PowerCenter 統合サービスを含む Informatica ドメインの名前。

ノード名

PowerCenter 統合サービスが実行する Informatica ドメインのノード。

ドメイン管理者のユーザー名

Informatica ドメイン管理者の名前。

ドメイン管理者のパスワード

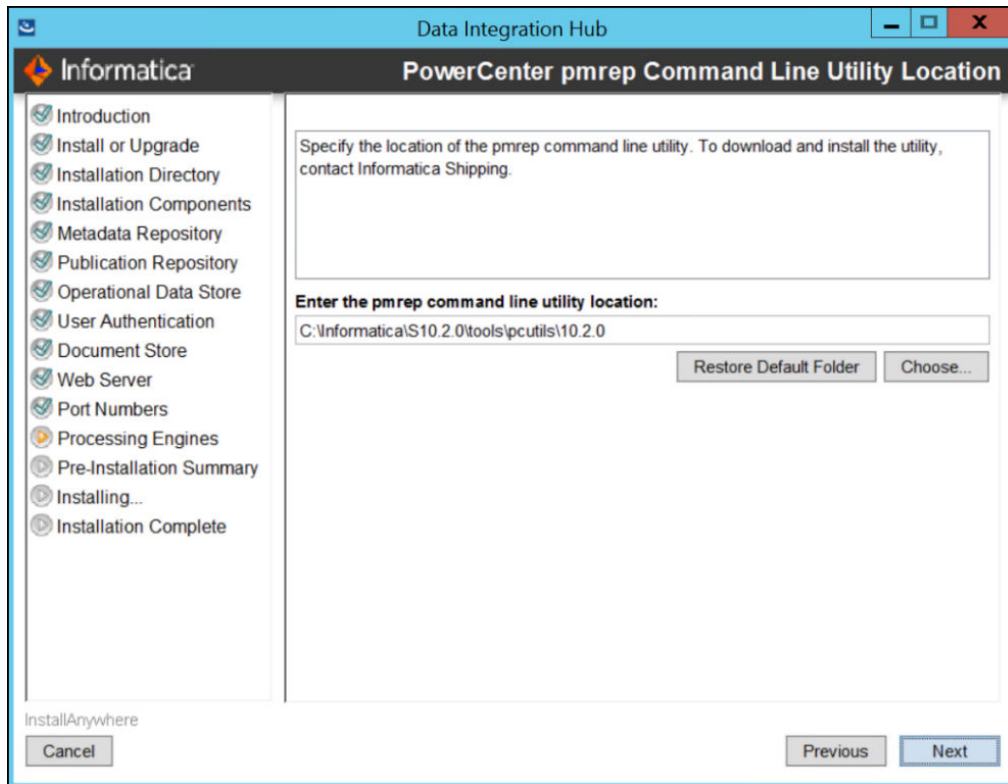
Informatica ドメイン管理者のパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

Integration Service 名

ワークフローを実行するために Data Integration Hub で使用する PowerCenter 統合サービスの名前。

4. **【次へ】** をクリックします。

[PowerCenter pmrep コマンドラインユーティリティの場所] ページが表示されます。



5. pmrep コマンドラインユーティリティの場所を指定します。

ユーティリティの場所は、PowerCenter サービスがインストールされているマシンに Data Integration Hub がインストールされているかどうかによって変わります。

環境	pmrep コマンドラインユーティリティの場所
Data Integration Hub は PowerCenter サービスがインストールされている場所にインストールされます。	<PowerCenter_services_installation_folder> \<PowerCenter_version>\tools\pcutils \<PowerCenter_version>
Data Integration Hub と PowerCenter サービスは、別々のマシンにインストールされます。	<PowerCenter_client_installation_folder> \<PowerCenter_version>\clients\PowerCenterClient\client \bin

6. [次へ] をクリックします。

Data Integration Hub Informatica Data Quality コンポーネントのインストールを選択した場合は、**[Informatica Data Quality ドメイン設定]** ページが表示されます。Data Integration Hub Informatica Data Quality コンポーネントのインストールを選択しなかった場合は、**[インストール前のサマリ]** ページが表示されます。

手順 7. Data Quality 設定の構成

1. Data Integration Hub Informatica Data Quality コンポーネントのインストールを選択した場合は、**[Informatica Data Quality ドメイン設定]** ページが表示されます。

次のフィールドに値を入力します。

ドメイン名

データ統合サービスが実行されているノードのドメイン名。

ホスト名

データ統合サービスが実行されているノードのホスト名。

ポート番号

データ統合サービスが実行されているノードのポート番号。

ドメイン管理者のユーザー名

ユーザーデータ統合サービスが実行されているノードのユーザー名。

ドメイン管理者のパスワード

データ統合サービスが実行されているノードのパスワード。

セキュリティドメイン

オプション。モデルリポジトリサービスユーザーが保存されている Informatica セキュリティドメインの名前。

データ統合サービス名

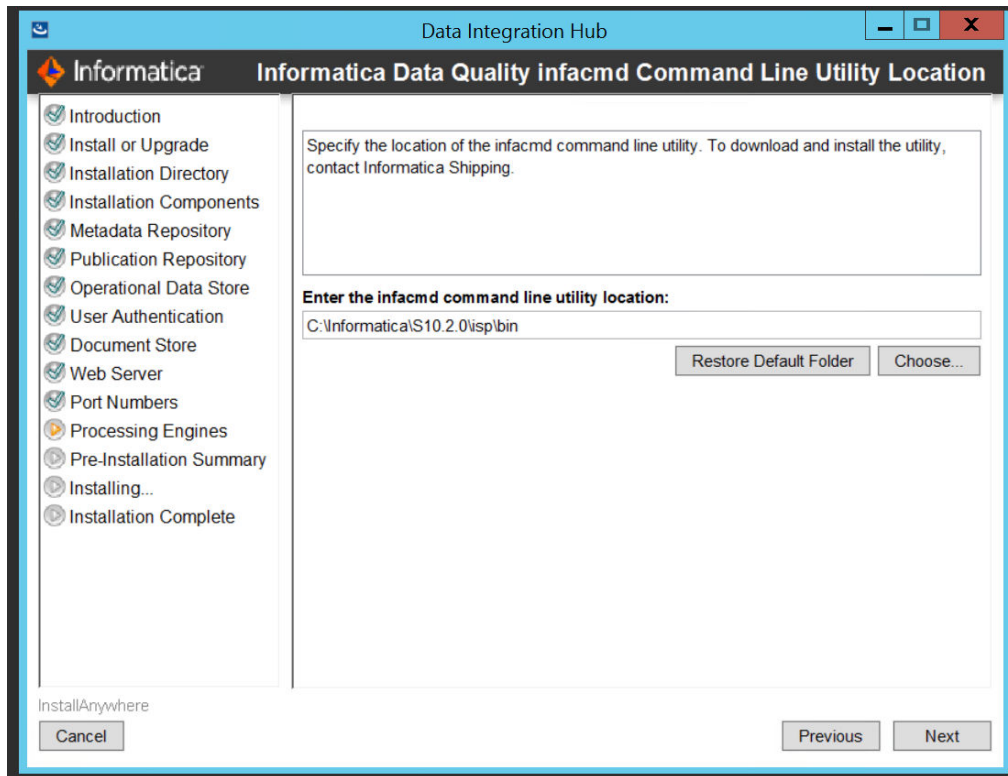
データ統合サービスの名前。

モデルリポジトリサービス名

モデルリポジトリサービスの名前。

2. **[次へ]** をクリックします。

[Informatica Data Quality infacmd コマンドラインユーティリティ] ページが表示されます。



3. infacmd コマンドラインユーティリティの場所を入力するか、またはデフォルトのディレクトリを受け入れて、[次へ] をクリックします。

[インストール前のサマリ] ページが表示されます。

手順 8. インストールの完了

1. [インストール前のサマリ] ページで、インストール情報が正しいことを確認し、[インストール] をクリックします。

インストールプロセス中、進捗情報が表示されます。インストールプロセスが終了すると、[インストール後のアクション] ページが表示されます。

2. Data Integration Hub PowerCenter サーバープラグインをインストールした場合は、ウィザードの指示に従ってプラグインを PowerCenter リポジトリに登録し、[次へ] をクリックします。

[インストールの完了] ページが表示されます。

3. [完了] をクリックして、インストーラを終了します。
4. インストーラによって生成されたログファイルを表示するには、次のディレクトリに移動します。
`<DIHInstallationDir>\logs`
5. 必要なインストール後のタスクを実行します。

詳細については、[第 5 章, 「インストール後の作業」 \(ページ 71\)](#)を参照してください。

注: ご利用の環境に関連したタスクのみ実行します。

6. 必要に応じて、追加の設定タスクを実行します。詳細については、[第 8 章, 「省略可能な Data Integration Hub 設定」 \(ページ 117\)](#)を参照してください。

Data Integration Hub のアップグレード (UNIX)

UNIX オペレーティングシステムでは、コンソールモードで Data Integration Hub をアップグレードします。Windows オペレーティングシステムの場合は、グラフィカルモードで Data Integration Hub をアップグレードします。

インストールする前に、使用している環境が最小システム要件を満たしていることを確認し、インストール前の手順を実行し、さらに PowerCenter サービスが実行中であることを確認します。

注: アップグレード時、Data Integration Hub により、ユーザーのホームディレクトリの DXLogs サブディレクトリにログファイルが保存されます。アップグレードが正常に終了しなかった場合は、この場所でログファイルを確認できます。

手順 1. インストーラの実行

1. Data Integration Hub のインストールに使用するユーザーアカウントでマシンにログインします。
権限エラーを回避するため、Data Integration Hub と PowerCenter のインストールには同じアカウントを使用します。
2. 他のすべてのアプリケーションを終了します。
3. インストーラをダウンロードしたディレクトリで `Install.bin -i console` を実行します。
【概要】 セクションが表示されます。
4. 説明を読み、**Enter** キーを押します。
【インストールまたはアップグレード】 セクションが表示されます。
5. **2** を入力して Data Integration Hub をアップグレードした後、**Enter** キーを押します。
【インストールディレクトリ】 セクションが表示されます。

手順 2. インストール設定の定義

1. 【インストールディレクトリ】 セクションで、インストールディレクトリへの絶対パスを入力するか、またはデフォルトのディレクトリを受け入れて、**Enter** キーを押します。
【インストールコンポーネント】 セクションが表示され、インストールするコンポーネントの番号付きリストが表示されます。
2. インストールするコンポーネントのカンマ区切りリスト番号を入力するか、またはデフォルトのコンポーネントを受け入れます。
 - 1- Data Integration Hub
Data Integration Hub のコアアプリケーションをインストールします。
デフォルトで選択されています。
 - 2- Data Integration Hub **ダッシュボードとレポート**
Data Integration Hub のダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールします。ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールするには、Data Integration Hub をインストールする必要があります。このコンポーネントは、オペレーショナルデータストアを使用するダッシュボードにレポートを表示する場合に選択します。
デフォルトでは選択されていません。
 - 3- PowerCenter **用 Data Integration Hub サーバープラグイン**
Data Integration Hub PowerCenter サーバープラグインコンポーネントをインストールします。インストール後、プラグインを PowerCenter リポジトリに登録します。

デフォルトで選択されています。

4- Data Integration Hub Hadoop サービス

Data Integration Hub と Hadoop クラスタ間の接続モジュール。Data Integration Hub が Hadoop パブリケーションリポジトリに対して操作を実行できるようにします。

Hadoop ベースのパブリケーションリポジトリを定義し、トピックの一部を Hadoop で管理する場合は、このコンポーネントを選択します。

注: Data Integration Hub Hadoop サービスは、Hadoop クラスタのエッジノードにインストールする必要があります。Data Integration Hub を Hadoop エッジノードにインストールしない場合は、Data Integration Hub インストール時にこのコンポーネントを選択しないでください。この場合、Data Integration Hub インストールの完了後に、エッジノードで再度インストールを実行し、エッジノードに Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントのみをインストールすることを選択します。

5- Data Integration Hub Data Engineering Integration/Informatica Data Quality

カスタムパブリケーションおよびカスタムサブスクリプションを行うために、Data Integration Hub で Data Engineering Integration および Data Quality マッピングを使用できるようにします。

このコンポーネントは、Data Integration Hub で、Data Engineering Integration または Data Quality マッピングを使用するカスタムパブリケーションおよびカスタムサブスクリプションを作成する場合に選択します。

3. **Enter** キーを押します。

[PowerCenter のバージョンの選択] セクションが表示されます。

4. PowerCenter のバージョンから、Data Integration Hub をインストールするものを選択するか、デフォルトの選択を受け入れます。

1- PowerCenter バージョン 10.5 未満

PowerCenter バージョン 10.5 未満の場合は、このオプションを選択します。

2 - PowerCenter バージョン 10.5。

PowerCenter バージョン 10.5 の場合は、このオプションを選択します。

5. **[入力]** キーを押します。

[メタデータリポジトリ] セクションが表示されます。

手順 3.Data Integration Hub リポジトリの設定

1. **[メタデータリポジトリ]** セクションで、メタデータリポジトリデータベースの設定オプションの番号を入力するか、デフォルトのオプションを受け入れます。

1- Data Integration Hub リポジトリを作成する

リポジトリをデータベース内に作成します。

2- 既存の Data Integration Hub リポジトリを使用する

既存のリポジトリ内のテーブルおよびデータを使用します。

2. **[入力]** キーを押します。

[メタデータリポジトリの接続] セクションが表示されます。

3. Data Integration Hub メタデータリポジトリデータベースとして使用する予定のデータベースに応じて、次のいずれかの数値を入力します。

- Data Integration Hub メタデータリポジトリデータベースとして Oracle データベースを使用する場合は、「1」と入力します。

- Data Integration Hub メタデータリポジトリデータベースとして Microsoft SQL Server データベースを使用する場合は、「2」と入力します。
4. メタデータリポジトリデータベース接続タイプの番号を入力するか、またはデフォルトの接続タイプを受け入れます。

1- データベース URL

データベースの場所。このオプションを選択する場合、次のフィールドに値を入力します。

- **[データベースホスト名]**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
- **[データベースポート番号]**。データベースのポート番号。Oracle のデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server および Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポートは 1433 です。
- **[データベース SID]**。データベースのシステム識別子。
- **[Microsoft SQL Server データベース]** または **[Microsoft Azure SQL データベース]**。データベース名。データベースインスタンスの名前。

2- カスタム接続文字列

データベースへの接続文字列。このオプションを選択する場合、次のいずれかのフィールドに値を入力します。

- **JDBC 文字列**。メタデータリポジトリに対する JDBC 接続文字列。
- **ODBC 文字列**。メタデータリポジトリに対する ODBC 接続文字列。PowerCenter Client プラグインをインストールする場合に適用できます。インストーラで ODBC 文字列の有効性を検証することはできません。

注: Microsoft SQL Server データベースの名前付きインスタンスを使用する場合、**[データベース URL]** オプションを使用してデータベースインスタンスに接続できません。**[カスタム接続文字列]** オプションを使用します。

例:

```
jdbc:informatica:sqlserver://MYSQLSERVERCOMPUTERHOSTNAME  
\\MYDBINSTANCENAME;DatabaseName=MYDATABASENAME;
```

5. 次のフィールドに値を入力します。

データベースユーザー名

データベースユーザーアカウントの名前。

データベースユーザのパスワード

データベースのデータベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

6. **Enter** キーを押します。
7. パブリケーションリポジトリ接続タイプの番号を入力するか、またはデフォルトの接続タイプを受け入れます。

注: Microsoft SQL Server の名前付きインスタンスを使用する場合は、カスタム接続文字列を定義する必要があります。

1- データベース URL

データベースの場所。このオプションを選択する場合、次のフィールドに値を入力します。

- **[データベースホスト名]**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。

- **[データベースポート番号]**。データベースのポート番号。Oracle のデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server または Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポート。
- **[Oracle データベース]** データベース SID。データベースのシステム識別子。
- **[Microsoft SQL Server データベース]** または **[Microsoft Azure SQL データベース]**。データベース名。データベースインスタンスの名前。

2- カスタム接続文字列

データベースへの接続文字列。このオプションを選択する場合、次のいずれかのフィールドに値を入力します。

- **[JDBC 文字列]**。パブリケーションリポジトリに対する JDBC 接続文字列。
- **[ODBC 文字列]**。PowerCenter Client プラグインをインストールする場合に適用できます。パブリケーションリポジトリに対する ODBC 接続文字列。インストーラで ODBC 文字列の有効性を検証することはできません。

注: Microsoft SQL Server データベースの名前付きインスタンスを使用する場合、**[データベース URL]** オプションを使用してデータベースインスタンスに接続できません。**[カスタム接続文字列]** オプションを使用します。

例：

```
jdbc:informatica:sqlserver://MYSQLSERVERCOMPUTERHOSTNAME
\MYDBINSTANCENAME;DatabaseName=MYDATABASENAME;
```

8. **[入力]** キーを押します。
9. 次のフィールドに値を入力します。

データベースユーザー名

データベースのデータベースユーザーアカウントの名前。

データベースユーザのパスワード

データベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

10. **[入力]** キーを押します。

Data Integration Hub のダッシュボードとレポートコンポーネントのインストールを選択した場合は、**[オペレーショナルデータストア]** セクションが表示されます。ダッシュボードとレポートコンポーネントのインストールを選択していない場合は、[「手順 5. Web サーバーの設定」 \(ページ 107\)](#)に進みます。

手順 4. オペレーショナルデータストアのセットアップ

1. **[オペレーショナルデータストア]** セクションで、オペレーショナルデータストアのデータベース設定オプションの番号を入力するか、デフォルトのオプションを受け入れます。

1- オペレーショナルデータストアリポジトリを作成する

データベース内にオペレーショナルデータストアリポジトリを作成します。

2- 既存のオペレーショナルデータストアリポジトリを使用する

既存のオペレーショナルデータストアリポジトリ内のテーブルおよびデータを使用します。

2. オペレーショナルデータストアに関するデータベース接続タイプの番号を入力するか、またはデフォルトの接続タイプを受け入れます。

1- データベース URL

データベースの場所。このオプションを選択する場合、次のフィールドに値を入力します。

- **[データベースホスト名]**。データベースサーバーをインストールするマシンのホスト名。
- **[データベースポート番号]** データベースのポート番号。Oracle のデフォルトのポート番号は 1521 です。Microsoft SQL Server または Microsoft Azure SQL データベースのデフォルトのポートは 1433 です。
- **[Oracle データベース]** データベース SID。データベースのシステム識別子。
- **[Microsoft SQL Server データベース]** または **[Microsoft Azure SQL データベース]**。データベース名。データベースインスタンスの名前。

2- カスタム接続文字列

データベースへの接続文字列。このオプションを選択する場合、次のいずれかのフィールドに値を入力します。

- **JDBC 文字列**。オペレーショナルデータストアに対する JDBC 接続文字列。
- **[ODBC 文字列]**。オペレーショナルデータストアに対する ODBC 接続文字列。PowerCenter Client プラグインをインストールする場合、インストーラでは ODBC 文字列の有効性を検証できません。

注: Microsoft SQL Server データベースの名前付きインスタンスを使用する場合、**[データベース URL]** オプションを使用してデータベースインスタンスに接続できません。**[カスタム接続文字列]** オプションを使用します。

例：

```
jdbc:informatica:sqlserver://MYSQLSERVERCOMPUTERHOSTNAME  
\MYDBINSTANCENAME;DatabaseName=MYDATABASENAME;
```

3. オペレーショナルデータストアについて、次のフィールドに値を入力します。

データベースユーザー名

データベースのデータベースユーザーアカウントの名前。

データベースユーザーのパスワード

データベースのデータベースアカウントのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

4. **[入力]** キーを押します。

[Web サーバー] セクションが表示されます。

手順 5. Web サーバーの設定

1. Web サーバー接続を設定します。

- a. ネットワーク通信プロトコルの番号を入力するか、またはデフォルトのプロトコルを受け入れます。

1- HTTPS を有効にする

Data Integration Hub に、ブラウザで操作コンソールを開く場合は、セキュリティで保護されたネットワーク通信を使用するよう指示します。

HTTPS および HTTP を選択すると、操作コンソールにより既存の HTTP 接続は HTTPS 接続に切り替わります。

2- HTTP を有効にする

Data Integration Hub に、ブラウザで操作コンソールを開く場合は、通常の HTTP ネットワーク通信を使用するよう指示します。

- b. **【HTTPS を有効にする】** を選択している場合は、次のフィールドに値を入力します。

コネクタポート番号

HTTPS で操作コンソールを開く場合に使用する Tomcat コネクタのポート番号です。

デフォルト値は 18443 です。

インストーラによって生成されたキーストアを使用

未登録の証明書によりキーストアファイルを生成するようインストーラに指示します。このオプションを選択した場合、操作コンソールを初めて開いた際にブラウザから受け取るセキュリティ警告は無視します。

既存のキーストアファイルの使用

インストーラに既存のキーストアファイルをロードするよう指示します。次のフィールドに値を入力します。

- キーストアのパスワードキーストアファイルのパスワード
- キーストアファイル。キーストアファイルのパス。

キーストアファイルは、PKCS (Public Key Cryptography Standard: 公開鍵暗号標準) #12 方式である必要があります。

- c. **【HTTP を有効にする】** を選択している場合は、次のフィールドに値を入力します。

HTTP コネクタポート番号

HTTP コネクタのポート番号。このフィールドをクリアすると、操作コンソールへのログイン時、ブラウザから Data Integration Hub サーバーに HTTPS を使用して接続します。

デフォルト値は 18080 です。

サーバーシャットダウンリスナのポート番号

Tomcat サーバーシャットダウンを制御するリスナのポート番号。

デフォルト値は 18005 です。

2. **Enter** キーを押します。

Data Integration Hub PowerCenter サーバープラグインか、または Data Integration Hub PowerCenter Client プラグインコンポーネントのインストールを選択している場合、**【PowerCenter の場所】** セクションが表示されます。PowerCenter サーバーまたはクライアントコンポーネントを選択しなかった場合は、**【PowerCenter Web サービス Hub】** セクションが表示されます。

手順 6. PowerCenter 設定の構成

1. Data Integration Hub PowerCenter サーバープラグインまたは Data Integration Hub PowerCenter Client プラグインコンポーネントのインストールを選択した場合は、**[PowerCenter の場所]** セクションで、PowerCenter をインストールしたディレクトリを入力するか、またはデフォルトディレクトリを受け入れて **Enter** キーを押します。

[PowerCenter Web サービス] セクションが表示されます。

2. **[PowerCenter Web サービス]** セクションで、**Enter** キーを押してデフォルトの URL を受け入れるか、**Enter** キーを押します。
3. PowerCenter リポジトリサービスの名前を入力し、**Enter** キーを押します。
4. 次のフィールドに値を入力します。

ノードのホスト名

PowerCenter リポジトリサービスを実行するノードのホスト名。

ノードのポート番号

PowerCenter リポジトリサービスを実行するノードのポート番号。

ユーザ名

PowerCenter リポジトリサービスユーザーの名前。

パスワード

PowerCenter リポジトリサービスユーザーのパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

セキュリティドメイン

オプション。PowerCenter リポジトリサービスユーザーが保存されている Informatica セキュリティドメインの名前。
デフォルトは LDAP 認証です。

5. **Enter** キーを押します。

PowerCenter コンポーネントの Data Integration Hub サーバープラグインのインストールを選択した場合、**[PowerCenter ドメイン設定]** セクションが表示されます。PowerCenter サーバーコンポーネントを選択しなかった場合は、**[PowerCenter pmrep コマンドラインユーティリティの場所]** セクションが表示されます。手順 9 に進みます。

6. 次のフィールドに値を入力します。

ドメイン名

Data Integration Hub ワークフローを実行するための PowerCenter 統合サービスを含む Informatica ドメインの名前。

ノード名

PowerCenter 統合サービスが実行する Informatica ドメインのノード。

ドメイン管理者のユーザー名

Informatica ドメイン管理者の名前。

ドメイン管理者のパスワード

Informatica ドメイン管理者のパスワード。Data Integration Hub では、パスワードは暗号化された文字列として保存されます。

7. **Enter** キーを押します。
8. ワークフローを実行するために Data Integration Hub で使用する PowerCenter 統合サービスの名前を入力し、**Enter** キーを押します。

9. pmrep コマンドラインユーティリティの場所を入力し、**Enter** キーを押します。ユーティリティの場所は、PowerCenter サービスがインストールされているマシンに Data Integration Hub がインストールされているかどうかによって変わります。

注: Linux オペレーティングシステムでは、pmrep が実行可能でなければなりません。

環境	pmrep コマンドラインユーティリティの場所
Data Integration Hub は PowerCenter サービスがインストールされている場所にインストールされます。	<PowerCenter_services_installation_folder>/ <PowerCenter_version>/tools/pcutils/ <PowerCenter_version>
Data Integration Hub と PowerCenter サービスは、別々のマシンにインストールされます。	<PowerCenter_client_utility_directory>/PowerCenter/ server/bin

10. **Enter** キーを押します。

Data Integration Hub Data Engineering Integration/Informatica Data Quality コンポーネントのインストールを選択した場合、Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の【ドメイン名】セクションが表示されます。Data Integration Hub Data Engineering Integration/Informatica Data Quality コンポーネントのインストールを選択しなかった場合は、【インストール前のサマリ】セクションが表示されます。

手順 7.処理エンジン設定の構成

1. Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の【ドメイン名】セクションで、**Enter** キーを押してデフォルトのドメイン名を受け入れるか、Informatica ドメインの名前を入力して、**Enter** キーを押します。
Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の【ホスト名】セクションが表示されます。
2. **Enter** キーを押してデフォルトホスト名を受け入れるか、データ統合サービスが実行されているノードのホスト名を入力して **Enter** キーを押します。
Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の【ポート番号】セクションが表示されます。
3. **Enter** キーを押してデフォルトのポート番号を受け入れるか、データ統合サービスが実行されているノードのポート番号を入力して **Enter** キーを押します。
Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の【管理者ユーザー名】セクションが表示されます。
4. **Enter** キーを押してデフォルトユーザー名を受け入れるか、データ統合サービスが実行されているノードのユーザー名を入力して **Enter** キーを押します。
Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の【管理者パスワード】セクションが表示されます。
5. **Enter** キーを押してデフォルトパスワードを受け入れるか、データ統合サービスが実行されているノードのパスワードを入力して **Enter** キーを押します。
Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の【セキュリティドメイン】セクションが表示されます。
6. 必要に応じて、モデルリポジトリサービスユーザーが保存されている Informatica セキュリティドメインの名前を入力します。 **Enter** キーを押します。

Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の **【データ統合サービス名】** セクションが表示されます。

7. **Enter** キーを押してデフォルト名を受け入れるか、データ統合サービスの名前を入力して、**Enter** キーを押します。

Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の **【モデルリポジトリサービス名】** セクションが表示されます。

8. **Enter** キーを押してデフォルト名を受け入れるか、モデルリポジトリサービスの名前を入力して、**Enter** キーを押します。

Data Engineering Integration と Informatica Data Quality の infacmd コマンドラインユーティリティの **【場所】** セクションが表示されます。

9. **Enter** キーを押してデフォルトの場所を受け入れるか、Infacmd コマンドラインユーティリティの場所を入力して、**Enter** キーを押します。

【インストール前のサマリ】 セクションが表示されます。

手順 8.インストールの完了

1. **【インストール前のサマリ】** セクションで、インストール情報が正しいことを確認し、**Enter** キーを押します。

インストールプロセス中、進捗情報が表示されます。

2. Data Integration Hub PowerCenter サーバープラグインをインストールした場合は、画面の指示に従い、プラグインを PowerCenter リポジトリに登録し、**Enter** キーを押します。

3. インストーラにより生成されたログファイルを表示するには、次のディレクトリに移動します。

```
<DIHInstallationDir>\logs
```

4. 必要なインストール後のタスクを実行します。

詳細については、[第 5 章, 「インストール後の作業」 \(ページ 71\)](#) を参照してください。

注: ご利用の環境に関連したタスクのみ実行します。

5. 必要に応じて、追加の設定タスクを実行します。詳細については、[第 8 章, 「省略可能な Data Integration Hub 設定」 \(ページ 117\)](#) を参照してください。

アップグレードした後に

アップグレードプロセスを完了するには、次の手順を実行します。

1. 以前のバージョンで Data Integration Hub の構成ファイルに行った変更を再適用します。
2. ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールした場合は、ダッシュボードとレポートコンポーネントのライセンスに登録します。
3. ダッシュボードとレポートコンポーネントをインストールした場合は、オペレーショナルデータストア (ODS) ローダーワークフローをインポートします。
4. いずれかの Data Integration Hub リポジトリが Microsoft SQL Server にインストールされていて、Windows 認証を使用する場合は、Windows 認証の資格情報を設定します。
5. セキュリティ設定ファイルを更新します。
6. いずれかの Data Integration Hub リポジトリが Microsoft SQL Server にインストールされていて、パーティションが存在しない場合は、Data Integration Hub のすべてのパーティション関数を削除します。
例: DIH__DATE_PARTITION_FUNCTION。

7. Data Integration Hub Run Publication Subscription Web サービス API を使用している場合は、API を更新します。
8. Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントを初めてインストールした場合は、Hadoop ベースのパブリケーションリポジトリに対応するように環境を設定します。詳細については、[「Hadoop パブリケーションリポジトリに対応するための環境の設定」 \(ページ 75\)](#)を参照して下さい。
9. Data Integration Hub サービスを起動します。詳細については、[第 7 章, 「Data Integration Hub の起動と停止」 \(ページ 115\)](#)を参照して下さい。
注: Data Integration Hub をインストールしたマシンとは別のマシンに Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントをインストールした場合は、両方のマシンでサービスを起動します。詳細については、[「Linux での Data Integration Hub の起動と停止」 \(ページ 116\)](#)を参照して下さい。
10. Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントを初めてインストールした場合は、操作コンソールにログインし、DIH__STAGING__HADOOP 接続を設定します。詳細については、[「Data Integration Hub リポジトリへの接続の設定」 \(ページ 78\)](#)を参照して下さい。
11. 各クライアントマシン上のブラウザキャッシュをクリアします。
12. リアルタイムパブリケーションワークフローを使用する場合は、すべてのリアルタイムパブリケーションワークフローについて、プロパティ **【高精度を有効にする】** を、Data Integration Hub パブリケーションリポジトリにデータを書き込むセッションで有効にする必要があります。
13. カスタムワークフローを使用する場合は、すべてのリアルタイムパブリケーションワークフローで Data Integration Hub パブリケーションリポジトリを更新します。
14. B2B_DX_InstallLog.txt ログファイルに、無効化されたサブスクリプションのリストが含まれている場合は、それらを有効にします。無効化されたサブスクリプションを有効にするには、対応するサブスクリプションのサブスクリプションウィザードに従って操作し、サマリページで **【完了】** をクリックします。
無効化されたサブスクリプションを見つけて有効にする方法の詳細については、[「無効化されたサブスクリプションの有効化」 \(ページ 113\)](#)を参照してください。

注: Data Integration Hub のインストールにより、以前のバージョンの Data Integration Hub は削除されることはありません。インストーラは、フォルダ名をサフィックス_Backupn.n.n (n.n.n はアップグレードしたバージョンの数字) が加えられた名前に変更します。構成ファイルが正しく更新されたことを確認するには、以前のバージョンの Data Integration Hub のディレクトリ内の構成ファイルを表示します。

関連項目：

- [「Web サービスの PowerCenter へのインポート」 \(ページ 73\)](#)

設定への変更の再適用

以前のバージョンで Data Integration Hub の構成ファイルに行った変更を再適用します。

この手順を行うために、Data Integration Hub のインストールフォルダのバックアップを作成しておく必要があります。

1. 次のファイルを、Data Integration Hub のインストールフォルダをバックアップした場所から開きます。
<BackupDir>/conf/dx-configuration.properties
2. Data Integration Hub がインストールされているマシンで、テキストエディタを使用して次の場所から dx-configuration.properties ファイルのサーバーコピーとコンソールコピーを開きます。
<DIHInstallationDir>\DataIntegrationHub\tomcat\shared\classes\
<DIHInstallationDir>\conf\
3. すべての関連設定の変更を、バックアップしておいたファイルから両方の dx-configuration.properties ファイルにコピーします。
4. dx-configuration.properties ファイルを保存します。

ダッシュボードとレポートのライセンス登録

Data Integration Hub ダッシュボードとレポートコンポーネントのライセンスを登録します。

1. Data Integration Hub サービスを開始します。
2. 次の場所にある _Settings.lgx ファイルを移動します。
<DIHInstallationDir>\DataIntegrationHub\tomcat\webapps\dih-dashboard_Definitions
次の場所に移動します。
<DIHInstallationDir>\DataIntegrationHub\tomcat\shared\classes
ファイル名を次の名前に変更します。
dx_dashboard_configuration.xml
3. 以前のバージョンの dx_dashboard_configuration.xml ファイルに加えた修正を再適用します。
4. Logi Info ダッシュボードライセンスファイル _Settings_encrypted.lgx を次の場所にコピーします。
<DIHInstallationDir>\DataIntegrationHub\tomcat\webapps\dih-dashboard_Definitions
5. ファイル _Settings_encrypted.lgx の名前を _Settings.lgx に変更します。
6. Data Integration Hub サービスを開始します。

オペレーショナルデータストアローダーワークフローの置き換え

ダッシュボードとレポートコンポーネントを初めてインストールした場合は、オペレーショナルデータストア (ODS) ローダーワークフローをインポートします。ダッシュボードとレポートコンポーネントが以前のバージョンの Data Integration Hub にインストールされていた場合、9.6.2 より古いバージョンから最新バージョンにアップグレードするには、既存のワークフローを置き換えてください。

注: ダッシュボードとレポートコンポーネントが Data Integration Hub の以前のバージョンにインストールされていた場合、Data Integration Hub を最新バージョンにアップグレードする前に、Data Integration Hub ODS ローダーワークフローのスケジュールを解除しておく必要があります。詳細については、[GUID-8BD86874-0566-47F6-99C8-16427FA8E887](#) を参照してください。

1. PowerCenter Repository Manager で、**インポートウィザード**を実行します。
2. Data Integration Hub ODS ローダーワークフローファイルを選択します。ワークフローファイルの名前は ODS がインストールされているデータベースのタイプによって異なります。

データベースタイプ	ワークフローの場所と名前
Oracle	<DIHInstallationDir>\powercenter\ETL\DX_ETL.xml
Microsoft SQL Server	<DIHInstallationDir>\powercenter\ETL\DX_ETL_SQLSERVER.xml

3. ダッシュボードとレポートコンポーネントが以前のバージョンの Data Integration Hub にインストールされていた場合、バージョン 9.6.1 から最新バージョンにアップグレードするには、以前のバージョンの Data Integration Hub ODS ローダーワークフローを含む PowerCenter リポジトリフォルダをインポートフォルダターゲットとして選択します。
4. ダッシュボードとレポートコンポーネントが Data Integration Hub の以前のバージョンにインストールされていた場合、**【衝突名の解決ウィザード】** で **【置換】** を選択します。**【解決の適用対象】** リストで、**【すべての競合】** を選択します。**【次へ】** をクリックします。
5. グローバルコピーオプション領域で、**シーケンスジェネレータ**、**ノーマライザ**、または **XML キーのカレント値を保持およびマッピング変数の永続値を保持**を選択します。
6. **インポートウィザード**の指示に従い、ワークフローのインポートを完了します。

Windows 認証の資格情報の設定

いずれかの Data Integration Hub リポジトリを Microsoft SQL Server にインストールして、Windows 認証を使用することを選択した場合、Data Integration Hub で Microsoft SQL Server instance インスタンスへのアクセスに使用する資格情報を設定します。

設定プロセスを開始する前に、すべての Data Integration Hub Windows サービスが停止され、Data Integration Hub 操作コンソールおよび Data Integration Hub サーバーが実行されていないことを確認します。

1. Windows の **【サービス】** ウィンドウにアクセスします。
2. サービス **【Informatica Data Integration Hub Server *version*】** をクリックします。
Data Integration Hub の **【サーバープロパティ】** ウィンドウが表示されます。
3. **【ログオン】** タブを選択します。
4. **【このアカウント】** を選択し、**【参照】** をクリックして、**【ユーザーの選択】** ダイアログボックスでユーザーアカウントを指定します。完了したら、**【OK】** をクリックします。
5. **【パスワード】** および **【パスワードの確認】** にユーザーアカウントのパスワードを入力し、**【OK】** をクリックします。
6. [2.5](#) サービス **【Informatica Data Integration Hub Console *version*】** で手順を繰り返します。

セキュリティ設定ファイルの更新

この手順を行うために、Data Integration Hub のインストールフォルダのバックアップを作成しておく必要があります。

1. 次のフォルダを、Data Integration Hub のインストールフォルダをバックアップした場所から開きます。
<BackupDir>\shared\conf\security\
2. バックアップした security フォルダのすべてのファイルを次のフォルダにコピーします。
<DIHInstallationDir>\shared\conf\security\
既存のファイルを上書きします。

Run Publication Subscription Web サービス API の更新

Data Integration Hub Run Publication Subscription Web サービス API を使用している場合は、Data Integration Hub サービスを開始する前に、API を更新します。

1. runpublicationsubscription Data Integration Hub Web サービスワークフローを PowerCenter にインポートします。
2. 新しい Web サービスを使用するようにクライアントアプリケーションを更新します。

Data Integration Hub サービスのリスタート

Data Integration Hub Server および Data Integration Hub Console サービスを再起動します。

無効化されたサブスクリプションの有効化

Data Integration Hub では、次の設定を含む自動リレーショナルデータベースサブスクリプションがアップグレード中に無効化されます。

- サブスクリプションウィザードのフィールドマッピングページで Data Integration Hub のシステムフィールドがマッピングされている。

- サブスクリプション配信戦略が、新しい行を挿入し、ターゲットの既存の行を更新するように設定されている。

無効化されたサブスクリプションのリストは、次のログファイルで確認できます: <Data Integration Hub インストールディレクトリ>/logs/B2B_DX_InstallLog.txt。

このログファイルの無効化されたサブスクリプションのリストのサンプルを以下に示します。

The invalidated subscriptions with delivery option 'Insert new rows and update changed rows' and system fields mapped are: [employeeedata, coursedescriptions, departmentdetails]

無効化されたサブスクリプションを有効にするには、次の手順を実行します。

1. 無効化されたサブスクリプションのサブスクリプションウィザードにアクセスします。
2. 各ページで **【次へ】** をクリックして、次のページに進みます。
3. サマリページで **【完了】** をクリックします。

第 7 章

Data Integration Hub の起動と停止

この章では、以下の項目について説明します。

- [Data Integration Hub の起動と停止の概要, 115 ページ](#)
- [Windows での Data Integration Hub の起動と停止, 115 ページ](#)
- [Linux での Data Integration Hub の起動と停止, 116 ページ](#)

Data Integration Hub の起動と停止の概要

Data Integration Hub サービスを停止または起動します。

例えば、Data Integration Hub をインストールした後でサービスを起動したり、Data Integration Hub をアップグレードする前にサービスを停止したりします。

Windows での Data Integration Hub の起動と停止

[Start (スタート)] メニューから Data Integration Hub サービスの起動と停止を行うか、またはスタートアップスクリプトとシャットダウンスクリプトを実行します。

インストーラにより、すべての Data Integration Hub サービスの起動と停止を行うショートカットが [Start (スタート)] メニューに作成されます。

[Start (スタート)] メニューからの Data Integration Hub の起動と停止

Windows オペレーティングシステムでは、[Start (スタート)] メニューを使用してすべての Data Integration Hub サービスの起動と停止を行うことができます。 [Start (スタート)] メニューから単一のサービスを起動または停止することはできません。

1. [Start (スタート)] メニューで、**[Informatica (Informatica)] > Data Integration Hub** をクリックします。
2. 次のいずれかのオプションを選択します。

- [Start Services (サービスの起動)]。すべての Data Integration Hub サービスを起動します。
- [Stop Services (サービスの停止)]。すべての Data Integration Hub サービスを停止します。
- [Operation Console (操作コンソール)]。Web ブラウザ内に操作コンソールを開きます。

バッチスクリプトを使用した Data Integration Hub の起動と停止

Windows オペレーティングシステムでは、スクリプトを実行して 1 つまたは複数の Data Integration Hub サービスの起動と停止を行うことができます。

1. 次のディレクトリに移動します。
`<DIHInstallationDir>\bin`
2. 実行するスクリプトを選択します。
 - startup.bat。すべての Data Integration Hub サービスを起動します。
 - shutdown.bat。すべての Data Integration Hub サービスを停止します。
 - 各サービスをリストの順序に従って個別に起動します。
 - dihconsole.bat。操作コンソールを起動します。
 - dihserver.bat。Data Integration Hub サーバーを起動します。

Linux での Data Integration Hub の起動と停止

スクリプトを実行して Data Integration Hub サービスの起動と停止を行います。インストーラにより、すべての Data Integration Hub サービスを起動または停止することも各サービスを個別に起動することもできるシェルスクリプトが作成されます。各サービスを個別に停止することはできません。

1. 次のディレクトリに移動します。
`<DIHInstallationDir>/bin`
2. 実行するスクリプトを選択します。
 - startup.sh。すべての Data Integration Hub サービスを起動します。
 - shutdown.sh。すべての Data Integration Hub サービスを停止します。
 - 各サービスをリストの順序に従って個別に起動します。
 - dihconsole.sh。操作コンソールを起動します。
 - dihserver.sh。Data Integration Hub サーバーを起動します。

注: Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントをインストールしたマシンと Data Integration Hub をインストールしたマシンが異なる場合、サービスのインストール先のマシンで Hadoop サービスの起動や停止を行うには、次の場所にあるスクリプト startup.sh または shutdown.sh を実行します。

`<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/bin/`

第 8 章

省略可能な Data Integration Hub 設定

この章では、以下の項目について説明します。

- [オプションの Data Integration Hub 設定概要, 117 ページ](#)
- [Data Integration Hub サーバーの RMI ポート番号の変更, 118 ページ](#)
- [ログ, 118 ページ](#)
- [最大の Java ヒープサイズの変更, 122 ページ](#)
- [データベースユーザーアカウントの資格情報の変更, 123 ページ](#)
- [Data Integration Hub Hadoop サービスの資格情報の変更, 124 ページ](#)
- [ダッシュボードの設定ファイルの更新, 125 ページ](#)
- [PowerCenter 統合サービスの Data Integration Hub へのアクセスの設定, 126 ページ](#)
- [PowerCenter バージョン 10 でのリポジトリ接続の設定, 127 ページ](#)

オプションの Data Integration Hub 設定概要

オプションの設定には、Data Integration Hub のインストールまたはアップグレードの後もしくは後日に必要に応じて実行できるタスクが含まれます。

- Data Integration Hub コンポーネントは、ポートを介して情報を送信します。デフォルトのポート番号は、ネットワーク環境の要件に基づいて変更できます。
- 複数のコンポーネントで情報が処理されたりエラーが発生したりする場合には、インストールされているコンポーネントの分析とトラブルシューティングに使用できる情報がログに記録されます。ログファイルの場所の変更、もしくはカスタムログの定義も可能です。
- パフォーマンスと信頼性を向上させるために、組み込み Data Integration Hub サーバブローカ、または組み込み Data Integration Hub コンソールブローカの最大のメモリ割り当てを変更することができます。
- Data Integration Hub リポジトリまたはオペレーショナルデータストアのデータベースユーザー資格情報を変更する場合、Data Integration Hub 設定ファイルを更新する必要があります。ダッシュボードとレポートコンポーネントを実行している場合、関連する PowerCenter 接続も更新する必要があります。
- Hadoop ベースのパブリケーションリポジトリを使用している場合、Data Integration Hub Hadoop サービスのデータベースユーザーアカウントの資格情報を変更するには、Data Integration Hub の設定ファイルを更新する必要があります。

- ダッシュボードとレポートコンポーネントを使用し、そのインストール後に Data Integration Hub をホストするマシンの IP アドレスが変更される場合には、ダッシュボードの設定ファイルの IP アドレスを更新する必要があります。
- Data Integration Hub のインストールまたはアップグレード中に Data Integration Hub でワークフローを実行するために使用する PowerCenter 統合サービスを定義します。必要に応じて、別の PowerCenter 統合サービスを Data Integration Hub にアクセスするように設定できます。
- ダッシュボードとレポートコンポーネントを使用しており、Data Integration Hub およびオペレーショナルデータストアリポジトリが Microsoft SQL Server にインストールされており、PowerCenter バージョン 10 を使用している場合は、PowerCenter Workflow Manager でリポジトリ接続を設定します。

Data Integration Hub サーバーの RMI ポート番号の変更

dx-configuration.properties ファイルと PowerCenter 統合サービス内の RMI ポート番号を置き換えます。

1. Data Integration Hub がインストールされているマシンで、テキストエディタを使用して次の場所から dx-configuration.properties ファイルのサーバーコピーとコンソールコピーを開きます。
`<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/shared/classes/
 <DIHInstallationDir>/conf/`
2. 次のプロパティにポート番号を入力します。
`dx.rmi.port=`
3. dx-configuration.properties ファイルを保存します。
4. 管理者ツールで、Data Integration Hub トランスフォーメーションを実行する PowerCenter 統合サービスを選択します。
5. PowerCenter 統合サービスの [プロセス] タブで、DX_SERVER_URL 環境変数を追加または編集し、Data Integration Hub サーバーの URL を次の形式で設定します。
`rmi://<HostName>:<PortNumber>`
6. 変更を保存して、Data Integration Hub サービスを再開します。

ログ

Data Integration Hub ログファイルには、活動の分析とトラブルシューティングに使用できる情報が含まれます。

以下のログを設定できます。

- デバッグログ
- RMI サーバーログ
- データベースデバッグログ
- インポートログ

別の宛先ログファイルにログメッセージを送信するには、SNMP アペンダを作成してログを独自の宛先にリダイレクトできます。

デフォルトのログファイル

Data Integration Hub は、システムとユーザーの処理についての診断情報を記録するログファイルを作成します。インストーラは、インストール時の選択内容と設定を記録するログファイルも作成します。

ログ設定値は、Data Integration Hub 設定ディレクトリにある log4j.xml ファイルで設定できます。

使用できるログファイルは以下のとおりです。

サーバー

dxserver.log ファイルは次のディレクトリにあります。

<DIHInstallationDir>/logs

サーバー問題のトラブルシューティングを行うときには、ログをデバッグモードに変更することにより詳細メッセージを生成できます。

操作コンソール

ログファイルは次のディレクトリにあります。

<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/logs

インストーラ

ログファイルは次のディレクトリにあります。

<DIHInstallationDir>/logs

Data Integration Hub Hadoop サービス

Data Integration Hub Hadoop サービスを使用する場合、ログファイルは次の場所に配置されます。

<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/logs

ログメッセージの宛先のカスタマイズ

デフォルトでは、log4j ロギングユーティリティはログメッセージをファイルに送信します。SNMP (Simple Network Management Protocol) を使用してデフォルトのログファイルとは別の宛先にログメッセージを送信するように log4j ユーティリティを設定できます。インストーラは、log4j ユーティリティが SNMP と連動するために必要なファイルをインストールします。

宛先を変更するには次のタスクを実行します。

1. log4j プロパティファイルに SNMP アペンダを追加し、ロギングレベルを設定します。log4j.xml ファイル内のサンプル SNMP アペンダを、使用するアペンダに変更します。log4j.xml ファイルには、異なる SNMP 出力に異なるタイプのログメッセージを送信する複数のアペンダを追加できます。
2. メッセージをリスンするように SNMP マネージャを設定します。log4j メッセージを処理するように SNMP マネージャを設定する方法の詳細は、SNMP ネットワーク管理ソフトウェアのドキュメントを参照します。

log4j ユーティリティの一般的な情報は、Apache Web サイトを参照します。

<http://logging.apache.org/log4j/1.2/manual.html>

SNMP アペンダのパラメータ

log4j.xml ファイル内の SNMP アペンダパラメータは、ログメッセージの出力先と設定を定義したものです。

次の表は、Data Integration Hub に定義できる SNMP パラメータを示しています。

パラメータ	説明
ManagementHost	監視するシステムホストの IP アドレス。 デフォルトは 127.0.0.1 です。
ManagementHostTrapListenPort	監視するシステムホストのポート番号。 デフォルトは 162 です。
LocalIPAddress	ローカル SNMP 組み込みエージェントの IP アドレス。通常、この値を変更する必要はありません。 デフォルトは 127.0.0.1 です。
LocalTrapSendPort	ローカル SNMP 組み込みエージェントのポート番号。 デフォルトは 161 です。
CommunityString	SNMP コミュニティの名前。 デフォルトは public です。
GenericTrapType	トラップのタイプ。以下のいずれかの値を設定します。 <ul style="list-style-type: none">- 0=コールドスタート- 1=ウォームスタート- 2=リンクダウン- 3=リンクアップ- 4=認証失敗- 5=egp 隣接ノードとの通信遮断- 6=企業固有 デフォルトは 6=企業固有
ApplicationTrapOID	トラップメッセージを送信するアプリケーションオブジェクトの識別子。このパラメータの値は、Data Integration Hub 内のアプリケーションオブジェクトの名前に設定できます。 デフォルトは 1.3.6.1.2.1.2.0.0.0.0 です。
EnterpriseOID	トラップメッセージを送信する組織オブジェクトの識別子。このパラメータは、Data Integration Hub でメッセージを識別する任意の値に設定できます。 デフォルトは 1.3.6.1.2.1.2.0 です。
ForwardStackTraceWithTrap	ログメッセージにスタックトレースを含めるかどうかを決定します。 デフォルトは False です。

パラメータ	説明
しきい値	<p>レポートの詳細レベル。以下のいずれかの値を設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 重大 - エラー - 警告 - 情報 - デバッグ <p>INFO または WARN よりも下のしきい値は重いネットワークトラフィックを引き起こす可能性があります。通知を少なくするには、しきい値を FATAL に設定します。通知を多くするには、しきい値を WARN に設定します。</p>
SysUpTime	<p>アプリケーションが実行される時間の量。メッセージの送信時にシステム稼働時間を計算する場合は、値を 0 に設定します。デフォルトは 0 です。</p>

log4j.xml ファイルへの SNMP アペンダの追加

ログメッセージの出力先をカスタマイズするには、log4j.xml ファイルの Data Integration Hub サーバコピーまたは操作コンソールコピーに SNMP アペンダを追加します。

- 編集する log4j.xml ファイルを次のいずれかの場所からバックアップします。
 - Data Integration Hub サーバ: <DIHInstallationDir>/conf
 - 操作コンソール: <DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/shared/classes
 - テキストエディタでファイルを開き、次のテキストを検索します。
SNMP_TRAP is a sample appender
 - 使用するアペンダの実際の値になるようにサンプルアペンダを編集するには、SNMP_TRAP アペンダからコメントインジケータを削除し、必要に応じてアペンダのパラメータと値を編集します。
注: サンプルアペンダを編集する代わりに、サンプルアペンダの下にアペンダを追加することもできます。
 - ログメッセージの形式を設定するには、レイアウト要素を編集します。
次の例は、サンプルアペンダのレイアウト要素を示しています。

```
<layout class="org.apache.log4j.PatternLayout">
  <param name="ConversionPattern" value="%d{ISO8601} %-5p [%c] {%t} %m%n"/>
</layout>
```

 レイアウトパターンオプションの詳細は、Apache Web サイト上の説明を参照します。
<http://logging.apache.org/log4j/1.2/apidocs/org/apache/log4j/PatternLayout.html>
 - アペンダを有効にするには、次のテキストを検索します。

```
<root>
```
 - アペンダリストにアペンダ名を追加します。
次の例は、アペンダ名を追加した後のアペンダリストを示しています。

```
<root>
  <priority value="INFO"/>
  <appender-ref ref="BROKER-LOG"/>
  <appender-ref ref="CONSOLE"/>
  <appender-ref ref="SNMP_TRAP"/>
</root>
```
 - log4j.xml ファイルを保存します。
- SNMP アペンダを追加した後、ログメッセージをリスンするように SNMP マネージャを設定します。

最大の Java ヒープサイズの変更

組み込み Data Integration Hub サーバブローカ、または組み込み Data Integration Hub コンソールブローカの最大のメモリ割り当てを変更することができます。

組み込み Data Integration Hub サーバブローカ

組み込み Data Integration Hub サーバブローカの最大の Java ヒープサイズを変更するには、以下のいずれかのファイルを開きます。

オペレーティングシステム	ファイルの場所
Microsoft Windows	<Data Integration Hub インストールディレクトリ>\bin\setenv.bat
UNIX	<Data Integration Hub インストールディレクトリ>/bin/setenv.sh

最大のヒープサイズは、DX_SERVER_OPTS プロパティで MB 単位で変更します。デフォルトの最大ヒープサイズは 1024MB です。

組み込み Data Integration Hub クライアントブローカ

Data Integration Hub クライアントの最大の Java ヒープサイズを変更するには、以下のいずれかのファイルを開きます。

オペレーティングシステム	ファイルの場所
Microsoft Windows	<Data Integration Hub インストールディレクトリ>\bin\setenv.bat
UNIX	<Data Integration Hub インストールディレクトリ>/bin/setenv.sh

最大のヒープサイズは、CATALINA_OPTS プロパティで MB 単位で変更します。デフォルトの最小ヒープサイズは 128MB で、デフォルトの最大ヒープサイズは 2048MB です。

Data Integration Hub サーバサービス

Microsoft Windows オペレーティングシステムにおける Data Integration Hub サーバサービスの最大の Java ヒープサイズを変更するには、次のファイルを開きます。

<Data Integration Hub インストールディレクトリ>\conf\wrapper.conf

最大のヒープサイズは、wrapper.java.maxmemory プロパティで MB 単位で変更します。デフォルトの最大ヒープサイズは 1024MB です。

Data Integration Hub クライアントサービス

Microsoft Windows オペレーティングシステムにおける Data Integration Hub クライアントサービスの最大の Java ヒープサイズを変更するには、次のコマンドを実行します。

<Data Integration Hub インストールディレクトリ>\DataIntegrationHub\tomcat\bin\tomcat7.exe //US//InfraDIHOpConsoleversion --JvMx <max_heap_size>

最大のヒープサイズは、整数を使用して（英字は使用しない）MB 単位で入力します。デフォルトの最大ヒープサイズは 2048MB です。

データベースユーザーアカウントの資格情報の変更

Data Integration Hub をインストールする場合、Data Integration Hub リポジトリデータベースのユーザーアカウントとパブリケーションリポジトリデータベースのユーザーアカウントのユーザー名とユーザーパスワードを指定します。ダッシュボードとレポートコンポーネントを実行している場合は、オペレーショナルデータストアユーザーアカウントのユーザー名とユーザーパスワードも指定します。

Data Integration Hub をインストールした後にデータベースユーザーアカウントの資格情報を変更する場合は、次の手順を実行します。加える変更に関連する手順のみを実行します。ダッシュボードおよびレポートコンポーネントを実行していない場合は、このコンポーネントにのみ関連する手順をスキップします。

1. Data Integration Hub サービスを停止し、操作コンソールを閉じます。
2. PowerCenter 統合サービスが Data Integration Hub ワークフローを実行していないことを確認します。
3. ダッシュボードおよびレポートコンポーネントを実行し、Data Integration Hub リポジトリまたはオペレーショナルデータストアのユーザーアカウントの資格情報を変更する場合は、PowerCenter Workflow Manager を使用して次の接続の資格情報を更新します。
 - Data Integration Hub リポジトリの場合は、DX_REPO 接続を更新します。
 - オペレーショナルデータストアの場合、DX_ODS 接続を更新します。
4. パスワードを変更する場合は、以下の手順を実行します。
 - a. パスワード暗号化ユーティリティを実行し、新しいパスワードを次の構文で入力します。
 - Windows オペレーティングシステム: `<DIHInstallationDir>\dx-tools\dxpasswd.bat -p <NewPassword>`
 - UNIX オペレーティングシステム: `<DIHInstallationDir>/dx-tools/dxpasswd.sh -p <NewPassword>`パスワード暗号化ユーティリティによってパスワードが暗号化され、暗号化された文字列が表示されます。例えば、`-->ywo+o3cw8+03iLdlhPprW2YA==<--` のように表示されます。
 - b. `--><--` インジケータは付けずに、暗号化された文字列をクリップボードにコピーします。
5. テキストエディタで、次の場所から `dx-configuration.properties` ファイルの両方のコピーを開きます。
`<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/shared/classes/`
`<DIHInstallationDir>/conf/`
6. `dx-configuration.properties` ファイルの両方のコピーで、次の手順を実行します。
 - a. 加える変更に関連するテキストを検索します。
 - Data Integration Hub リポジトリ:
`dx.jdbc.username=<CurrentUsername>`
`dx.jdbc.password=<CurrentPassword>`
 - パブリケーションリポジトリ:
`dih.staging.jdbc.username=<CurrentUsername>`
`dih.staging.jdbc.password=<CurrentPassword>`
 - オペレーショナルデータストア:
`dx.dashboard.jdbc.username=<CurrentUsername>`
`dx.dashboard.jdbc.password=<CurrentPassword>`
 - b. 関連する値を新しい値に置き換えます。パスワードを置き換える場合は、暗号化された文字列を入力します。
 - c. ファイルを保存して閉じます。

注: `dx-configuration.properties` ファイルの両方のコピーの内容は完全に同じでなければなりません。
7. Data Integration Hub 操作コンソールを起動します。

8. オペレーショナルデータストアユーザーアカウントの資格情報を変更する場合は、次の手順を実行します。
 - a. ナビゲータで、**【管理】** > **【システムプロパティ】** をクリックします。
 - b. `dx.dashboard.jdbc.username` の値および `dx.dashboard.jdbc.password` プロパティを新しい値に変更します。パスワードについては、暗号化された文字列を入力します。
9. PowerCenter 統合サービスが実行されていることを確認します。
10. Data Integration Hub リポジトリまたはパブリケーションリポジトリの資格情報を変更する場合は、次の手順を実行します。
 - a. ナビゲータで、**【ハブの管理】** > **【接続】** をクリックします。
【接続】 ページが表示されます。
 - b. 資格情報を変更するリポジトリへの接続の横にある **【テスト接続】** アイコンをクリックします。
 - DIH__REPO. Data Integration Hub リポジトリへの接続。
 - DIH__STAGING. パブリケーションリポジトリへの接続。Data Integration Hub は接続をテストします。この処理は少し時間がかかる可能性があります。
 - c. メッセージ「接続に成功しました」が表示されたら、**【テスト接続】** ダイアログボックスで **【OK】** をクリックします。
11. Data Integration Hub サーバーサービスを開始します。
12. ダッシュボードおよびレポートコンポーネントを実行している場合は、次の手順を実行して、Data Integration Hub オペレーショナルデータストアローダーワークフローをスケジュール設定します。
 - a. PowerCenter Workflow Manager で、オペレーショナルデータストアローダーワークフローが置かれたフォルダを展開し、**【DX_ETL】** を右クリックします。
 - b. メニューから **【スケジュール】** を選択し、PowerCenter Workflow Manager によりワークフローがスケジュールリングおよび実行されるまで待機します。

Data Integration Hub Hadoop サービスの資格情報の変更

Data Integration Hub をインストールすると、Data Integration Hub Hadoop サービスのユーザーアカウントにユーザー名とユーザーパスワードが割り当てられます。

Data Integration Hub Hadoop サービスの資格情報を後日変更する場合は、次の手順を実行します。

1. Data Integration Hub サービスを停止し、操作コンソールを閉じます。詳細については、[「Linux での Data Integration Hub の起動と停止」 \(ページ 116\)](#) を参照してください。
2. PowerCenter 統合サービスが Data Integration Hub ワークフローを実行していないことを確認します。
3. パスワードを変更する場合は、以下の手順を実行します。
 - a. パスワード暗号化ユーティリティを実行し、新しいパスワードを次の構文で入力します。

```
<DIHInstallationDir>/dx-tools/dxpasswd.sh -p <NewPassword>
```

パスワード暗号化ユーティリティによってパスワードが暗号化され、暗号化された文字列が表示されます。例えば、`-->ywo+o3cw8+03iLd1hPprW2YA=` のように表示されます。
 - b. `-->` インジケータは付けずに、暗号化された文字列をクリップボードにコピーします。

4. Data Integration Hub のインストール先のマシンで、次の場所にある dx-configuration.properties ファイルの両方のコピーをテキストエディタで開きます。
`<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/shared/classes/`
`<DIHInstallationDir>/conf/`
5. Data Integration Hub Hadoop サービスコンポーネントのインストール先のマシンと Data Integration Hub のインストール先のマシンが異なる場合は、Data Integration Hub Hadoop サービスのインストール先のマシンで、次の場所にある dx-configuration.properties ファイルをテキストエディタで開きます。
`<DIHInstallationDir>/conf/`
6. dx-configuration.properties ファイルのすべてのコピーで、次の手順を実行します。
 - a. 以下のテキストを検索します。

```
internal.service.username=
internal.service.password=
```
 - b. 関連する値を新しい値に置き換えます。パスワードを置き換える場合は、暗号化された文字列を入力します。
 - c. ファイルを保存して閉じます。

注: dx-configuration.properties ファイルのすべてのコピーの内容は完全に同じでなければなりません。
7. Data Integration Hub 操作コンソールを起動します。
8. PowerCenter 統合サービスが実行されていることを確認します。
9. ナビゲータで、**[ハブの管理]** > **[接続]** をクリックします。
[接続] ページが表示されます。
10. DIH__STAGING__HADOOP 接続の横にある**[テスト接続]**アイコンをクリックします。
Data Integration Hub は接続をテストします。この処理は少し時間がかかる可能性があります。
11. メッセージ「接続に成功しました」が表示されたら、**[テスト接続]** ダイアログボックスで **[OK]** をクリックします。
12. Data Integration Hub サーバースerviceを起動します。詳細については、[「Linux での Data Integration Hub の起動と停止」 \(ページ 116\)](#)を参照してください。

ダッシュボードの設定ファイルの更新

ダッシュボードとレポートコンポーネントを使用し、そのインストール後に Data Integration Hub をホストするマシンの IP アドレスが変更される場合には、ダッシュボードの設定ファイルの IP アドレスを更新する必要があります。

1. ダッシュボードの設定ファイルを次の場所から開きます。
`<Data Integration Hub インストールディレクトリ>\DataIntegrationHub\tomcat\shared\classes\dx_dashboard_configuration.xml`
2. [セキュリティ] セクションの AuthenticationClientAddresses 属性で、Data Integration Hub をホストするマシンへのアクセスを提供するすべてのネットワークインターフェースカードの IP アドレスを更新します (IPv4 アドレスと IPv6 アドレスを含む)。例：

```
<Security AuthenticationSource="SecureKey" SecurityEnabled="True"
AuthenticationClientAddresses="127.0.0.1,0:0:0:0:0:0:1,10.36.8.34,fe80:0:0:0:c1f:167a:bc3c:
8307%11,10.36.112.186,fe80:0:0:0:5c9a:af6e:
87b9:3c08%12,fe80:0:0:0:7c26:627:71d2:4784%14,fe80:0:0:0:5efe:a24:822%16,fe80:0:0:0:5efe:a24:70ba
%16,fe80:0:0:0:5efe:c0a8:7701%17,192.168.119.1,fe80:0:0:0:45cf:
7bcf:f673:4392%18,192.168.162.1,fe80:0:0:0:3516:cd0c:6f8:df39%19,fe80:0:0:0:5efe:c0a8:a201%20"
```

```
RestartSession="False" CacheRights="Session" LogonFailPage="https://HBW180084:18443/dih-console/  
logout.jsp">
```

3. Data Integration Hub サービスを再起動します。

PowerCenter 統合サービスの Data Integration Hub へのアクセスの設定

Data Integration Hub のインストールまたはアップグレード中に Data Integration Hub でワークフローを実行するために使用する PowerCenter 統合サービスを定義します。必要に応じて、別の PowerCenter 統合サービスを Data Integration Hub にアクセスするように設定できます。

PowerCenter 統合サービスの Java クラスパスに、Data Integration Hub クラスファイルのパスを追加します。

1. Administrator ツールにログインし、Data Integration Hub のワークフローを実行する PowerCenter 統合サービスを選択します。
2. **プロセス**タブで、Java SDK クラスパスプロパティを編集し、このプロパティの先頭に Data Integration Hub Java クラスの場所を追加します。

```
<Data Integration Hub インストールディレクトリ>/powercenter/lib/dx-client-powercenter-10.5.0.jar;  
<Data Integration Hub インストールディレクトリ>/powercenter/lib/commons-logging-1.1.3.jar;  
<Data Integration Hub インストールディレクトリ>/powercenter/lib/log4j-1.2.17.jar;  
<Data Integration Hub インストールディレクトリ>/powercenter/lib/activemq-all-5.15.9.jar
```

インストールログファイルに、無効化されたサブスクリプションのリストが含まれている場合は、それらを手動で実行します。インストールログファイルは次のディレクトリにあります: <Data Integration Hub インストールディレクトリ>/logs。

Data Integration Hub では、次の設定を含む自動リレーショナルデータベースサブスクリプションがアップグレード中に無効化されます。

サブスクリプションフィールドマッピング。

新しい行を挿入し、ターゲットの既存の行を更新するサブスクリプション配信戦略。

サブスクリプションを手動で実行する方法の詳細については、「Data Integration Hub Operator」を参照してください。

3. Data Integration Hub コンソールおよびサーバー統合サービスに変数を追加します。

統合サービス	環境変数
DX_CONSOLE_URL	rmi://<HostName>:<dx.tpm.rmi.port>
DX_SERVER_URL	rmi://<HostName>:<dx.rmi.port>

コンソールとサーバーの RMI ポート番号は次の場所にあります。

```
<Data Integration Hub installation directory>\conf\dx-configuration.properties
```

デフォルト:

- dx.tpm.rmi.port: 18096
- dx.rmi.port: 18095

4. 変更を保存します。

PowerCenter バージョン 10 でのリポジトリ接続の設定

ダッシュボードとレポートコンポーネントを使用しており、Data Integration Hub およびオペレーショナルデータストアリポジトリが Microsoft SQL Server にインストールされており、PowerCenter バージョン 10 を使用している場合は、PowerCenter Workflow Manager でリポジトリ接続を設定します。

1. Workflow Manager で、DX_REPO データベース接続にアクセスし、**[接続オブジェクト定義]**ダイアログボックスを開きます。
2. 次のアクションを実行し、**[OK]**をクリックします。
 - a. **[DNS を使用]**を選択します。
 - b. **[接続文字列]**テキストボックスに接続名を入力します。この名前は、ODBC データソース管理者インターフェイスの[ODBC SQL Server ワイヤプロトコルの設定]にある**[データソース名]**フィールドに定義されています。
3. DX_ODS 接続については、手順 [1](#) および [2](#) を繰り返します。

第 9 章

Data Archive 用の Data Integration Hub アクセラレータのインストールと設定

この章では、以下の項目について説明します。

- [Data Archive 用の Data Integration Hub アクセラレータのインストールと設定の概要, 128 ページ](#)
- [インストール前の手順, 128 ページ](#)
- [Data Archive 用 Data Integration Hub アクセラレータのインストール, 129 ページ](#)
- [Data Archive ソース接続の設定, 130 ページ](#)

Data Archive 用の Data Integration Hub アクセラレータのインストールと設定の概要

Data Integration Hub アクセラレータは、Data Integration Hub が Data Archive を使用して生成するイベントをパージするための Data Archive 用プラグインです。

Data Archive 用の Data Integration Hub アクセラレータをインストールしたら、Data Archive ソース接続を設定します。

インストール前の手順

Data Integration Hub アクセラレータを Data Archive にインストールする前に、システムが最低要件を満たしていることを確認して、インストール前の手順を実行します。

1. Data Archive が有効にインストールされていることを確認します。Data Archive の制限付きバージョンが Data Integration Hub とともに提供されます。
2. 特権を作成して Data Integration Hub のリポジトリユーザーに割り当てます。

3. Data Archive のインストールディレクトリで、conf.properties ファイルを開いて次のプロパティの値を設定します。
 - informia.useDbViewsInSeamlessAccess プロパティの値を false に設定します。
 - informia.proceduresToExecute.inArchiveFromHistory プロパティの値を java://com.informatica.b2b.dx.ilm.MoveDXDocStoreDatabaseDAOImpl に設定します。

注: プロパティを変更する前に conf.properties ファイルをバックアップします。
4. Data Archive を再起動します。

Data Archive 用 Data Integration Hub アクセラレータのインストール

Data Archive 用 Data Integration Hub アクセラレータをインストールするのは、Data Integration Hub および Data Archive をインストールしてからです。

アクセラレータをインストールする前に Data Archive をインストールしてインストール前の手順を実行します。

Data Archive の最小サポート対象バージョンは 6.1 です。Data Archive バージョン 6.1 をインストールしている場合、EBF 11801 と EBF 11672 もインストールします。

1. 管理者特権で Data Archive にログインし、**[アクセラレータ]** > **[Enterprise Data Manager]** をクリックします。
Enterprise Data Manager が表示されます。
2. Enterprise Data Manager で、**[ファイル]** > **[インポート]** > **[アクセラレータ]** をクリックします。
[メタデータのインポートオプション] ウィンドウが表示されます。
3. **[EDM 経由でインポートを続行]** を選択し、**[OK]** をクリックします。
4. <DIHInstallationDir>/ILM-accelerator に移動し、ディレクトリ内のすべての XML ファイルのインポートを選択します。
注: ディレクトリ内のサブフォルダはインポートしません。
Enterprise Data Manager でインポートプロセス中に進行状況ウィンドウが表示されます。
5. インポートプロセスを確認するには、Enterprise Data Manager を再起動して、**[エクスプローラ]** ペインの Data Integration Hub ノードにアクセラレータが表示されることを確認します。
6. アクセラレータを Data Archive のドロップダウンリストに追加するには、Data Integration Hub リポジトリの資格情報でデータベースにログインし、Data Archive リポジトリで SQL スクリプトを実行します。このスクリプトは、次のいずれかの場所にあります。

データベース	パス
Oracle	<DIHInstallationDir>/ILM-accelerator/sql/oracle_ilm_repository_update.sql
Microsoft SQL Server	<DIHInstallationDir>/ILM-accelerator/sql/sqlserver_ilm_repository_update.sql

Data Archive ソース接続の設定

データベースからイベントをパージする前に、Data Archive ソース接続を設定します。

ソース接続の作成については、『*Data Archive 管理者ガイド*』を参照してください。

1. アクセラレータにログインします。
2. **【管理】** > **【新規ソース接続】** をクリックします。
3. データベース固有の接続プロパティを入力します。
4. 接続のアプリケーションバージョンを **【Data Integration Hub 10.5.0】** に設定します。
5. **【ソース/ステージングの添付ファイルの場所】** プロパティをプロダクションドキュメントストアのルートパスに設定します。

このパスは、Data Integration Hub システムプロパティ `dx.system.document.store.folder` で定義したパスと同じです。

6. 接続先が SQL Server データベースの場合、**【ILM 関数をコンパイルする】** オプションを選択します。

注: **【ソース/ステージングの添付ファイルの場所】** プロパティで指定した場所には、Data Archive のパージプロセスからアクセスできる必要があります。

第 10 章

Data Integration Hub のインストールに関するトラブルシューティング

この章では、以下の項目について説明します。

- [Data Integration Hub のインストールに関するトラブルシューティングの概要, 131 ページ](#)
- [Data Integration Hub Hadoop サービスのトラブルシューティング, 131 ページ](#)
- [インストールログファイル, 134 ページ](#)

Data Integration Hub のインストールに関するトラブルシューティングの概要

インストーラが Data Integration Hub を作成し、設定するときにエラーが発生する場合があります。インストールおよびアップグレードをトラブルシューティングするには、インストールログファイルを使用します。

Data Integration Hub Hadoop サービスをインストールする場合は、サービスのインストールをトラブルシューティングします。

Data Integration Hub Hadoop サービスのトラブルシューティング

Data Integration Hub Hadoop サービスをインストールするときは、次のトラブルシューティングのヒントに注意してください。

`DIH__STAGING__HADOOP` 接続のテストは成功しますが、パブリケーションを実行しようとするとう失敗します。

エラーメッセージの例を次に示します。

Wrong FS: hdfs://10.40.40.96:8020/user/infa_user/TEST_FILTER_87003, expected: hdfs://tavdxcdh53n1:8020

Data Integration Hub 操作コンソールの[接続]ページで DIH__STAGING__HADOOP 接続を編集し、**[NameNode URI]**が、core-site.xml ファイルのプロパティ fs.default.name または fs.defaultFS の設定と同じになるようにします。

DIH__STAGING__HADOOP 接続をテストすると失敗し、次のエラーが表示されます。データアクセス接続テストが失敗し、次のエラーが発生しました。DXServerException: Apache Spark への接続を確立できません。

以下のアクションを実行します。

1. Data Integration Hub Hadoop サービスのログファイルで詳細な情報を確認します。詳細については、[「デフォルトのログファイル」 \(ページ 119\)](#)を参照してください。
2. Apache Spark が稼働していることを確認します。
3. Data Integration Hub Hadoop サービスのインストール先のマシンで、次の場所にある dx-configuration.properties ファイルをテキストエディタで開きます。

```
<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/shared/classes/
```

- dih.hadoop.service.spark.url の値が正しいことを確認します。詳細については、[「Hadoop パブリケーションリポジトリに対応するための環境の設定」 \(ページ 75\)](#)を参照してください。
- dih.hadoop.service.spark.version の値が正しいことを確認します。

DIH__STAGING__HADOOP 接続をテストすると失敗し、次のエラーが表示されます。データアクセス接続テストが失敗し、次のエラーが発生しました。DXServerException: 例外: org/apache/hadoop/fs/FileSystem。

Data Integration Hub Hadoop サービスのクラスパスの定義が正しくありません。

以下のアクションを実行します。

1. Data Integration Hub Hadoop サービスのインストール先のマシンで、次の場所にある dih-hadoop-service.xml ファイルをテキストエディタで開きます。

```
<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/conf/Catalina/localhost
```

2. JAR ファイルの場所を正しく設定します。

DIH__STAGING__HADOOP 接続をテストすると失敗し、次のエラーが表示されます。データアクセス接続テストが失敗し、次のエラーが発生しました。DXServerException: Apache Hive への接続を確立できません。

以下のアクションを実行します。

1. Data Integration Hub Hadoop サービスのログファイルで詳細な情報を確認します。詳細については、[「デフォルトのログファイル」 \(ページ 119\)](#)を参照してください。
2. Apache Hive が稼働していることを確認します。
3. Data Integration Hub Hadoop サービスのインストール先のマシンで、次の場所にある dx-configuration.properties ファイルをテキストエディタで開きます。

```
<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/shared/classes/
```

- dih.hadoop.service.hive.url の値が正しいことを確認します。詳細については、[「Hadoop パブリケーションリポジトリに対応するための環境の設定」 \(ページ 75\)](#)を参照してください。

4. ログファイルに `java.lang.ClassNotFoundException: org.apache.hive.jdbc.HiveDriver` というメッセージ、またはこれと同様のメッセージが記録されている場合は、Data Integration Hub Hadoop サービスのクラスパスの定義が正しくありません。以下のアクションを実行します。
 - a. Data Integration Hub Hadoop サービスのインストール先のマシンで、次の場所にある `dih-hadoop-service.xml` ファイルをテキストエディタで開きます。

```
<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/conf/Catalina/localhost
```
 - b. クラスパスを正しく設定します。詳細については、[「Hadoop パブリケーションリポジトリに対応するための環境の設定」 \(ページ 75\)](#)を参照してください。

DIH__STAGING__HADOOP 接続をテストすると失敗し、次のエラーが表示されます。 データアクセス接続テストが失敗し、次のエラーが発生しました。DXServerException: Hadoop ファイルシステムが使用可能ではありません。

以下のアクションを実行します。

1. Apache Hadoop が稼働していることを確認します。
2. Data Integration Hub Hadoop サービスのインストール先のマシンで、次の場所にある `dih-hadoop-service.xml` ファイルをテキストエディタで開きます。

```
<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/conf/Catalina/localhost
```
3. JAR ファイルの正確な位置など、ファイル内のすべての設定が正しいことを確認します。詳細については、[「Hadoop パブリケーションリポジトリに対応するための環境の設定」 \(ページ 75\)](#)を参照してください。

DIH__STAGING__HADOOP 接続をテストすると失敗し、次のエラーが表示されます。 データアクセス接続テストが失敗し、次のエラーが発生しました。DXServerException: ResourceAccessException: 接続が無効です。Data Integration Hub Hadoop サービスが稼働していません。

Data Integration Hub Hadoop サービスが稼働していません。

Data Integration Hub Hadoop サービスのインストール先のマシンにログインし、サービスを実行します。詳細については、[「Linux での Data Integration Hub の起動と停止」 \(ページ 116\)](#)を参照してください。

パブリケーションイベントまたはサブスクリプションイベントのステータスが処理中のまま変化しません

Data Integration Hub Hadoop サービスの設定が正しいことを確認します。

以下のアクションを実行します。

1. Data Integration Hub サーバーのインストール先のマシンで、次の場所にある `dx-configuration.properties` ファイルをテキストエディタで開きます。

```
<DIHInstallationDir>/DataIntegrationHub/tomcat/shared/classes/
```

`dx.server.url` の値が正しいことを確認します。
2. Data Integration Hub Hadoop サービスのインストール先のマシンと Data Integration Hub のインストール先のマシンが異なる場合は、Data Integration Hub Hadoop サービスのインストール先のマシンで、上記と同じ場所にある `dx-configuration.properties` ファイルをテキストエディタで開き、`dx.server.url` の値が正しいことを確認します。
3. Data Integration Hub Hadoop サービスのインストール先のマシンで、`dx.server.url` に定義されている URL を ping し、アクセス可能であることを確認します。

パブリケーションとサブスクリプションの実行が失敗します。Data Integration Hub Hadoop サービスのログを見ると、サービスは localhost:8020 へのアクセスを繰り返し試みたものの、いずれも失敗したことが示されています。

Cloudera Manager で、オプション[NameNode をワイルドカードアドレスにバインド]を有効にし、HDFS サービスを再起動します。

インストールログファイル

インストールログファイルを使用すると、Data Integration Hub のインストールまたはアップグレードをトラブルシューティングできます。

インストールログファイルは、インストーラによりインストール中およびインストール後に作成されます。インストールログファイルは、次のディレクトリにあります。

<DIHInstallationDir>/logs

第 11 章

アンインストール

この章では、以下の項目について説明します。

- [アンインストールの概要, 135 ページ](#)
- [Windows オペレーティングシステムからの Data Integration Hub のアンインストール, 135 ページ](#)
- [UNIX オペレーティングシステムからの Data Integration Hub のアンインストール, 136 ページ](#)

アンインストールの概要

マシンにインストールしたコアアプリケーションと追加コンポーネントを削除するには、Data Integration Hub をアンインストールします。

このアンインストールプロセスでリポジトリまたは Data Integration Hub ドキュメントストアは削除されません。

アンインストールプロセスは、Data Integration Hub がインストールされているオペレーティングシステム (Windows または UNIX) によって異なります。

Windows オペレーティングシステムからの Data Integration Hub のアンインストール

1. Data Integration Hub サービスをすべて停止します。
2. [プログラムの追加/削除] コントロールパネルで、**Data Integration Hub** を右クリックし、**[アンインストール]** を選択します。
Data Integration Hub のアンインストールウィザードが表示されます。
3. **[次へ]** をクリックします。
[アンインストール前のサマリ] 画面が表示されます。
4. **[アンインストール]** をクリックします。
[Data Integration Hub のアンインストール] 画面に、アンインストールプロセスの進捗が表示されます。アンインストールプロセスが完了すると、**[アンインストールの完了]** 画面が表示されます。
5. **[完了]** をクリックし、ウィザードを閉じます。

UNIX オペレーティングシステムからの Data Integration Hub のアンインストール

1. Data Integration Hub サービスをすべて停止します。
2. Data Integration Hub のインストールディレクトリから Uninstall.exe ファイルを実行します。
[Data Integration Hub のアンインストール] セクションが表示されます。
3. [次へ] をクリックします。
[アンインストール前のサマリ] セクションが表示されます。
4. [アンインストール] をクリックします。
アンインストーラにより、アンインストールプロセスの進捗が表示されます。アンインストールプロセスが完了すると、[アンインストールの完了] セクションが表示されます。
5. [完了] をクリックし、アンインストーラを終了します。

索引

D

Data Archive

Data Integration Hub アクセラレータのインストール [128](#), [129](#)
ソース接続の設定 [130](#)

Data Integration Hub Hadoop サービス
資格情報の変更 [124](#)

H

Hadoop

構成ファイル [75](#)

P

PowerCenter

接続 [78](#), [80](#)

R

RMI ポート番号

変更 [118](#)

S

SNMP アペンダ

パラメータ [120](#)
ファイルへの追加 [121](#)

SNMP ログ

設定 [119](#)

あ

アップグレードした後に
設定変更の再適用 [111](#)
タスク [110](#)

説明 [110](#)

アップグレードする前に

説明 [85](#)

タスク [85](#)

い

イベントのバージ

Data Archive [128](#), [129](#)

インストーラ要件

最小システム要件 [16](#)

インストール

UNIX からのアンインストール [136](#)

Windows からのアンインストール [135](#)

インストール (続く)

コンポーネント [9](#)

追加コンポーネント [10](#)

インストール後

Hadoop パブリケーションリポジトリ [75](#)

PowerCenter サーバープラグインの登録 [72](#)

PowerCenter 統合サービス [126](#)

タスク [71](#)

データベースパーティションの設定 [75](#)

説明 [71](#)

お

オペレーティングシステム

最小システム要件 [16](#)

さ

サービス

Linux 上での起動 [116](#)

Windows での起動と終了 [115](#), [116](#)

し

資格情報

Data Integration Hub Hadoop サービスの変更 [124](#)

リポジトリユーザーアカウントに対する変更 [123](#)

システム要件

ユーザーアカウント [12](#)

せ

接続

リポジトリ [78](#), [80](#)

設定

Java ヒープサイズ [122](#)

SNMP ログ [119](#)

そ

操作コンソール

ログイン [78](#)

ソース接続

設定 [130](#)

た

ダッシュボードとレポート

オペレーショナルデータストアイベントローダーワークフローのインポート [82](#)

と

ドキュメント保存
設定 [22](#)

は

パーティション
説明 [75](#)

ふ

ブラウザ
最小システム要件 [16](#)

ほ

ポート番号
デフォルト [14](#)

ゆ

ユーザーアカウント
インストール [12](#)

り

リポジトリ
接続 [78](#), [80](#)
リポジトリユーザーアカウント
資格情報の変更 [123](#)

ろ

ログファイル
場所 [119](#)